

家

(上)

島崎藤村

青空文庫

一

橋本の家の台所では昼飯ひるの仕度に忙しかった。平素ふだんですら男の奉公人だけでも、大番頭から小僧まで入れて、都合六人のものが口を預けている。そこへ東京からの客がある。家族を合せると、十三人の食う物は作らねばならぬ。三度々この仕度をするのは、主婦のお種に取って、一仕事であつた。とはいへ、こういう生活に慣れて来たお種は、娘や下婢おんなを相手にして、まめまめしく働いた。

炉辺ろべは広がった。その一部分は艶々つやつやと光る戸棚とだなや、清潔な板の間で、流なが許しもとで用意したものは直にそれを炉の方へ運ぶことが出来た。暗い屋根裏からは、煤すすけた竹筒じきいの自在かぎが釣かるしてあつて、その下で夏でも火が燃えた。この大きな、古風な、どこか厳いしい屋造やづくりの内へ静かな光線を導くものは、高い明窓あかりまどで、その小障子の開いたところから青く透とおき徹とおるような空が見える。

「カルサン」という労働はかまの袴はかまを着けた百姓が、裏の井戸から冷い水を汲くんで、流許かつへ担かついで来た。お種はこの隠居にも食わせることを忘れてはいなかった。

お種は夫と一緒に都会の生活を送ったことも有り——娘のお仙が生れたのは丁度その東京時代であつたが、こうして地方にも最早長いこと暮しているの、話す言葉が種々に混つて出て来る。

「お春や」とお種は下婢の名を呼んで尋ねてみた。「正太はどうしたろう」

「若旦那様かなし。あの山瀬へお出たぞなし」

こう十七ばかりに成るお春が答えたが、その娘らしい頬は何の意味もなく紅く成つた。

「また御友達のところまで話し込んでると見える」とお種は考え深い眼付をして、やがて娘のお仙の方を見て、「山瀬へ行くと、いつでも長いから、昼飯には帰るまい——兄さんのお膳は別にして置けや」

お仙は母の言うなりに従順に動いた。最早処女の盛りを思わせる年頃で、背は母よりも高い位であるが、子供の時分に一度煩つたことがあつて、それから精神の發育が遅れた。自然と親の側を離れることの出来ないものに成っている。お種は絶えず娘の保護を怠らないという風で、物を言付けるにも、なるべく静かな、解り易い調子で言つて、無邪気な頭脳の内部を混雑させまいとした。お種は又、娘の友達にもと思つて、普通の下婢のようにはお春を取扱つていなかった。髪もお仙の結う度に結わせ、夜はお仙と同じ部屋に寝かし

てやつた。

主人あるじや客をはじめ、奉公人の膳めいめいが各自の順でそこへ並べられた。心の好いお仙は自分より年少とししたの下婢きげんの機嫌そこをも損ねまいとする風である。

仕度の出来た頃、母はお春と一緒に働いている娘の有様を人形のように眺ながめながら、

「お仙や、仕度が出来ましたからね、御客様にそう言っていらいっしやい」

と言われて、お仙はそれを告げに奥の部屋の方へ行つた。

東京からの客というは、お種が一番末の弟にあたる三吉と、ある知人しりびとの子息むすことであつた。この子息の方は直樹と言つて、中学へ通っている青年で、三吉のことを「兄さん、兄さん」と呼んでいる。都会で成長した直樹は、初めて旅らしい旅をして、初めて父母の故郷を見たと言っている。二人は橋本の家で一夏を送ろうとして来たのであつた。

「御客様は炉辺がめずらしいそうですから、ここで一緒に頂きましょう」

とお種はそこへ来て膳に就いた夫の達雄に言つた。三吉、直樹の二人もその傍に古風な膳を控えた。

「正太は？」

と達雄は、そこに自分の子息が見えないのを物足らなく思うという風で、お種に聞いてみる。

「山瀬へ行ったそうですから、復た御呼ばれでしょう」

こうお種は答えた。

蠅は多かった。やがてお春の給仕で、一同食事を始めた。御家大事と勤め顔な大番頭の嘉助親子、年若な幸作、その他手代小僧なども、旦那や御新造の背後を通じて、各自定まった席に着いた。奉公人の中には、二代、三代も前からこうして通つて来るのも有る。

この人達は、普通に雇い雇われる者とは違つて、寧ろ主従の關係に近かつた。

裏の畠で働く百姓の隠居も、その時手拭で足を拭いて、板の間のところにカシコマツた。

「さあ、やつとくれや」

と達雄は慰勞うように言つた。隠居は幾度か御辞儀をして、「頂戴」と山盛の飯を押頂いて、それから皆なと一緒に食ひ始めた。

「三吉」とお種は弟の方を見て、「田舎へ来て物を食べると、子供の時のことを思出すで

しよう。直樹さんやお前さんに色々食べさせたい物が有るが、追々と御馳走しますよ。お前さんが子供の時には、ソラ、赤い芋茎ずいきの御漬物おつけものなどが大好きで……今に吾家うちでも食べさせるぞや」

こんなことを言出したので、主人も客も楽しく笑いながら食った。

お種がここへ嫁かたづいて来た頃は、三吉も郷里の方に居て、まだ極く幼少おさなかった。その頃は両親とも生きていて、老祖母おばあさんまでも壮健たつしやで、古い大きな生家さとの建築物たてものが焼けずに形を存していた。次第に弟達は東京の方へ引移って行つた。こうして地方に残って居るものは、姉弟中でお種一人である。

「お春、お前は知るまいが」とお種は久し振で弟と一緒に成つたことを、下婢おんなにまで話さずにはいられなかった。「彼あれが修業に出た時分は、旦那さんも私もやはり東京に居た頃で、丁度一年ばかり一緒に暮したが……あの頃は、お前、まだ彼が鼻涙はなを垂らしていたよ。どうだい、それがあんな男に成つて訪ねて来た——えらいもんじやないか」

お春は団扇うちわで蠅を追いながら、皆なの顔を見比べて、娘らしく笑った。

旧むかしからの習慣として、あだかも茶席へでも行つたように、主人から奉公人まで自分々々の膳の上の仕末をした。食べ終つたものから順に茶碗ちやわんや箸はしを拭いて、布巾ふきんをその上に掩かぶ

せて、それから席を離れた。

この橋本の家は街道に近い町はずれの岡の上にあった。昼飯ひるの後、中学生の直樹は谷の向側にある親戚を訪ねようとして、勾配こうばいの急な崖がけについて、折れ曲った石段を降りて行った。

三吉は姉のお種に連れられて、めずらしそうに家の内部ななかを見て廻った。

「三吉、ここへ来て見よや。これは私がお嫁に来る時に出来た部屋だ」

こう言ってお種が案内したのは、奥座敷の横に建増した納戸なんどで、箆たんす笥すだの、鏡台だの、その他種々いろいろな道具が置並べてある。襖ふすまには、亡なくなった橋本の老祖母さんの里方の縁続きにあたる歌人の短冊たんざくなどが張付けてある。

「私が橋本へ来るに就いて、髪を結う部屋が無くては都合が悪かろうと言って、ここの老祖母さんが心配して造つて下すつた——老祖母さんはナカナカ届いた人でしたからね」とお種は説き聞かせた。

「へえ、その時分は姉さんも若かつたんでしようネ」と三吉が笑った。

「そりやそうサ、お前さん——」と言いかけて、お種も笑って、「考えて御覧な——私がお嫁に來たのは、今のお仙より若い時なんですもの」

薬研やげんで物を刻おろす音が壁に響いて来る。部屋の障子の開いたところから、斜はすに中の間の一部が見られる。そこには番頭や手代が集つて、先祖からこの家に伝わった製薬の仕事を励んでいる。時々盛んな笑声も起る……

「何かまた嘉助が笑わしていると見えるわい」

と言いながら、お種は弟を導いて、奥座敷の暗い入口から炉辺の方へ出た。大きな看板の置いてある店の横を通り過ぎると、坪庭に向いた二間ばかりの表座敷がその隣にある。

三吉は眺め廻して、「心こころ地もちの好い部屋だ——どうしても田舎の普請は違いますナア」「ここをお前さん達に貸すわい」と姉が言った。「書籍ほんを読もうと、寝転ねころぼうと、どうなりと御勝手だ」

「姉さん、東京からこういうところへ来ると、夏のような気はしませんね」

「平素ふだんはこの部屋は空あいてる。お客でもするとか、馬市でも立つとか、何か特別の場合でなければ使用つかわない。お前さんと、直樹さんと、正太と、三人ここに寝かそう」

「ア——木曾川の音がよく聞える」

三吉は耳を澄まして聞いた。

間もなくお種は弟を連れて、店先の庭の方へ降りた。正太が余暇に造ったという養鶏所だの、桑畠だのを見て、一廻りして裏口のところへ出ると、傾斜は幾層かの畠に成っている。そこから小山の上の方の耕された地所までも見上げることが出来る。

二人は石段を上った。掩おほい冠おほさったような葡萄ぶどう棚の下には、清水が溢あふれ流れている。その横にある高い土蔵の壁は日をうけて白く光っている。百合ゆりの花の香においもして来る。

姉は夏梨の棚の下に立って、弟の方を顧みながら、「この節は毎朝早く起きて、こうして畠の上の方まで見て廻る。一頃とは大違いで、床に就くようなことは無くなった——私も強くなつたぞや」

「姉さんは何処どこか悪かつたんですか」と三吉は不審いぶかしそうに。

「ええ、持病で寝たり起きたりしてサ……」

「持病とは？」

姉は返事に窮こまつて、急に思い付いたように歩き出した。「まあ、病氣の話などは止そう。それよりか私が丹精した畠でもお前さんに見て貰おう。御蔭で今年は野菜も好く出来ましたよ」

野菜畠を見せたいというお種の後に随ついて、弟も一緒に傾斜を上った。坂の途中を横に折れると、百合、豆などの種類が好く整理して植付けてある。青い暗い南かぼちゃ瓜棚の下を通つて、二人は百姓の隠居の働いているところへ出た。

石垣いしがきに近く、花園を歩むような楽しい小径こみちもあつた。そこから谷底の町の一部を下み瞰おろすことが出来る。

お種は眺め入りながら、

「私も、橋本へ来てからこの歳に成るまで、町へ出たことが無いと言つても可いい位……真ほ実に家の内うちなかにばかり引込みきりなんですよ……用が有る時はどうするなんて、三吉などは不思議に思ふかも知れないが、買物には小僧も居れば、下婢おんなも居る。嘉助始め皆なで外の用を好く達たしてくれる。ですから、私は家を出ないものとしていますよ……女というものは、お前さん、こうしたものですからね」

こんな話を弟にして聞かせて、それから直樹が訪ねて行つた親戚の家々を指して見せた。いずれも風雪を凌しのぐ為に石を載せた板屋根で、深い木曾山中の空氣に好く調和して見える。

「母親さん、沢田さんがお出た」

とそこへお仙が客のあることを知らせに来た。三人は一緒に母屋の方へ降りて行つた。物置蔵の側を帰りがけた頃、お種は娘と並んで歩きながら、

「お仙や、お前は三吉叔父さん、三吉叔父さんと、毎日言い暮していたツけが——どうだね、三吉叔父さんが被入しつて嬉しいかね」

と母に言われて、お仙はどう思うことを言い表して可いか解らないという風であつた。この無邪気な娘は、唯、「ええ、ええ」と力を入れて言つていた。

庭伝いに奥座敷へ上つてから、お種は沢田という老人を三吉に紹介した。この老人は、直樹の叔父にあたる非常な神経家で、潔癖が嵩じて一種の痼疾のように成つていたが、平素癩の起らない時は口の利きようなども至極丁寧にする人である。

老人は三吉に向つて、よく直樹を東京から連れて来てくれたと言つて、先ずその礼を述べた。

「三吉」と姉は引取つて、「この沢田さんは、やはりお前さんの父親さんのように、国学や神道の御話が好きで……父親さんが生きてる時分には、よく沢田さんの御宅へ伺つては、歌などを詠んだものだぞや」

こうお種が言出したので、老人も思出したように、

「ええ……左様だ……貴方がたの父親さんは、こう大きな懷をして、一ぱい書籍を振込んで歩かつせる人で……」

思わず三吉は、この姉の家で、父の旧友の一人に逢った。背の低い、瘡ぎすな、武士らしい威厳を帯びた、憂鬱と老年とで震えているような人を見た。三吉も狂死した父のことを考える年頃である。

主人の達雄は高い心の調子でいる時であつた。中の間にある古い柱の下が日々の業務を執るところで、番頭や手代と机を並べて、朝は八時頃から日の暮れるまで倦むことを知らずに働いた。沈香、麝香、人参、熊の胆、金箔などの仕入、遠国から来る薬の注文、小包の発送、その他達雄が監督すべきことは数々あつた。包紙の印刷は何程用意であるか、秋の行商の準備は何程出来たか、と達雄は気を配って、時には帳簿の整理のかたわら、自分でも包紙を折ったり、印紙を貼ったりして、店の奉公人を助け励ました。

そればかりでは無い。達雄は地方の紳士として、外部から持込んで来る相談にも預り、

種々土地の為に尽さなければ成らない事も多かった。尤も、政党の争闘などはなるべく避けている方で、祖先から伝わった業務の方に主に身を入れた。達雄の奮発と勉強とは東京から来た三吉を驚かした位である。

三吉が着いて三日目にあたる頃、連の直樹は親戚の家へ遊びに行った。その日は午後から達雄も仕事を休んで、奥座敷の方に居た。そこは家のものの居間にしてあるところで、襖一つ隔てて娘達の寐る部屋に続いている。「お仙や」とお種は茶戸棚の前に坐りながら呼んだ。お仙は次の新座敷に小机を控えて、余念もなく薬の包紙を折っていたが、その時面長な笑顔を出した。

「お前さんも御休みなさい。皆なで御茶を頂きましょう」

とお種に言われて、お仙は母の側へ来て、近過ぎるほど顔を寄せた。母の許を得たというところがこの娘に取って何よりも嬉しかった。

三吉も入って来た。

「貴方」とお種は夫の方を見て、「ちよつとまあ見てやって下さい。三吉がそこへ来て坐った様子は、どうしても父親さんですよ……手付なぞは兄弟中で彼が一番克く似てますよ」

「阿爺もこんな不恰好な手でしたかね」と三吉は笑いながら自分の手を眺める。

お種も笑つて、「父親さんが言うには、三吉は一番学問の好きな奴だで、彼奴^{あいつ}だけは俺^{おれ}の事業^{しごと}を継^つがせにやならん……何卒^{どうか}して彼奴^{あいつ}だけは俺^{おれ}の子にしたいもんだなんて、よくそう言い言^いいたよ」

三吉は姉の顔を眺めた。「あの可畏^{こわ}い阿爺^{おや}が生きていて、私達^{わたし}の爲^{ため}てることを見ようものなら、それこそ大変です。弓の折かなんかで打^ぶたれるような目に逢^あいます」

「しかし、お前^{まへ}さん達の仕事は何処^{どこ}へでも持つて行かれて都合が好^よいね」とお種^{おね}が笑つた。達雄^{たつお}は胡坐^{あぐら}にした膝^{ひざ}を癖^{くせ}のように動^ゆぶりながら、「近頃^{あぐら}の若い人^{ひと}には、大分種々^{おほい}な物を書^かく人が出来^{でき}ましたネ。文学——それも面白^{おもしろ}いが、定^{きま}つた収入^{しゅうに}が無^ないのは一番困^{こま}りましよう」

「言^いわば、お前^{まへ}さん達^{たち}のは、道楽^{だうらく}商売^{しょうばい}」とお種^{おね}も相槌^{あいづち}を打^うつ。

三吉は答^{こた}えなかつた。

「正太^{せいた}もね、お前^{まへ}さん達の書^かいた物は好^よきで、よく読^よむ」とお種^{おね}は言葉^{ことば}を続^つけて、「やつぱり若い者は若い者同志^{どうし}で、何処^{どこ}か似たような処^{ところ}も有^あろうから、なるべく彼^あれにも読^よませるようにしてしますよ……ええええ、そりやあもう今の若い者が私達^{わたし}のような昔^{むかし}者の氣^きでは駄目^{だめ}です——そんなことを言^いつたつて、三吉、これでも若い者^{若者}には負^{まか}せない氣^きだぞや——

こうまあ私は思うから、なるべく正太の気分が開けて行くように……何かまたそういう物でも読ませたら、彼の為に成るだろうと思つて……」

「為に成るようなことは、先ずありません」

こう三吉が言つたので、お種は夫と顔を見合せて、苦にが笑わらいした。

「お仙、兄さんにも、御茶が入りましたからツて、そう言つていらツしやい」

こうお種は娘に言付けて、表座敷の方に居る正太を呼びにやつた。

正太と三吉とは、年齢としが三つしか違わない。背は正太の方が隆たかい。そこへ来て三吉の傍に坐ると、叔父甥おいというよりか兄弟のように見える。

正太が入つて来ると同時に、急に達雄は厳格に成つた。そして、黙しつて了しまつた。

正太もあまり口数を利かないで、何となく不満な、焦いら々いらした、とはいえ若々しい眼付をしながら、周囲あたりを眺め廻した。

古い床の間の壁には、先祖の書いた物が幅広な軸に成つて掛つてゐる。それは竹翁ちくおうと言つて、橋本の葉はを創はじめた先祖で、毎年の忌日には必ず好物の栗飯を供え祭るほど大切な

人に思われている。その竹翁の精神が、何時^{いつ}までも書いた筆に遺^{のこ}つて、こうして子孫に臨んでいるかのようにも見える。

この室内の空気は若い正太に何の興味をも起させなかった。彼の眼には、すべてが窮屈で、陰気で、物憂^{ものう}いほど単調であつた。彼は親の側に静止^{じつと}していられないという風で、母が注いで出した茶を飲んで、やがてまたぶいと部屋を出て行つて了つた。

達雄は嘆息して、

「三吉さん、お前さんの着いた日から私は聞いてみたい聞いてみたいと思つて、まだ言わずにすることが有るんですが……お前さんが持つているその時計ですね……」

「これですか」と三吉は兵児帯^{へこおび}の間から銀側時計を取出して、それを大きな卓^{つくえ}の上に置いた。

「極く古い時計でサ、裏にこんな彫のしてある——」

「実はその時計のことで……」と達雄は言淀^{よど}んで、「正太を東京へ修業に出しました時に、私が特に注意して、金時計を一つくれてやつたんです——まあ、そういう物でも持たしてやれば、普通の書生とも見られまいかと思ひまして——ネ。ところが一夏、彼^{あれ}が歸つて来た時に、他の時計をサゲてる。金時計はどうしたと私が聞きましたら、友達から是非貸し

てくれと言われて置いて来ました、そのかわり友達のを持って来ました、こう言うじゃありませんか。どうでしょう、その友達の時計が今度来たお前さんの帯の間に挟はさまつてる……」

三吉は笑出した。「一体これは宗そうさんの時計です。近頃私が宗さんから貰ったんです。多分正太さんも宗さんから借りて来たんでしょう」

達雄はお種と顔を見合せた。宗さんとは三吉が直ぐ上の兄にあたる宗蔵のことである。「どうも不思議だ、不思議だと思った」と達雄が言った。

「三吉の方が正直なと見えるテ」とお種も考深い眼付をする。

金側の時計が銀側の時計に変わったということは、三吉にはさ程不思議でもなかった。

「正直なと見えるテ」と言われる三吉にすら、それ位のことは若いものに有勝ありがちだと思われた。達雄はそうは思わなかった。

「こういう人に成って行くかサ」とお種は更に吾子わがこのことを言出して、長い羅宇らうの煙管きせるで煙草たばこを吸付けた。「一体彼は妙な気分の奴で、まだ私にも好く解らないが——為する事がど

うも危あぶなくて危あぶなくて——」

「正太さんですか」と三吉も巻煙草をふか煙しながら、「なにしろ、まだ若いんですもの。話をして見ると心こころ地もちの好人ですがねえ。どうかするとこう物もの凄すげいような感じのすることが有る。あそこは、僕は面白いところじゃないかと思えますよ」

「実は、私も、そうも思つて見てる」

こう達雄が言つた。

「何卒どうかまあウマくやつて貰わないと——橋本の家に取つては大事な人だで」とお種は三吉の方を見て、「兄さんもこの節は彼のことばかり心配しますよ。吾家うちでも、御蔭で、大分商法が盛んに成つて、一頃から見ると倍も薬が売れる。この調子で行きさえすれば内輪うちわは楽なものなんですよ。他に何も心配は無い。唯、彼が……」と言いかけて、声を低くして、「近頃懇意にする娘が有るだテ」

「有りそうなことだ」と三吉は正太を弁護するように言う。

「お前さんは直にそうだ」とお種は叱つて見せて、「若いものの肩ばかり持つもんじゃ有りませんよ」

「やはりこの町の人ですか」と三吉が聞いた。

「ええ、そうですよ」とお種は受けて、「兄さんにしろ、私にしろ、どうもそこが気に入らん」

こういう話をして居る間、お仙は手持無沙汰に起ったり坐ったりして、時には親達の話の中で解ったと思うことが有る度に、独り微笑ひとほほえんだりしていたが、つと母の傍へ寄った。

「お仙ちゃん、御話が解りますかネ」とお種は母らしい調子で言った。

「ええ、解る」とお仙は両親の顔を見比べながら。

「解るは、よかった」達雄は笑った。

お種は三吉の方を見て、「すこし込入った話に成ると、お仙には好く解らない風だ。そのかわり、奇麗な気分のものだぞや」

「真実ほんとに、好い姉さんに成りましたネ」と三吉が言う。

「彼女あれも最早女もうですよ。その事は私がよく言つて聞かせて、誰にでも普通あたりまえに通とおに有ることだからツて教えて置いたもんですから、ちゃんと承知してる。こうして大きく成つて、可お惜しいようなものだが、仕方が無い。行く行くは一軒別にでもして、彼女が独りで静かに暮せるようだったら、それが何よりですよ」

「そんなことをしないたツて、お嬢さんを貰つてやるが可い」と三吉は戯れるように言つ

た。

「叔父さんはああいうことを言う……」

とお仙は呆れて、笑い転げるように新座敷へ逃出した。

風呂が沸いたと言つて、下婢のお春が告げに来た頃、先ず達雄は連日の疲労を忘れに行つた。

「お仙、ちやつと髪を結つて了わまいかや」とお種は、炉辺へ来て待つてゐる髪結を呼んで、古風な鏡台だの櫛箱だのを新座敷の方へ取出した。

「三吉。すこし御免なさいよ」とお種は鏡の前に坐りながら言つた。「私は花が好きで、今年も丹精して造りましたがに見て下さい——夏菊がよく咲きましたでしょう」

三吉は庭に出て、大きな石と石の間を歩いたが、不図姉の後に立つ女髪結を見つけて不思議そうに眺めていた。髪結は種々な手真似をしてお種に見せた。お種は笑いながら、庭に居る弟の方を見て、「この髪結さんは手真似で何でも話す。今東京から御客さんが来たそうだが、と言つて私に話して聞かせるところだ——啞だが、惻かなものだぞい」こう言

い聞かせた。

深い屋根の下にばかり日を送っているお種は、この唾の髪結を通して、女でなければ穿せん鑿んさくして来ないような町の出来事を知り得るのである。髪結は又、人の気の付かないことまで見て来て、それを不自由な手真似で表わして見せる。その日も、親指を出したり、小指を出したり、終に額しまいのところへ角を生はやす真似をしたりして、世間話を伝えながら笑った。日暮に近い頃から、達雄、三吉の二人は涼しい風の来る縁先へ煙草盆を持出した。大番頭の嘉助も談話はなしの仲間に加わった。そこへお仙やお春が台所の方から膳ぜんを運んで来た。

お種は嘉助の前にも膳を据えて、

「今日は旦那も骨休めだと仰おつしやるし、三吉も来ているし、何物なんにも無いが河魚で一杯出すで、お前もそこで御相伴ごしやうばんしよや」

こう言われて、嘉助は癖のように禿はげ頭あたまを押えた。

「さ、御酌致しましょう」

と嘉助は遠慮深い膝を進めた。この人は前垂をメ《し》めてはいるが、武術の心得も有るらしい体格で、大きな律義りちぎそうな手を出して、旦那や客に酒を勧めた。

何時いつの間にか話も若旦那のことに落ちて行つた。お種は台所の方にも気を配りながら、

時々部屋を出て行くかと思うと、復た入つて来て、皆など一緒に息子のことを心配した。
「いッそのこと、その娘を貰つてやったら可愛いじゃ有りませんか」三吉は書生流儀に言出した。

「そんな馬鹿なことが出来るもんですかね」とお種は嘲るように言つて、「お前さんは何事も知らないからそんなことを言うけれど」

「それに、お前さま」と嘉助は引取つて、紅く充血した眼で客の方を見て、「娘の親というものが氣に入りません……これは、まあ、私の邪推かも知ませんが、どうも親が背後に居て、娘の指図をするらしい……」

お種は何か思出したように、物に襲われるような眼付をしたが、それを口に出そうとはしなかった。

「よしんば、そうでないと致したところで」と嘉助は言葉を継いで、「家の格が違います。どうして、お前さま、あんな家から橋本へ貰えるものかなし……」

暮れかかつて来た。屋根を越して来る山の影が、庭にもあり、一段高く斜に見える蔵の

白壁にもあり、更に高い石垣の上に咲く夕顔かぼちや 南瓜などの棚たなにもあつた。この家の先代が砲術の指南をした頃に用いた場所は、まだ耕地として残っていたが、その辺から小山の頂へかけて、夕日が映あつていた。

百姓の隠居も鋤くわを肩に掛けて、上の畠はたけの方から降りて来た。

夕飯時を報しらせる寺の鐘が谷間に響き渡つた。達雄は、縁先から、自分の家に附いた果樹の多い傾斜を眺めて、一杯は客の為に酌くみ、一杯はよく働いてくれる大番頭の為に酌み、一杯は自分の健康の為に酌んだ。

「何卒どうかして、まあ、若旦那にも好いお嫁さんを……」と嘉助は旦那から差された盃さかずきを前に置いて、「早く好いところから貰つて上げて、一同安心いたしますように……これが何よりも御家の堅めで御座いまするで」

「そのお嫁さんだテ」とお種も力を入れる。

「どうもこの町には無いナア」と達雄は眉まゆを動かして、快濶かいかつらしく笑つた。

その時、お種は指を折つて、心当りの娘を数えてみた。年頃に成る子は多勢あつても、いざ町から貰うと成ると、適当な候補者は見当らなかつた。

「飯田の方の話よなし」とお種は嘉助の方を見て、「あれを一つお前に聞いて貰うぞい」

「ええ、あれは引受けた」と嘉助が言った。

三吉は聞ききとが咎めて、「飯田の方に候補者でも有るんですか」

「ナニ、まだそうハッキリした話では無いんですがね、すこしばかり心当りが有つて」と達雄は膝を動かす。

「聞き込んだ筋が好いもんですから」とお種も三吉に言い聞かせた。「今年の秋は、嘉助も彼地あつちへ行商に出掛けるで、序に精ついでく様子を探つて貰うわい——吾家うちでお嫁さを貰うなんて、お前さん、それこそ大仕事なんですよ」

この人達は、子と子の結婚を考える前に、先ず家と家の結婚を考えなければ成らなかった。

何時の間にかお仙も母の傍へ来て、皆なの話に耳を傾けていた。やがて母が気が付いた頃は、お仙の姿が見えなかった。お種は起つて行つて、何気なく次の部屋を覗のぞいて見た。

「お仙、そんなところで何をしてるや……」

娘は答えなかった。

「この娘は、まあ、妙な娘だぞい。お嫁さんの話を聞いて哀かなしく成るような者が何処どこにあらず」とお種は娘を慰撫なだめるように。

「お仙ちゃん、どうしました」こう三吉が縁側のところから聞いた。

お種は三吉の方を振返つて見て、「お仙はこれで極くなみだもろ涙脆いぞや。兄さんに何か言われても直に涙が出る……」

その晩、三吉は少量すこしばかりの酒に酔つたと言つて、表座敷の方へ横に成りに行き、嘉助も風呂を貰つて入りに裏口の方へ廻つた。奥座敷には達雄夫婦二人ぎりとなつた。まだ正太は町から歸つて来なかつた。

お種は立ちがけに、一寸夫ちよつとの顔を眺めて、「正太もあれで三吉叔父さんとは仲が好いぞなし——叔父さんには何でも話す様子だ」

「そうだろうナア。年齢としから言つても、丁度好い友達だからナア」と達雄が答える。

「貴方はどう思わさせるか知らんが……私は三吉の今度来たのが彼の子の為めにも好からずと思つて……」

「俺も、まあそう思つてる」

この様な言葉を交換とりかわした。不図、お種は洋燈ランプの置いてある方へ寄つて、白い、神経質

らしい手を腕の辺まで捲まくつて見て、蚤のみでも逃がしたように坐まっていたところを捜す。

「痒かゆい痒かゆいと思つたら、こんなに食いからかいて」とお種は単衣ひとえの裾すその方からを掲かげながら捜してみた。

「そうどうも苦にしちや、えらい」と達雄は笑つた。

「一匹居ても、私は身体中ゾクゾクして来る」

「こうお種は言つて、若い時のような忍こらえ耐しやうは無くなつたという風で、やがて笑いながら台所の方へ出て行つた。

三吉が東京から訪ねて来たことは、達雄に取つても嬉しかった。彼は親身しんみの兄弟というものが無い人で、日頃お種の弟達を実の兄弟のように頼もしく思っている。三吉が来た為に、種々いろいろ話が出る。話が出れば出るほど、種々な心こころもち地ちが引出される。子に対する達雄の心配も一層深く引出された形である。

平素潜んでいたようなことまで達雄の胸に浮んで来た。先代が亡くなつたのは、彼がまだ若かつた時のことだ。その頃は嘉助同格の支配人が三人も詰切くすりつて、それを薬方くすりかたと称となえて、先祖から伝わつた仕事は言うに及ばず、経済から、交際まで、一切そういう人達でこの橋本の家を堅めていた。彼もまた、青年の時代には、家の為に束縛いさぎよされることを潔

しとしなかったので、志を抱いて国を出たものである。白髪のお母や妻子を車に載せて、再びこの山の中へ帰って来るまでには、何程の波瀾を経たろう。長い間かかって地盤を築き上げた先祖の事業は彼が半生の努力よりも根深かった。先祖は失意の人の為に好い「隠れ家」を造って置いてくれた。彼は家附の支配人の手から、退屈な事業を受取ってみて、はじめて先祖の畏敬すべきことを知ったのである。

「丁度正太が自分の若い時だ」と達雄は自分で自分に言った。「いや、自分以上の空想を抱いて、この家を壊しかけているのだ」と思った。彼は、自分の子が自分の自由に成らないことを考えて、その晩は定時より早く、可憐に寐床へ入った。家のものが皆な寝た頃、お種は雪洞を点して表座敷の方へ見に行った。三吉と直樹とは最早枕を並べて眠っていたが、まだ正太は帰らなかった。お種は表庭から門のところへ出て、押せば潜り戸の開くようにして置いた。厳しい表庭の戸締も掛金だけ掛けずに置いたは、可愛い子の為であった。

大森林に連続いた谷間の町でも、さすがに暑い日は有った。三吉は橋本の表座敷に籠こもって、一夏かかって若い思想かんがえを纏めようとしていた。姉は仕事に疲れた弟を慰めようとして、暇のある時は、この家に伝わる陶器、漆器、香具こうぐの類たぐいなどを出して来て見せた。ある日、お種は大きな鍵かぎを手にながら、裏の土蔵の方へ弟を導いて行つた。

高い白壁の隣には、丁度物置蔵と反対の位置に、屋根の低い味噌蔵みそぐらがある。姉はその前に立つて、大きな味噌桶おけを弟に覗のぞかせて、毎日食膳に上る手製の醤油たまりは其中で造られることなどを話して、それから嚴重な金網張の戸の閉つた土蔵の内部なかへ三吉を案内した。

二階は広く薄暗かつた。一方の窓から射し込む光線は沢山たくさん積んである本箱や古びた道具の類を照らして見せた。姉は今一つの窓をも開けて、そこにあるのは祖母おばあさんが嫁に来た時の長持、ここにあるのは自分の長持、と弟に指して話し聞かせた。三吉は自由に橋本の蔵書を獮あさることを許された。

姉は出て行つた。三吉は本箱の前を彼方あちこち是方と見て廻つた。その時、彼は未だ自分の生れた家の焼けない前に一度帰省して阿爺おやじの蔵書を見たことを思出して、それをこの家ののに比べてみた。ここのはそれ程豊富では無かつた。三吉の阿爺が心酔したような本居派もとおりの学説に関する著述だの、万葉や古事記の研究だの、和漢の史類だの、詩歌の集だの、そう

いうものは少なかったが、そのかわり橋本の家に特有な武術、武道などのことを書いた写本が沢山ある。経書^{けいしょ}、子類^{しるい}もある。誰が集めたものか漢訳の旧約全書などもある。見て行くと、三吉の興味を引くような書目は少なかった。窓に寄せて、大きな柳行李^{やなぎごうり}の蓋^{ふた}を取つてあつて、その中に達雄の筆で表題を書いたものが幾冊か取散してある。旧い^{ふる}日記だ。何気なく三吉はその一冊を取上げて見た。

直樹の父親の名などが出て来た。それは三吉が姉と一緒に東京で暮した頃^{こと}の事実で、ところどころ拾つて読んで行くうちに、少年時代の記憶が浮び揚^{あが}つた。その頃は姉の住居^{すまい}でもよく酒宴を催したものだつた。直樹の父親が来て、「木曾のナカノリサン」などを歌い出せば、達雄は又、清^{すず}しい、恍惚^{ほれぼれ}とするような声で、時の流行^{はやりうた}唄を聞かせたものだつた。直樹の父親もよく細^{こま}い日記をつけた。これはそう細いという方でもないが、何処^{どこ}か成^なるしまりゆう^{ほく}島柳^{しまりゅう}北の感化を思わせる心の持方で、放^{ほし}肆^{しま}な男^{おとこ}女^{おんな}の臭^{にお}いを嗅^かぐような気のすることまで、包^おま^おず掩^{おほ}わずに記しつけてある。思いあたる事^{こと}実もある。

静かな蔵の窓の外には、熱い明るい空気を通して庭の草木も蒸されるように見える。三吉はその窓のところへ行つて、誰がこの柳行李の蓋を取て置いたかと想像した。あるいは正太がこの隠れた場^{たんでき}処で、父の耽溺^{たんてき}の歴史を読みかけて置いたものではなからうか、と

おも
想つてみた。

重い戸を閉めて置いて、三吉は蔵の石階いしだんを下りた。前には葡萄棚ぶどうだなや井戸の屋根すずが冷しそうな蔭を成している。横にある高い石垣の側からは清水も落ちてゐる。心臓形をした雪ゆきのした下の葉もその周囲まわりに蔓延はびこっている。

この場所を択えらんで、お仙は盥たらを前に控えながら、何か濯すすぎ物を始めていた。下婢おんなのお春も井戸端に立つて、水を汲くんでいた。お春は、ちよつと見たところこゝろ氣むずかしそうな娘で、平しよ常店ちゆうの若い番頭や手代の顔を睨にらみ付けるような眼付をしていたが、しかしそれは彼女が普通の下女奉公と同じに見られまいとする矜持ほこりからであつた。こうして、お仙相手に立話をしてゐる時などは、最早もう年頃の娘らしさが隠されずにある。彼女とても、濃情な土地の女の血を分けた一人である。

三吉はお仙に言葉を掛けて、暫時しばらくそこに立っていた。丁度正太が、植木いじりでもしたという風で、土塗つちまみれの手を洗いに來た。お春は言付けられて、釣瓶つるべから直じかに若旦那の手へ水を掛けて、すこし紅くなつた。お仙も無心に眺めていた。

手を洗った後、正太は三吉叔父と一緒に成った。二人は話し話し母屋の方へ帰って行った。

手桶を担いだお春は威勢よく二人の側を通った。百姓の隠居も会釈して通った。隠居の眼は正太に向つて特別な意味を語った。「若旦那様——お前さまは唯の若いものの氣でいると違うぞなし……お前さまを頼りにする者が多勢あるぞなし……行く行くはお前様の厄介に成ろうと思つて、こうして働けるだけ働いている老としより人もここに一人居るぞなし……」とその無智な眼が言つた。

正太は一種の矜持ほこりを感じた。同時に、この隠居にまで拝むような眼で見られる自分の身を煩うるさく思つた。

漠然ばくぜんとした反抗の心は絶えず彼の胸にあつた。「どうしてこう家のものは皆な世話を焼きたがるだろう、どうしてこうヤイヤ言うだろう——もうすこし自分の自由にさせて置いて貰いたい」これが彼の願つていることで、一々自分のすることを監視するような重苦しい空気には堪えられなかつた。

田舎風の屋造いなか やづくりのことで、裏口から狭い庭を通つて、表の方へ抜けられる。表座敷へ通う店頭の庭みせさきのところで、三吉、正太の二人は沢田老人の訪ねて来るのに逢あつた。

「沢田さんですか。やはり吾家の内職をしています——薬の紙を折ってます」
 こう正太は三吉に話した。

直樹の叔父にあたるこの神経質な老人の眼は、又、こんなことを言った。「正太様——
 お前さまの祖母様や母上様は皆な立派な旧家から来ておいでる……大旦那は学問を為し
 過ぎたで、それで不経済なことを為つせえたが、お前さまは算盤の方も好くやらんと不
 可ぞなし……お前さまの責任は重いぞなし……」

正太はこういう人々の眼から遁れたかった。

表座敷へ戻つて、向の山の傾斜がよく見えるようにと、三吉はすっかり障子を開け展げ
 た。正太も広い部屋の真中へ大きな一閑張の机を持出した。こうして、二人ぎりで、楽
 しい雑談に耽るにつけても、正太はこの叔父の何時までも書生でいられるのを羨ましく思
 った。叔父がここへ来て何を為ようと、何を考えようと、誰一人気を揉む者も無い。それ
 に引きかえて、正太は折角思い立った東京の遊学すら、途中で空しく引戻されて了った。
 やれ大旦那が失敗したから、若旦那には学問は無用だことの、やれ単独で都会に置くのは

危いことの、種々な故障が藥方の衆から出た。「家なぞはどうでもいい」と思うことは屢しばしば々有つたのである。

この座敷から谷底の方に聞える木曾川きそがわの音も、正太には何の新しい感じを起させなかった。彼は森林の憂鬱にも飽き果てた。「こうして——一生——山の中に埋れて了しまうのかナア」それを考えてみたばかりでも、彼には堪え難かった。どうかすると、彼は話の途中で耳を澄ました。そして、引入れられるような眼付をして、熟じうと溪流の音に聞き入って。

お種が入って来た。

「ネブ茶を香ばしく入れましたから、持って来ました」とお種は款待顔もてなしがおに言て、吾子わがこと弟の顔を見比べて、「正太や、叔父さんにも注ついで進あげとくれ」

この「ネブ茶」はある灌木かんぼくの葉から製したもので、三吉も子供の時分には克よく飲み慣れた飲料である。

「どうでした、吾家うちの蔵には三吉の見るような書物ほんが有りましたか」とお種が聞いた。

「ええ……有りました」と三吉は氣の無い返事をする。

お種は、二人が睦むつまじそうに語る様子を眺めて、やがて出て行つた。

若いもの同志の話は木曾少女おとめの美しいことに落ちて行つた。その時、三吉は姉から聞い

た娘のことを言出して、正太の意中を叩いてみた。正太は、唯、あわれに思うというだけのことを泄らした。彼の心では、そんな話を聞いて貰う前に、何故に自分の恋が穢れて行くかを語りたかつたのである。

暫時二人は無言でいた。

「しかし、叔父さん——この町にも種々な青年が有りますがね、どうも家にばかり居るような人は面白味が有りません……やつぱり働きもすれば遊びもする、そういう人の方が話せるようですね」こう正太が言出した。

香ばしい「ネブ茶」を飲み、巻煙草を燻しながら、叔父甥は話し続けた。正太の方は実業に志し、東京へ出た時は主に塗物染物のことを調べ、傍ら絵画の知識をも得ようとしたものであったが、性来物を感じれる力に富むところから、三吉などの向いて行こうとする方面にも興味を感じている。その日も、三吉の書きかけた草稿を机の上に展げて、清しい、力のある父の達雄に克く似た声で読聞かせた。

東京で送った二年——殊にその間の冬休を三吉叔父と一緒に仙台で暮したことは、正太

に取つて忘れられなかった。東京から押掛けて行くと、丁度叔父は旅舎やどやの裏二階に下宿して、相携えて人を訪ねたり、松島の方まで遊びに行ったりした。あの時も、仙台で、叔父の書いたものを見せて貰つて、寂しい旅舎の洋燈ランペの下でその草稿を読み聞かせながら、一緒に長い冬の夜を送つたことが有つた。それを正太は言出さずにいられた。かつた。

「そうそう」と三吉も思出したように、「丁度岩沼の基督降誕祭クリスマスに招ばれて行つた後へ、君が訪ねて来て……あんな田舎らしい基督降誕祭に遭遇であつたことは僕も始めてでしたよ……信者が五目飯めめなぞを煮たいて御馳走ごちそうしてくれましたツけ。あの晩は長老の呉服屋さんの家に泊つて、翌朝あくるあさ阿武隈川あぶくまがわを見に行つて、それから汽車で仙台へ歸てみると、君が来ていた……」

「そうでしたね……あの二階から海の音なども聞えましたね」と正太は若々しい眼付をして言つた。

「仙台は好かつたよ。葡萄島ぶたけはある、梨島なしじまはある……読みたいと思う書籍ほんは何程いくばくでも借りて来られる……彼処あそこへ行つて僕も夜が明けたような気がしたサ……あれまでというものは、君、死んでいたようなものだつたからね」と言つて、三吉は深い溜息ためいきを吐ついて、「考えしてみると、僕のような人間がよく今まで生きて来たようなものだ」

正太は叔父の顔を眺めた。

三吉は言葉を継いで、「彼処へ着いた晩から、僕は最早別の人だった。種々な物が活きて見えて来た。書く気も起った……」

「あの時叔父さんの書いたものは、吾家に蔵ってあります」

「しかし正太さん、お互にこれからですネ。僕なぞも未だ若いんですから、これから一歩き出してみようと思いますよ……」

こんな話をしているところへ直樹が入って来た。直樹は中学に入ったばかりの青年で、折取った野の花を提げて、草臥れたような顔付をしながら屋外から帰って来た。

「直樹さん、何処へ？」と三吉が聞いてみた。

「ええ——ずっと河の岸を廻って来ました」と直樹は答える。

その時、正太は床の間にある花瓶を持出して、直樹が持って来た百合だの撫子だの花で机の上を飾った。

「兄さん、山脇の姉さんがチト御遊びに被入つしやいッて——真実に兄さんは遠慮深い人だッて」

こう直樹が自分の親戚からの言伝を三吉に告げた。三吉はあまり町の人を訪問する気

が無かつた。

活気のある鈴の音が谷底の方で起つた。急に正太は輝くような眼付をして、その音のする方を見た。

「ア——御^{おん}岳^{たけ}参りが着いたとみえるナ」

と正太は独^{ひとりごと}語のように言つた。高山の頂を極^{きわ}めようとする人達が、威勢よく腰の鈴をチリンチリンチリンチリン言わせて、宿屋に着くことを楽しみにして来る様子は、活気^{そと}が外部からこの谷^{たに}間^{あい}へ流れ込むように聞える。正太は聞耳を立てた。その音こそ彼が聞かうと思うものである。彼は縁側にまで出て聞いた。

祭の日は橋本でも一同仕事を休んだ。薬の看板を掛け、防火用の黒い異様な大団^{おとうちわ}扇^{あふ}を具^{そな}え付けてある表門のところには、時ならぬ紅白の花が掛かつた。小僧達も新しい仕着^{しきせ}に着更えて、晴々しい顔付をして、提^{ちよう}灯^{ちん}のかけを出たり入ったりした。

お種は表座敷へ来て、

「三吉、お前さんは羽織が有るまいがナ」

と弟の顔を眺めた。三吉もサツパリとした単衣ひとえに着更えていた。

「羽織なんか要いりません。これで沢山です」と三吉が言った。

「正太の紋付を貸すで——今に吾家うちの前を御輿みこしが通るから、そうしたら兄さん達と一緒に出て見よや」

「借着をして祭を見るのも変なものですナア」

「何が変なものか。旅では、お前さん、それが普あたりまえ通だ」

「私はどうでも可よう御座んすが、姉さんが着た方が可いと思うなら、借りましょう——」
旅で祭に遇あつた直樹は、方々の親類から招よばれて、出て行つた。正太を始め、薬方の若衆も皆な遊びに出た。町の方が賑にぎやかなだけ、家の内は寂しい。

「姉さん」と三吉は、姉が羽織を出しに行く序ついでに、物を頼むという風で、「この節私は夢を見て困りますが、身体からだの故せいじやないかと思うんです……サフランでも有るなら、すこし私に飲ましてくれませんか」

「そんなことは造作ない。吾家うちにあるから、くれる」

「母親おつかさんが生きてる時分には、時々私に飲ましてくれましたツけ——女の薬だが、飲めツて」

「ええ、男子にも血が起るといふことは有るで」

こう言つて、お種は出て行つた。やがて橋本の紋の付いた夏羽織と、薬草の袋と、水とを持つて来た。紅いサフランの花弁は、この家で薬の客に出す為に特に焼かした茶碗の中へ浸して、それを弟に勧める。

「どんな夢を見るよ」と姉が聞いた。

「私の夢ですか」と三吉は顔に苦痛を帯びて、「友達の中には、景色の夢を見るなんて言う人も有りますがね、私は景色などを一度も見たことが無い。夢と言えば女が出て来る」

「馬鹿らしい！」と姉は嘲る^{あざけ}ように。

「いえ、姉さん、私は正直なところを話してるんです。だからこんな薬などを貰つて飲むんです」

「お前さんの知つてる人かい」

「ところが、それが誰だか解らない。どう後で考えても、記憶^{おぼえ}の無いような人が出て来んです——多くは、素足で——火傷^{やけど}でもしそうな、恐しい勢で。昨夜などは、林檎^{りんご}畠^{ばたけ}のようなどころへ追詰められて、樹と樹の間へ私の身体が挟^{はさ}まって、どうにも逃げ場を失つて了つた……もうすこしで其奴^{そいつ}に捕まるかしらん……と思つたら目が覚^さめました。汗はビツ

シヨリ……」

「お前さん達の見る夢は、どうせそんなものだ」

と姉は復た嘲るように笑った。

御輿の近づいたことを、お仙が報せに來た。女連は門の外まで出た。そこから家々

の屋根、町の中央を流れる木曾川が下瞰される。三吉は長過ぎるような羽織を借りて着て、

達雄と一緒に崖の下へ降りた。

御輿の通り過ぎた後、お種は娘に下婢を付けて祭を見せにやり、自分は門の内へ引返した。

店口の玄關のところには、手代の幸作が大きな藥の看板に凭れながら、尺八を吹いて遊んでいたが、何時の間にかこれも出て行つた。広い家の内にはお種一人残つた。

急に周囲が闐寂として來た。寺院のように人氣が無かつた。お種は炉辺に坐つて独りで静かに留守居をした。この祭には、近在の若い男女は言うに及ばず、遠い村々の旦那衆まで集つて、町は人で埋められるのが例で、その熱狂した群集の氣勢ばかりでも、静

止していられないような思をさせる。こういう時にも、お種は家を守るものと定めて、それを自分の務めのように心得ていた。

実家の父——小泉忠寛の名は、時につけ事に触れ、お種の胸に浮んだ。お種や三吉の生れた小泉の家は、橋本の家とは十里ほど離れて、丁度この谿谷の尽きようとするところに在った。その家でお種は娘の時代を送った。父の忠寛は体格の大きな、足袋も図無しを穿いた程の人で、よく肩が凝ると言つては、庭先に牡丹の植えてある書院へ呼ばれて、そこでお種が叩かせられたもので、その間に父の教えたこと、話したことは、お種に取つて長く忘れられないものと成った。そればかりではない、父は娘が手習の手本にまで、貞操の美しいことや、献身の女の徳であることや、隣の人までも愛せよということや、それから勤勉、克己、儉約、誠実、篤行などの訓誨を書いて、それをお種に習わせたものであつた。

こういう阿爺を持つて嫁いて来た人の腹に正太が出来た。お種は又、夫の達雄が心配するとは別の方で、自分の子が自分の自由にも成らないことを可嘆しく思った。彼女は、炉辺で、正太のことばかり案じていた。

「宗助——幸助——宗助——幸助」

と御輿を担いで通る人々の掛声を真似ながら、一人の小僧が庭口へ入って来た。この小僧は、祭の為に逆上のぼせて了しまつたような眼付をして、隠居が汲くんで置いた水を柄杓ひしゃくでガブ飲んだ。

三吉も帰って来た。お種は祝の強飯こわめしだの煮染にしめだのを出して、それを炉辺で振舞つていると、そこへ正太が氣息いきをはずませて入って来た。

「母親さん、何か飲む物を頂戴ちやうだい。咽喉のどが乾いて仕様が無い」と正太は若々しい眼付をして、「今ネ、御輿の飾りを取つて了つたところだ。鳳凰ほうおうも下した。これからが祭礼まつりだ。ウンと一つ今年あばは暴れ廻つてくれるぞ」

「まあ、騒ぎですネ。正太、お前も強飯おこわを食えや」とお種が言った。

「叔父さん、御覧でしたか」と正太は三吉の方を見て、「どうです、田舎の祭は。変つてましよう。殊ことに是処ここのは荒神様あらがみさまで通つていますから、あの大きな御輿を町中こしろ転がして歩くんです。終しまいに、神社の立木へ持つてツて、輿を担かつぐ棒までヘシ折つて了う。その為に毎年白木で新調するんです——エライことをやりますよ。髭ひげの生はえた人まで頬冠もで揉みに入るんですからね」

乾いた咽喉うるおを霑うるした後、復た正太は出て行つた。

「宗助——幸助——宗助——幸助」

と小僧が^{てぬぐい}手拭を首に巻付けて出て行くのを見ると、三吉も姉の傍に^{じつと}静止していられないような気がした。

夜に入つて、谷底の町は歓楽の世界と化した。花やかに光る提灯の影には、祭を見ようとする男女の群が集つて、狭い通を潮のように往来した。押しつ押されつする御輿の地を打つ響、争い叫ぶ若者の声なぞは、人々の胸を波打つようにさせる。王滝川の岸に添うて二里も三里もある道を歌いながら通つて来る幾組かの娘達は、いずれも連に^{はぐ}離れまいとし、人に踏まれまいとして、この群集の中を互に手を引合つて歩いた。中には^{ひとごみ}雑踏に紛れて知らない男を^{ののし}罵るものも有つた。慾に目の無い町の商人は、^{かんざし}簪を押付け、^{のみくい}飲食する物を^{むくい}売、多くの労働の報酬を一晚に^{なげう}擲たせる算段をした。町の中央にある広い暗い場処では踊も始まつた。

祭の^{ありさま}光景を見て廻つた後、一しきりは三吉も御輿に取付いて、^{はだし}跣足に^{しりはしより}尻端折で、人と同じように「宗助——幸助」と叫びながら押してみたが、やがて額に流れる汗を^ふ拭きつ

つ橋本の家の方へ帰つて来た。足を洗つて、三吉は涼しい風の来る表座敷へ行つた。そこで畳の上に毛脛けすねを投出した。

「三吉帰つたかい」

こう言いながら、お種も団扇うちわを持つて入つて来た。

「私も横に成るわい。今夜は二人で話さまいかや」

と復たお種が言つて、弟の側に寝転ねころんだ。東京にある小泉の家のことは自然と姉の話に上つた。相続人あととりの実も今度はよくやってくればいいがということ、次の森彦からも暫しばらく時便りくたよが無いこと、宗蔵の病氣もどうかということ、それからそれへと姉の話は弟達の噂うわさに移つて、結局吾子のことに落ちて行つた。お種は三吉の考えないようなことまで考えて、種々いろいろと正太の為に取越苦労をしていた。

「若いものことですもの、お前さん、どんな間違がないとも限りませんよ——もし、子供でも出来たら。それを私は心配してやる」

こうお種は言つて、土地の風俗を蔑視さげすむような眼付をした。楽しそうな御輿の響は大切な若い子息むすこを放ほしいまま縦たてな世界の方へと誘うように聞える……お種は正太のことを思つてみた。誰と一緒に、何処を歩いている、と思つてみた。そして、何の思慮も無い甘い私語ささやき

には、これ程心配している親の力ですら敵かなわないか、と考えた。

「私が彼あれに言つて聞かせて、父親おとつさんも女のことでは度々失しく敗じりが有つたから、それをお前は見習みかわないように、世間から後うしろ指ゆびを差さされないようにツて——ネ、種々いろいろ彼に言うんだけれど……ええええ、彼はもう父親さんのワルいことを何もかも知つてますよ」

三吉は黙つて姉の言うことを聞いていた。お種は更に嘆息して、

「旦那もね、お前さんの知つてゐる通り、好い人物ひとなんです。気分は温厚すなおですし、奉公人にまで優しくて……それにお前さん、この節は非常な勉強で、人望はますます集つて来ました。唯、親としてのシメシがつかない。真実ほんとうに吾子の前では一言もないようなことばかり仕出しで来かしたんですからね。旦那も今ではすっかり後悔なすつて、ああして何事なんにも言わずに働いてる。旦那の心こころ地もちは私によく解る。真実に、その方の失しく敗じりさえなかったら、旦那にせよ、正太にせよ……私は惜しいと思いますよ」

お種は、気の置けない弟の前ですら、夫の噂うわさすることを羞はずするという風であつた。夫から受けた深い苦痛——その心を他人に訴えるということは、父の教訓おしえが許さなかつた。

「代々橋本家の病氣だから仕方ない」

とお種は独ひとりごと語ことのように言つて、それぎり、夫の噂はしなかつた。

ゴットン、ゴットンという御輿ごこがの転ころがされる音は、遅くまで谷底の方で、地響のように聞えていた。

直樹は一月ほどこしか逗とまり留ゆうしなかった。植物の好きなこの中学生は、東京への土産みやげにと言つて、石斛せつこく、うるい、鸞さぎ草そう、その他深い山の中でなければ見られないような珍しい草だの、香のある花だのの見本を集めて、盆前に橋本の家を発たつて行つた。三吉は自分の仕事の纏まとまるまで残つた。

旧暦の盆が来た。橋本では、先代からの例として、仏式でなく家の「御霊みたま」を祭つた。お種は序ついでに小泉の母の二年をも記念する積りであつた。年を経とるにつれて、余計に彼女はこういうことを大切にするように成つた。

墓参りの為に、お種は三吉を案内して、めずらしく家を出た。お仙は母に言付けられた総菜そうざいの仕度をしようとして、台所の板の間に俎板まないたを控えて、夕顔の皮を剥むいた。干瓢かんぴょうに造つても可いい程の青い大きなのが最早裏の畠もには沢山生なつていた。

「お春、お前の髪は好く似合う」

とお仙は、流許ながしもとに立つて働いている下婢おんなの方を見て、話しかけた。

「そうかなし」とお春は振向いて、嬉しそうな微笑えみを見せた。「貴方あんたの島田も恰好かつこうが好く出来た」

お仙も嬉しように笑つて、やがて夕顔を適當の厚さに切ろうと試みた。幾度か庖丁ほうちようを宛行あてがつて、当惑したという顔付で、終しまには口を「ホウ、ホウ」言わせた。復た、お仙は庖丁を取直した。

何程の厚さに切れば、大略おおよそ同じ程に揃そろえられるか、その見当がお仙には付きかねた。薄く切つてみたり、厚く切つてみたりした。彼女の手は震えて来た。

お春はそれとも気付かずに、何となく沈着おちつかないという様子をして、別なことを考えながら働いていた。何もかもこの娘には楽しかった。新しい着物に新しい前垂を掛けて働くということも楽しかった。晩には暇が出て、叔母の家へ遊びに行かれるということも楽しかった。

墓参りに行つた人達が歸つて来た。お種は直に娘の様子を看みて取つた。お仙の指からはすこし血が流れていた。

「大方こんなことだらぞと思つた」とお種は言つた。「お仙ちゃん、母親おつかさんが御手伝し

ますよ——お前さんに御手本を置いて行かなかったのは、私が悪かった」

お仙は途方に暮れたという顔付をしている。

「これ、袂たもとぐそ糞でも付けさんしょ」とお種は気を揉もんで、「折角せつかく今日は髪まで結つて、皆な面白く遊ぼうという日だに、指なぞを切つては大事おほごとだぞや」

お春はお仙の傍へ寄つた。お種は三吉の方を見て、

「ええええ、これだから眼が離されない……真実ほんとうにこういうところは極子供だ……：そう

言えば、お前さん、今年の春もね、正太のお友達が寄つて吾家うちで歌留多かるたをしたことが有つた。山瀬さんも来た。あの人は正太とは仲好だから、お仙を側そばへ呼んで、貴方あなたもお仲間で

御取りなさいなツて——ネ。山瀬さんがそう言つて下すつた。するとお仙が山瀬さんの膝ひざ

に凭もたれて……まあ、無邪気なと言つて無邪気な……兄さんだから好いの、お友達だから悪

いの、そんな区別はすこしも無いようだ。罪の無い者だぞや」こう話し聞かせた。

その晩は、若いものに取つて、一年のうちの最も楽しい時の一つであつた。夕方から橋本の家でも皆な盆踊を見に行くことを許された。涼しい夏の夜の空気は祭の夜以上の楽しさを思わせる。暗いが、星はある。恋しい風の吹く寺の境内の方へ自然と人の足は向いて行つた。

叔母の家に帰ることを許されたお春も、人に誘われて、この光景を見に行つた。大きな輪を作つて、足拍子揃そろえて、歌いながら廻つて歩く男おとこ女の群おんな。他処よそから来ている工女達は多くその中に混つて踊つた。頬冠おそれりした若者は又、幾人いくたりかお春の左右を通り過ぎた。彼女は言うに言われぬ恐怖を感じた。丁度そこに若旦那も来ていた。お春は若旦那に手を引いて貰つて、漸ようやくこの混雑ひとごみから遁のがれた。

九月に入つて、三吉は一夏かかった仕事を終つた。お種から言えば二番目の弟にあたる森彦の貰われて行つた家——この養家も姓はやはり小泉で、姉弟きょうだいの生れた家から見ると二里ほど手前にある——その老人から橋本へ便りがあつた。「三吉も最早東京へ帰るそうなが、わざわざ是方こちらへ廻るには及ばん、直に帰れ、その方が両方りようだめだ」こんなことが書いてあつた。

「両為とは、老人も書いてくれた」

こう達雄は、三吉にその手紙を見せて、笑つた。この老人の儉約なことは、封筒や巻紙を見ても知れた。

いよいよ三吉の発つて行くべき日が近づいた。復た何時来られるものやら解らないから、
と言つて、達雄は酷く名残を惜んだ。ひと なこり三吉が表座敷で書いた物をも声を出して通読してみ
た。薬の方の多忙いそがしいところを見て貰つたのが、何より東京への土産だ、とも話した。

「三吉さん、来て御覧なさい。君に御馳走ごちそうしようと思つて頼んで置いた物が、漸く手に入
りましたから」

と達雄は炉辺へ三吉を呼んで言つた。三吉も帰る仕度やら、土地の人の訪問を受けるや
らで、心はあわただしかった。

「三吉」と姉も名残を惜むという風で、「お前さんに食べさせてもやりたいし、持たせて
もやりたいと思つて、今三人掛りで、この蜂の子はちを抜くところだ。見や、これが巣だ。
えらい大きな巣を作つたもんじやないか」

五層ばかりある地蜂の巣は、漆の柱を取離して、そこに置いてあつた。お種はお仙やお
春と一緒に、子は子、親に成りかけた蜂は蜂で、一々巣の穴から抜取つていた。この地蜂
は、蜜蜂などに比べるとずっと小さく、土地の者の珍重する食料である。三吉も少年の時
代には、よく人に随ついて、この巣を探しに歩いたものである。

「母親さん、写真屋が来ましたから、着物を着更えて下さい」

こう正太がそこへ来て呼んだ。

「写真屋が来た？ それは大多忙だ。おおいそがし お仙——蜂の子はこうして置いて、ちやつと着更えまいかや。お春、お前も仕度するが可い」とお種は言った。

「嘉助——皆な写すで来いよ」達雄は店の方を見て呼んだ。

記念の為、奥座敷に面した庭で、一同写真を撮とることに成った。大番頭から小僧に至るまで、思い思いの場処に集った。達雄は、先祖の竹翁が植えたという満天星どうたんの樹を後にして立つた。

「女衆は前へ出るが可い」

と達雄に言われて、お種、お仙、お春の三人は腰掛けた。

「叔父さん、貴方は御客様ですから、もうすこし中まんなか央へ出て下さい」

こう正太が三吉の方を見て言った。三吉は野菊の花の咲いた大きな石の側へ動いた。

白い、熱を帯びた山雲のちぎれが、皆なの頭の上を通り過ぎた。どうかすると日光が烈はげしく落ちて来て、撮影を妨げる。急に嘉助は空を仰いで、何か思い付いたように自分の場処を離れた。

「嘉助、何処へ行くなし」とお種は腰掛けたままで聞いた。

「そこを動かない方がいいよ——今、大きな雲がやって来た。あの影に成ったところで、早速撮って貰おう」と正太も注意する。

「いえ——ナニ——私はすこし注文が有るで」

と言つて、嘉助は皆なの見ている前を通つて、一番日影に成りそうな場処を択んだ。丁度旦那と大番頭とは並んだ。待設けた雲が来た。若い手代の幸作、同じく嘉助の忤の市太郎、皆な撮つた。

三吉が出発の日は、達雄夫婦を始め、正太、お仙まで、朝のうちに奥座敷へ集つた。三吉も夏服に着更えて、最早秋海棠などの咲出した裏庭を皆など一緒に眺めながら、旅の脚絆を当てた。ここへ来がけに酷く馬車で揺られたと言つて、彼は背中のある部分だけ薄く削取られたような上着を着ていた。

三吉がこの山の中で書いたものは——達雄夫婦の賜物のように——手荷物の中に納めてあった。彼の心は暗い悲惨な過去の追想から離れかけていた。その若い思想を、彼は静かなところで纏めてみたに過ぎなかった。

通いで来る嘉助親子も、東京の客が発つというので、その朝は定時より早く橋を渡つて来た。

朝飯の後、一同炉辺で別離わかれの茶を飲だ。姉は名残が尽きないという風で、

「でも、よく来てくれた。何時でも来られそうなものだが、なかなか思うようにはいきません」

「どうして、それどこじやない」と嘉助も引取つて、「三吉様はこれで何度郷里へ帰らさせるなし」

「僕ですか、ずっと前に老祖母さんの死んだ時に一度、母親さんの葬式の時に一度——今度で三度目です」と三吉が言う。

「彼は八歳の時分に郷里を出たツきりよなし」とお種は嘉助の方を見て。

「これで、旧の家でも焼けずに在ると、帰る機会が多いんだがナア」と達雄も快濶かいかつらしく笑つた。

前の晩のうちに頼んで置いた乗合馬車の馬丁べつとうが、その時、庭口へ声を掛けに来た。

「叔父さん、馬車が来ました」と正太が言つて、叔父の手荷物しづものを提さげながら、一歩先へ出て行つた。

「では、私はここで御免蒙りますから——」とお種は炉辺で弟に別離わかれを告げた。

「皆さんに宜敷よろしく—— 実にも御無沙汰ごぶさたするがッて、宜敷言っておくれや—— お前さんもまあ折角御無事で——」

挨拶あいさつもそこそこに、三吉はお仙やお春などにも別れて、橋本の家を出た。達雄はそこまで見送ると言つて、三吉と一緒に石段を降りた。

崖下がけしたには乗合馬車が待つていた。車の中には二三の客もあつた。この車はお六櫓ぐしを売る宿あたりまでしか乗せないの、遠く行こうとする旅人は其処そこで一つ山を越えて、更に他の車へ乗替えなければ成らなかつた。

「直樹さんと来た時は沓掛くつかけから歩きましたが、途中で蛇あぶに付かれて困りましたッけ」

「ええ、蠅はえだの、蚋ぶよだの……そういうものは本曾路きそじの名物です。産馬地うまどこの故せいでしょうね」

こんな言葉を、三吉と正太とは車の上と下とで取換とりかわした。

ノンキな田舎のことで、馬車は容易に出なかつた。三吉は車の周囲まわりに立つて見送つてゐる達雄や嘉助や若い手代達にも話しかける時はあつた。待つても待つても他に乗合客が見えそうもないので、馬丁べつとうはちよつと口笛を吹いて、それから手綱たづなを執つた。車は崖について、朝日の映あつた道路を滑り始めた。二月ばかり一緒にいた人達の顔は次第に三吉から

遠く成った。

三

弟の三吉が帰るといふ報知しらせを、実は東京の住居すまいの方で受取った。小泉の実と橋本の達雄とは、義理ある兄弟の中でも殊ことに相許している仲で、旧い家ふるを相続したことも似ているし、地方の「旦那衆」として知られたことも似ているし、年齢としから言ってもそう沢山違っていないかった。

実は、達雄のように武士として、又藥の家の主人あるじとしての阿爺おやじを持たなかったが、そのかわりに、一村の父として、大地主としての阿爺おやじを持った。父の忠寛は一生を煩悶はんもんに終ったような人で、思い余っては故郷を飛出して行つて国事の為に奔走するといふ風であったから、実が十七の年には最早家を任せられる程の境涯にあった。彼は少壯としわかな孝子で、又可傷いたましい犠牲者であった。父の亡くなる頃は、彼も地方に居て、郡会議員、県会議員など選ばれ、多くの尊敬を払われたものであったが、その後都会へ出て種々な事業たずさわに携るたずさわように成つてから、失敗の生涯ばかり続いた。製氷を手始めとして、後から後から大きな

穴が開いた。

不図ふとした身の蹉跌つまずきから、彼も入獄の苦痛を嘗なめて来た人である。赤煉瓦れんがの大きな門の前には、弟の宗蔵や三吉が迎えに来ていて、久し振で娑婆しやばの空気を呼吸した時の心地こころもちは、未だ忘れられずにある。日光の渴かわき……楽しい朝露……思わず嬉しさのあまりに、白い足袋たびはだし跣足で草の中を飛び廻った。三吉がくれた巻煙草まきたばこも一息に吸い尽した。千円くれると言ったら、誰かそれでも暗い処へ一日来る気は有るか、この評定ひようじようが囚人の間で始まった時、一人として御免を蒙こうむると答えない者はなかった。その娑婆で、彼は新しい事業を経営しつつあるのである。

直樹の父親もまた同郷から出て来た事業家であつた。この人と実兄弟とは、長い間、親戚のように往つたり来たりした。直樹の父親の旦那だんなは、伝馬町てんまちようの「大将」と言つて、紺こ暖簾んのれんの影で采配さいはいを振るような人であつたが、その「大将」が自然と実の旦那でもあつた。旦那は、実の開けた穴を埋めさせようとして、更に大きく注込つぎこんでいた。

格子戸の填はまつた、玄關のところはまに小泉商店とした看板の掛けてある家の奥で、実は狭い庭の盆栽に水をくれた。以前の失敗に懲りて、いかなる場合にも着物は木綿で通すという主義であつた。彼の胸には種々なことがある。故郷の広い屋敷跡——山——畠——田——

林——すべてそういう人手に渡つて了^{しま}つたものは、是非とも回復せねばならぬ。祖先に對しても、又自分の名譽の爲にも。それから嵩^{かさ}なり嵩^{かさ}なつた多くの負債の仕末をせねば成らぬ。

新しく起つて来た三吉が結婚の話——それも良縁と思われるから、弟に勧めて、なるべく纏^{まと}まるように運ばねばならぬ。こう思い耽^{ふけ}つているところへ、弟が旅から歸つて来た。
「只今^{ただいま}」

と三吉は玄関のところから日に焼けた顔を出した。

もし正太に適当な嫁でも有つたら、こんなことまで頼まれて歸つて来た三吉の眼には、いかにも都の町^{まちなか}中の住居^{すまい}が窮屈に映つた。玄関の次の部屋には、病気でブラブラしている宗蔵兄がいる。片隅^{かたすみ}へ寄せて乳呑児^{ちのみご}が寝かしてある。縁側のところには、姪^{めい}のお俊が遊んでいる。その次の長火鉢^{ながひばち}の置いてある部屋は勝手に続いて、そこには嫂^{あによめ}のお倉と二^は十^はばかりに成る下女とが出たり入ったりして働いている。突当りの窓の外は直ぐ細い路地で、簾^{すだれ}越しに隣の家の側面も見える。

夕飯時に近かった。実は長火鉢の側に膳ぜんを控えて、先ずオシキセをやりながら、三吉から橋本の家の様子を簡単に聴取ききとった。

「木曾の姉さんからの御土産おみやげです」

とお倉はオズオズとした調子で言つて、三吉が持つて来た蜂の子の煎付いりつけたのを皿に載せて出した。

実が家長としての威厳は何時いつまでも変らなかつた。彼は、家の外では極めて円滑きわな人として通つていたが、家の者むかに對つては嚴格過ぎる位。丁度往時むかし故郷の広い楽しい炉辺ろべたで、ややもすると嫌味いやみなことを言う老祖母おばあさんを前に置いて、碌々ろくろく口も利きかずに食つた若夫婦の時代と同じように、何時まで経つてもそう打解けた様子を妻に見せなかつた。

「お種さんも御変りは御座いませんか」

こうお倉は三吉に尋ねながら、弟や娘の為にも膳を用意した。

宗蔵は三吉と相対さしむかいに胡坐あぐらにやつた。「どうも胡坐をかかないと、食つたような氣がしないネ——へえ、久し振で田舎いなかの御馳走ごちそうに成るかな」

こんなことを言つて、細く瘠やせた左の手で肉叉ホオクや匙さじを持添えながら食つた。宗蔵は箸はしが持てなかつた。で、こういうものを買つて宛行あてがわれている。

「宗さん、不相変あいかわりいけますね」と三吉が戯れて言った。

「不相変いけますねとは、失敬な」と宗蔵は叱るように。

「ええええ、いけるどころじゃない」とお倉は引取つて、「病人のくせに、宗さんの食べるには驚いちまう」

宗蔵は兄の前をも憚はばらないという風で、食客同様の人とも見えなかった。それがまた実には小癩こしやくに触さわるかして、病人なら病人らしくしろという眼付をしたが、口に出して何も言おうとはしなかった。平素ふだんから実は宗蔵とあまり言葉も交さなかった。唯——「一家の団だんらん樂らく、一家の団樂」この声が絶ず実の心の底に響いていた。

食後に、三吉は番茶を飲みながら、旅の話を始めた。実は娘の方を見て、

「俊、お前の習った画を三吉叔父さんにお目に懸けないか」

こう言われて、お俊は奥座敷の方から画手本だの画草紙だのを持って来た。

「お蔭様で、彼女あれも先生の御宅へ通うように成りましたよ。日曜々々にネ」とお倉が横から。

「へえ、蘭から習わせるネ」と三吉も開けてみて、「西洋画とは大分方法やりかたが違うナ——お俊ちゃんすきは好きだから、必きつと描けるように成りましょう」

「娘には反かえつてこの方が好い」と宗蔵も言った。「なに、女の画家えかきに成らなくたっても可いいんだから」

実は娘の習った画を嬉しそうに眺めて、やがて町を散歩して来ると言つて独ひとりで出て行つた。彼は弟からシミジミ旅の話などを聞こうとしなかった。弟は話せないものと成つていた。

夫の前では言おうと思うことも言い得ないでいるお倉は、実が散歩に出て行つた後、宗蔵や三吉の談話はなしの仲間に加わつた。この三人は、実が長く家を留守にした間、互に艱難かんなんを嘗なめ尽したという心の結むすび合つきが有る。弱いお倉、病身の宗蔵は、僅わずかに三吉を力ちからにして、生命いのちを継つないで来たようなものだつた。

「姉さんも白く成りましたね」

と三吉は嫂あによめの額なでを眺めた。お倉は髪を染めてはいるが、生際はえぎわのあたりはすこし褪さめて、灰色あざに凋落ちようらくして行くさまが最早隠かくされずにある。

「吾夫やどもね、染めるのも可いいが、俺おれの見ないところで染めてくれ——なんて」と言つて、

お倉は笑つて、「今からこんなお婆さんばあに成つては、真実ほんとに心細い……私はまだお嫁さんに來た時の氣分きぶんでいるのに……」

「いや、全く姉さんはお嫁に來た時の氣分だ——感心だ」と宗藏が眼で笑いながら。

「人を馬鹿にしなさんな」

とお倉はいくらかくになまり国訛の残つた調子で言つた。この嫂は酷ひどく宗藏を忌嫌いみきらつていたが、でも話相手には成る。

「それはそうと、三吉さん」と宗藏は無感覺に成つた右の手を左で癖のように揉もみながら、「君の留守に大芝居サ。八王子の方の豪家という触ふれこみ込で、取巻が多勢随ついて、兄さんの事業しごとを見に來た男がある。なにしろ、君、触込が触込だから、是方こつちでも、朝晩のように宿や舎どやへ詰めて、話は料理屋でする、見物には案内する、酒だ、芸妓げいしやだ——そりやあもう御ご機嫌きげんの取るだけ取つたと思ひ給え。ところが、それが豪家の旦那でも何でもない。散々御取持をさせて置いて、ぷいと引揚げて行つて了しまつた。兄さんもお不覺だったネ。稲垣いながきまで付おまけいてサ。加おまけに、君、その旦那を紹介した男が、旅費が無くなつたと言つて、吾家うちへころ転がり込んで来る……その男は可哀想かわいそうだとしたところで、旅費まで持たして、発たして遣るなんて……ツ……御話にも何も成りやしないやね」

「真^{ほん}実^{とう}に、あんな馬鹿々々しい目に遇^あつたことは無い——考えたばかりでも業^{ごう}が煎^いれる」と嫂も言つた。

「僕は、君、惡^{にく}まれ口^{ぐち}を利くのも厭^{いや}だと思ふから、黙つて見ていたがネ」と宗蔵は病身らしい不安な眼付をして、「この調子で進んで行つたら、小泉の家は今にどうなるだろうと思ふよ」

「例の車の方はどんな具合ですか」こう三吉が聞いた。

「なんでも、未だ工場で試験中だということですが、事業が大き過ぎるんですもの」と嫂が言う。

「借財が大きいから自然こういうことに成つて来る」と宗蔵も考えて、「なにしろまあ、ウマクやつて貰わないことには……僕は兄さんの為に心配する……復^また同じ事を繰返すように成る……留守居は、君、散々仕飽^{しあ}きたからね」

宗蔵は嚙^{かみ}返^{かえ}しというのを為^するのが癖で、一度食つた物を復た口の中へ戻して、何やら甘^{うま}そうに口を動かしながら話した。

では、どうすれば可いか、ということに成ると、事業家でない宗蔵や商売^{あきない}一つしたことの無いお倉には、何とも言ってみようが無かった。で、宗蔵は復た物事が贅^{ぜい}沢^{たく}に流れて来たの、道具を並べ過ぎるの、ああいう火鉢は余計な物だの、と細^{こま}いことを数え立てた。嫂は嫂で、どうもこの節下女がすこしメカシ過ぎるというようなことまで心配して三吉に話した。

「三吉さん、貴方^{あなた}からよく兄さんに話して下さい」とお倉は言った。「私が何を聞いたツて、まるで相手にしないんですもの——事業の方のことなんか、何事^{なんに}も話して聞かせないんですもの」

「道具だつてもそうだ」と宗蔵は思出したように、「奥の床の間を見給え、文晁^{ぶんちよう}のイカモノが掛かつてる。僕ならば友達の書いた物でも可いからホンモノを掛けて楽むネ」こう言つて、何もかも不平で堪^たえられないような、病人らしい、可傷^{いたま}しい眼付をした。「僕に言わせると、ここの家の遣方^{やりかた}は丁度あの文晁だ……皆な虚偽^{うそ}だ……虚偽の生活^{くわつし}だ……」あまり宗蔵が無遠慮な悪口をつき始めたので、お倉は夫の重荷を憐^{あわれ}むような口調に成つて行つた。

「そう宗さんのように坊さんみたようなこと言つたつて……何も交際^{つきあい}際の道具ですもの……

…もともと有つて始めた事業じゃないんですもの……贅沢だ、贅沢だと言う人から、すこし考えてくれなくちゃ——こんな御菜^{おかず}じゃ食われないの、何のツて」と言つてお倉は三吉の方を見て、「ねえ三吉さん、兄さんにお刺身を取つたつて、家の者に附けない時は有りまさあね」

「食わないのは、損だから……」

こう宗蔵は捨鉢^{すてばち}の本性を顕^{あら}わして、左の手で巻煙草を吸付けた。

その時、「三吉さん、御帰りだそうですね」と声を掛けながら、格子戸を開けて入つて来た人があつた。この人は稲垣と言つて、近くに家を借りて、実の事業を助けている。

「今ね、家へ歸つて、飯を一ぱいやつてそれから出て来ました」と稲垣は煙草入を取出した。「三吉さんが御帰りなすつたと言うから、それじあ一つ見て来ようと思ひまして——今日は工場へ行く、銀行を廻るネ、^{おおいそがし}大多忙」

「どうも毎日御苦勞様で御座います」とお倉が言う。

「いえ、姉さんの前ですけれど」と稲垣は元氣よく、「これで車が一つガタリと動いて御覧なさい、それこそ大變な話ですぜ——万や二万の話じゃ有りませんぜ。私などは、どうお金を使用^{つか}おうかと思つて、今からそれを心配してる」

「真実に稲垣さんは御話がウマイから」とお倉は笑った。

「まあ、君なぞはそんな夢を見ていたまえ」と宗蔵も笑って、「時に、稲垣君、この頃はエライ芝居を打ったネ」

「え……八王子の……あの話は最早しッこなし」と稲垣は手を振る。

「実は、今、あの話を三吉さんにしましたところですよ」とお倉は力を入れて、「何卒まあ事業の方も好い具合にまいますと……」

「姉さん、そんな御心配は……決して……実兄さんという人がちゃんと付いてます」

この稲垣の調子は、何処までも実に信賴しているように聞えた。それにお倉は稍々力を得た。

娘のお俊は奥座敷の方へ行つて独りで何かしていたが、その時母の傍へ来た。この娘は、髪も未だそう黒くならない年頃で、鬢のあたりは殊に薄かった。毎朝美男葛で梳付けて貰つて、それから学校へ行き行きしていた。

「お俊ちゃん、毎晩画を御習いですか」と稲垣はお俊の方を見て、「此頃習つたのを見て、驚いちゃいました。どうしてああウマく描けるんでしょう」

「可笑しいんですよ」とお倉も娘の顔を眺めながら、「田舎娘だなんて言われるのが、ど

の位厭だか知れませんか——それを言われようものなら、プリプリ怒って了います」

「よくツてよ」とお俊は母の身体を動ぶるようにする。

「私の許の娘もね」と稲垣はそれを言出さずにいられなかった。「お俊ちゃん画をお習いなさるというから、西洋音楽でも習わせようかと思ひまして……ピアノでも……ええ、三味線や踊を仕込むよりもその方が何となく高尚ですから……」

稲垣の話は毎時自分の娘のことに落ちて行つた。それがこの人の癖であつた。

「どれ程稲垣は娘が可愛いかわれない」と宗蔵は稲垣の出て行つた後で言つた。「あの男の御世辞と来たら、堪えられないようなことを言うが……しかし、正直な男サ」

宗蔵と三吉との年齢の相違は、三吉と正太との相違であつた。この兄弟の生涯は、喧嘩と、食物の奪合と、山の中の荒い遊戯とで始まつたようなもので、実に引連れられて東京へ遊学に出た頃は、未だ互に小学校へ通う程の少年であつた。丁度それは二番目の兄の森彦が山林事件の総代として始めて上京して、当時流行つた獵虎の帽子を冠りながら奔走した頃のことだ。その後、宗蔵の方は学校からある紙問屋へ移つた。そこに勤めている間、

よく三吉も洗濯物を抱えて訪ねて行くと、盲目縞の前垂を掛けた宗蔵がニコニコして出て来て、こもつつみ筵包の荷物の置いてある店の横で、互に蔵の壁に倚より凭しかかりながら、少年らしい言葉を交換した。とりかわ「宗様、宗様」と村中の者に言われて育つて来た奉公人の眼中には、おおだな大店の番頭もあつたものではなかった。何か気に喰くわぬことを言われた口惜くやしまぎれに、そろばん十露盤で番頭の頭をブン擲なぐつたのは、宗蔵が年季奉公の最後の日であつた。流浪はそれから始まつた。横浜あたりで逢あつたある少婦おんなから今の病氣を受けたという彼の血氣さか壮さかんな時代——その頃から、不自由な手足を提げて再び身内の懷ふところへ歸つて来るまで、その間どういう暗い生涯を送つたかということ、兄弟ですらよく知らない。母がまだ壯健たっしやでいる時、「宗蔵の身体には梅の花が咲いた」などと戯れて、何卒どうかして宗蔵の面倒を見て死にたい、と言いとおした。彼も今では、「三吉さん」とか、「オイ、君」とか話しかけて、弟より外に心を訴えるものの無い人である。

あくるひ三吉が歸つた翌日、宗蔵は一夏の間の病苦を聞いて貰おうと思つて、先ず弟の旅の獲え物から尋ねた。三吉は橋本の表座敷で木曾川の音を聞きながら書いた物を出して、宗蔵に見せた。一くさり、宗蔵は声を出して読んでみた。そして、「兄弟中で文学の解るものは、君と僕だけだよ」という心こころ地もちを眼で言わせて、やがて部屋の片隅かたすみに置いてある本箱

の方へ骨と皮ばかりのような足を運んだ。

床の間には、父忠寛と同時代の人で、しかも同村に生れた画家えかきの遺した筆が古風な軸に成つて掛つている。鳥を飼う支那風の人物の画である。その質素な色彩いろどりといかにも余念なく餌をくれている人物の容子ようすとは、田舎にあつた小泉の家に適わしいものである。

宗蔵は三吉が留守の間に書溜かきためた和歌の草稿を取出して、それを弟の前に展ひろげた。

「三吉さんとはすこし時代が違うが、僕はまた一夏かかつて、こういうものを作りましたよ。一つ批評して貰おう。君は木曾のような涼しい処に居たから好いサ——僕のことを考えてみ給え、こんな蒸暑い座敷で、汗をダラダラ流して……今年の夏は苦しかったからね」

こう言つて、自分の書いた歌を弟に読み聞かせた。三吉は、この兄の歌そのものより、箸はしも持てないような手で筆を持添えて、それを口に銜くわえて、ぶるぶる震えてまでも猶腹なわなかの中にあることを言表わそうとしたその労苦を思いやった。廃残の生涯とは言いながら、何かせ為すには宗蔵もいられなかつた。彼は病人に似合わない精力を有もつていた。手足は最早枯れかかつて来ても、胴のあたりは大木の幹のように強かつた。病氣しても人一倍食うという宗蔵の憂愁うれいを遣るものは、僅かにこの和歌である。読み聞かせているうちに、痛憤とも、悔悟とも、冷笑とも、名の付けようの無い光を帯びた彼の眼から——ワンと口を開い

たような大きな眼から、絶間もなく涙が流れて来た。

「つくづく君の留守に考えたよ」と宗蔵は手拭^{てぬぐい}を取出して、汗でも出たように顔中拭^{ふきま}廻^わした。「今年の夏ほど僕も種々^{いろいろ}なことを思ったことはないよ。アア」

「そんなに苦しかったんですかね」と三吉も宗蔵の顔を眺^{なが}めた。「木曾に居ても随分暑い日は有りました——東京から見ると朝晩は大変な相違^{ちがひ}でしたが」

「いや、暑いにも何にも。加^{おまけ}に風通しは悪いと来てる。僕なぞはあの窓のところに横に成つてサ、こう熟^{じつ}と身体を動かさずにいたこともあつた。そうすると、君、阿爺^{おやじ}のことが胸に浮^うんで来る……母親^{おつか}さんのことも出て来る……」

冷い壁の下の方へ寄せて、隅^{すみ}のところに小窓が切つてある。その小窓の側が宗蔵の病^{びよう}軀^くを横える場処である。

宗蔵は言葉を継いだ。「阿爺と言え、阿爺の書いた物を大分君の留守に調べたよ。それから僕の持つてゐる書籍^{ほん}で、君の参考に成るだろうと思うようなものも、可成^{かなり}有るよ。ああいふものはいずれ君の方へ遣ろう。君に見て貰おう」

部屋の前は、山茶花さざんかなどの植えてある狭い庭で、明けても暮れても宗蔵の眺める世界はこれより外は無かった。以前には稲垣あたりへよく話しに出掛けたものだが、それすら煩うるさく思うように成った。彼の許ところへと云つて別に訪ねて来る人も無かった。世間との交りは全く絶え果てた形である。

町の響が聞える……

宗蔵は聞入つて、「三吉さん、君だからこんな話をするんだが、僕だって、君、そう皆なから厄介者に思われて、ここの家に居たく無い。ことしの夏は僕もつくづく考えた……三四日ばかり何物なんにも食わずにいてみたことも有った……しかし人間は妙なもののさね、死ぬうと思つたツて時が来なければ容易に死ねる訳のものでは無いね……」

こんなことを、さもさも尋あたりまえ常の話のように宗蔵が言出した。まるで茶でも飲み飯でも食うと同じように。

「どうかすると、『宗さんは御変りも御座いませんか』なんて、いかにも親切らしく言ってくれる人がある。あれは君、『へえ未だ生きてますか』というと同じことだ。僕の兄弟は、皆な——僕が早く死ねば可いと思つて待つてゐる。ははははは。食わしてくれれば食うし、食わしてくれなければそれまでサ」

復た例の調子が始まった、と三吉は思った。

この小泉の家の内の空気は、三吉に取って堪えがたく思われた。格子戸を開けて、空を見に出ると、ついそこが町の角にあたる。本郷から湯島へ通う可成かなり広い道路が左右に展ひらげている。

橋本から写真の着いた日は、実は用達ようたしに出て家にいなかったが、その他のものは宗蔵の部屋に集まって眺めた。稲垣の細君は亭主と言合ったとかで、平素いつもに似合わない元気の無い顔をして来ていた。めずらしい写真が来た為に、何時いつの間にかこの細君も其方へ釣込まれた。

「まあ、それでも、橋本の姉さんは父親おとつさんに克よく肖にて来しましたこと」とお倉が思わず言出した。

宗蔵も眺め入って、「成程なるほど、阿爺にソックリだ」

「姉さんはそんなコワイ顔じゃ有りませんがね——こうして見ると、阿爺が出て来たようです」と三吉も言った。

お種の写真顔は、沈鬱ちんうつな、厳肅な忠寛の容貌おもばせをそのまま見るように撮とれた。三吉の眼にも、木曾で毎日一緒に居た姉の笑顔を見るような気がしなかった。

「達雄さんもフケましたね」と復たお倉が言った。

「おばさん、御覧なさい」とお倉は稲垣の細君に指して見せて、「達雄さんと姉さんとは同年齡おないとしの夫婦なんですよ」

「へえ、木曾の姉さんはこういう方ですか」と細君も横から。

「正太さんはすこし下を向き過ぎましたね。お仙ちゃんが一番よく撮とれました」とお倉が言う。

「どうしても、無心だで」こう宗蔵は附添つけたした。

三吉は、達雄の傍にいる大番頭が特に日蔭の場所を択えらんだことを言って笑った。嘉助の禿頭はげあたまは余計に光って撮れた。大きな石の多い庭、横手に高く見える蔵の白壁、日の映あつた傾斜の一部——この写真に入つた光景ありさまだけでも、田園生活の静かさを思わせる。

「こういう処で暮したら、さぞ暢氣のんきで宜よう御座んしょうね——お金でも有つて」と稲垣の細君が言った。「何卒どうか、まあ皆さんに早く儲もつけて頂いて……」

「真実ほんとに、今のような生活くらしじゃ仕様が有りません……まるで浮いてるんですもの……」

こうお倉も嘆息した。

故郷ふるさとにあった小泉の家——その焼けない前のことは、何時までもお倉に取って忘れられなかった。橋本の写真を見るにつけても、彼女はそれを言出さずにいられなかった。三吉は又たこの嫂まの話ふを聞いて、旧い旧い記憶ふを引出されるような気がした。門の内には古い椿つばきの樹が有って、よくその実で油を絞ったものだ。大名を泊める為に設けたとかいう玄関あによめはたの次には、母や嫂の機あによめはたを織る場所に使用つかった板の間もあった。広い部屋がいくつか有って、そこから美濃みのの平野が遠く絵のように眺められた。阿爺おやじの書院の前には松、牡丹ぼたんなども有った。寒くなると、毎朝家のものが集って、土地の習慣として焼たての芋焼餅いもやきもちに大根おろしを添えて、その息の出るやつをフウフウ言つて食い、夜に成れば顔ほての熱るような火を焚たいて、百姓じしの爺ぢいが草履ぞうりを作りながら、奥山で狐火きつねびの燃える話などをした、そういう楽しい炉辺もあった。

小泉の家の昔を説出した嫂は、更にずっと旧いことまで覚えていて、それを弟達に話し聞かせた。嫂に言わせると、幾百年の前、故郷の山村を開拓したものは兄弟の先祖で、そ

の昔は小泉の家と、問屋と、峠のお頭かしらと、この三軒しかなかった。谷を耕地に宛あてたこと、山の傾斜を村落に択えらんだこと、村民の為に寺や薬師堂を建こんりゅう立りゅうしたこと、すべて先祖の設計に成ったものであった。土地の大半は殆ほとんど小泉の所有と言つても可い位で、それを住む人に割さき与えて、次第に山村の形を成した。お倉かたづが嫁よめいて来た頃ですら、村の者が来て、「旦那、小屋を作るで、林の木をすこしおくなんしよや」と言えば、「才才、持つて行けや」とこの調子で、毎年の元旦には村民一同小泉の門前に集つて先ず年始を言入れたものであった。その時は、祝の餅、酒を振舞つた。この餅を搗つくだけに、小泉では二晩も三晩もかかつて、出入りの者がその度に集つて来た。「アイ、目出度いのい」——それが元日村の衆への挨拶あいさつで、お倉は胸を突出しながら、その時の父や夫の鷹揚おうような態度を真似まねて見せた。

この「アイ、目出度いのい」は弟達を笑わせた。

「真実ほんとに、有る物は皆な分けてくれたようなものですよ」とお倉は思出したように、「それが旧むかしからの習慣で……小泉の家はそういうものと成っていましたから……吾夫やどもね、それも未だ少壮わかい時に、どうでもこうでも小泉の旦那に出て貰わなければ、村が治まらないななんて言われて、村長にまで引張り出されたことが有りましたよ。あの時だって、村の

為に自分の物まで持出してサ……父親おとつさんは又、痢かんの起る度に家を飛出す。峠の爺を頼んで連れて来て貰うたツて、お金でしょう。何なんた度にか山や林を売りました。所詮とてこれではヤリキレないと言つて、それから吾夫やどが郡役所などへ勤めるように成つたんです。事業に手を出し始めてからだつても、そうですよ。一度でも自分に得したことは無い……何時いつでも損ばかり……苦しいもんですから種々な人を使用つかう氣に成る、そうしちやあ他ひとの分まで皆な自分で背負込んで了う……それを思うと、私は吾夫やどが氣の毒にも成つてサ」

思わず嫂は弟達や稲垣の細君を前に置いて話し込んだ。

「そうだ——自分に得したことのない人だ」と三吉も言つてみた。

その日は宗藏も珍しく機嫌よく、身体の不自由を忘れて、嫂の物語に聞き惚ほれていた。実が刑余の人であるにも関かわらず、こういう昔の話が出ると、弟達は兄に対して特別な尊敬の心を持った。

主人の実は屋外そとから歸つて来た。続いて稲垣も入つて来た。夫の声が格子戸のところでは聞えたので、急に稲垣の細君は勝手の方へ隠れて、やがて娘のことを案じ顔に裏口からコソコソ出て行つた。

「家内は御宅へ参りませんでしたか」と稲垣は縁側から顔を出して尋ねた。

「ええ、今し方まで……」とお倉は笑いながら答える。

「オイ、稲垣君、君は細君を掃出はきだしたなんて——今、細君が愁訴いいつけに來たぜ」と宗藏も心やすだてに。

「いえ——ナニ——」と稲垣は苦笑にがわらいして、正直な、気の短かそうな調子で、「少しばかり衝突してネ……彼女あいつは口惜くやし紛まぎれに筭こうを折がちまやがった……馬鹿な……何処どこの家にもよくあるやつだが……」

「子供が有るんで持ったものですよ」とお倉は慰め顔に言つて、寂しそうな微笑えみを見せた。

木曾の姉からの写真を見た後、実は奥座敷へ稲垣を呼んで、銀行の帳簿を受取つたり、用向の話をしたりした。

稲垣は出て行つた。実は更に三吉を呼んで、弟の為に結婚の話始めた。

三吉も結婚期に達していた。彼の友達の中には、最早もう子供のある人も有り、妻を迎えたばかりの人も有り、婚約きの定きまった人も有つた。大島先生という人の勧めから始まつて、彼の前にも結婚の問題が起つて來た。その縁談を實が引取て、大島先生と自分との交渉に

移したのである。

三吉の過去は悲惨で、他の兄弟の知らないような月日を送ったことが多かった。実が一度失敗した為に、長い留守を引受けたのも彼が少壮な時からで、その間幾多の艱難を通り越した。ある時は死んでも足りないと思われる程、心の暗い時すらあった。僅かに夜が明けたかと思う頃は、辛酸を共にした母が亡くなった。彼には考えなければ成らないことが多かった。

大島先生から話のあった人は、六七年前、丁度十五位の娘の時のことを三吉も幾分か知っており、嫂は又、その頃房州の方で一夏一緒に居たことも有って、大凡気心は分つていたが、なにしろ三吉のような貧しい思をして来た人ではなかった。彼は負債も無いかわりに、財産も無い。再三彼は辞退してみた。しかし大島先生の方では、一書生に娘を嫁かせようという先方の親の量見をも能く知つてゐるとのこと、
「万事俺が引受けた」と実はまた呑込顔でいる。こんな訳で、三吉はこの縁談を兄に一任した。

「お雪さんなら、必と好かろうと思ひますよ」とお倉もそこへ来て、大島先生から話のあった人の名を言つて、この縁談に賛成の意を表した。

「なにしろ、大島先生の話では、先方の父親さんが可愛がつてる娘だそうだ」と実も言つ

た。「俺はまあ見ないから知らんが、父親さんに気に入る位なら必ず好かろう」

「私は能く知ってる」とお倉は引取て、

「脚氣かつけで房州の方へ行きました時に、あの娘こと、それからもう一人同年齡位おないとしぐらいな娘と、

学校の先生に連れられて来ていまして一月程一緒に居ましたもの——尤もつともあの頃は年もいかないし、御友達と一緒に貝を拾つて、大騒ぎするような時でしたがね——あの娘なら、

私が請合う」

「それに、大島先生があの子の家へ行つて泊つてたことも有るそうだ」と復またた実が言つた。

「その時話が出たものだろう。父親さんという人が又余程變つてゐるらしいナ」

こう実いさは種々いろいろと先方うわさの噂うわさをして、「三吉も、それでもお嫁さんを貰うように成つたか

ナア——早いものだ」などと言つて笑つた。実が前垂掛あぐらで胡坐あぐらにやつてゐる側には、大

き桐きりの机きが置いてあつて、その深い抽斗ひきだしの中に平常小使いつもが入れてある。お倉は夫うしろの背後

へ廻いつて要いるだけの錢の音をさせて、やがて用事ありげに勝手の方へ出て行つた。

「宗おさんを措おいて、僕が家を持つのも變なものですネ」と三吉は言出した。

「あんな者はダチカン」と実は思わず国の言葉を出した。「どれ程俺が彼あれに言つて聞かせ

て、貴様は最早死んだ者だ、そう思つて温順おとなしくしておれ、悟さとを開いたような氣分でおれ

ツて、しよっちゅう平常言うんだが……それが彼には解らない」

「どうしてあんな風に成つちまつたのですかナア」

「放蕩ほうとうの報酬むくいサ」

「余程たち質おんなの悪い婦女にでも衝突ぶつつたものでしょうかナア」

「皆な自分から求めたことだ。それを彼が思つたら、もうすこし閉口しておらんけりや成らん。土台間違つて……多勢兄弟が有ると、必きつとああいう屑くずが一人位は出て来る……何処どこの家にもある」

宗藏の話が出ると、実は口唇くちびるを嚙かんで、ああいう我儘わがままな、手数てすうの掛る、他所よそから病氣を背負つて転がり込んで来たような兄弟は、自分の重荷に堪えられないという語氣を泄もらした。そればかりではない、実が宗藏を嫌きらい始めたのは、一度宗藏が落魄らくはくした姿に成つて故郷の方へ歸つて行つた時からであつた。その頃は母とお倉とで家の留守をしていた。お倉は未だ若かつた。

「兄弟に憎まれれば、それだけ損だがナア」と実は嘆息するように言つた。「いづれ宗藏の為には、誰か世話する人でも見つけて、其方そつちへ預けて了おうと思う——別にでもするより外に仕様のない人間だ」

三吉も書生ではいられなくなつた。家を持つ準備したくをする為には、定きまつた収入のある道を取らなければ成らなかつた。彼は学校教師の口でも探すように余儀なくされた。

ある日、実は弟に見せる物が有ると言つて、例の奥座敷へ三吉を呼んだ。

「三吉さん——私もすこし兄さんに御話したいことが有る。御手間は取らせませんから、先へ私に話させて下さいな」

こう稲垣の細君が来て言つて、三吉と一緒に実の居る方へ行つた。実は直に細君の用事ありげな顔付きを看みて取つた。

稲垣の細君は何遍か言い淀よどんだ。「そりやもう、皆さんの成なさる事業ことですから、私が何を言おうでは有りませんが……何時まで待つたら験けんが見えるというものでしょう。どうも吾夫やどの話ばかりでは私に安心が出来なくて……」

「ああ、車の方の話ですか」と実はコンコン咳せきをした後で言つた。「ちゃんと技師に頼んで有りますからね。そんな心配しなくても、大丈夫」

「いえ——吾夫やどでも、小泉さんに御心配を掛けては濟まない、そのかわり儲もうけさして頂く

時には——なんて、そう言い暮しましてね。實際吾夫も苦しいもんですから、田舎から出て来た母親おつかさんを欺だますやら、泣いて見せるやら、大芝居をやらかしているんですよ」

「お金の要ることが有りましたら、稲垣さんにもそう言つて置きましたが——銀行に預けて有りますからね」

「そう言つて頂けば私も難ありがた有いんですけれど……でも、何とか前途さきの明りが見えないことには……何処まで行けばこの事業しごとが物に成るものやら……」と言つて、細君は不安な

眼付をして、「私がこんなことを言いに来たなんて、吾夫に知れようものなら、それこそ大叱責おおしかられ——殿方と違つて女というものはとかくこういうことが氣に成るもんですよ」

稲垣の細君は実の機嫌そこを損ねまいとして、そう煩うるさくは言わなかった。お俊の噂、自分の娘のことなどを少し言つて、やがてお倉の居る方へ起たつて行つた。

実の机の上には、水引を掛けるばかりにした祝の品だの、奉書したたに認めた書付だのが置いてあつた。兄は先方へ贈るように用意した結納ゆいのうの印を開けて弟に見せた。

「どうだ——大島先生から届けて貰うようにと思つて、こういう帯地を見立てて来た——縷珍しゅちんだ」

「こんな物でなくつても可かつたでしょうに」と三吉は言つてみた。

「兄貴が附いてて、これ位のことが出来ないでどうする——俺の体面（か）に関わる」と実の眼が言った。

三吉は兄に金を費（つか）わせることを心苦しく思った。結婚の準備（したく）もなるべく簡単にしたい、借金してまで体裁をつくろう必要は無い、と思った。小泉実はそれでは済まされなかった。お俊も小学校の卒業に間近く成つて、これから何処の高等女学校へ入れたら可（よ）かろうなどと相談の始まる頃には、三吉の前にも二つの途（みち）が展（ひら）けていた。一つは西京の方に教師の口が有つた。一つは往時（むかし）英語を学んだ先生から自分の学校へ来てくれないかとの手紙で、是方は寂しい田舎ではあり、月給も少かつた。しかし三吉は後の方を択んだ。

春の新学期の始まる前、三吉は任地へ向けて出発することに成つた。仙台の方より東京へ帰るから、この田舎行の話があるまで——足掛二年ばかり、三吉も兄の家族と一緒に暮してみた。復た彼は旅の準備（したく）にいそがしかった。彼は小泉の家から離れようとした。別に彼は彼だけの新しい粗末な家を作ろうと思ひ立つた。

四

三吉は発^たつて行つた。一月ばかり経つて、実は大島先生からの電報を手にした。名倉の親達は娘を連れて、船に乗込む、とある。名倉とは、大島先生が取持^ととうとする娘の生家^{さと}である。

「来る来るとは言つても、この電報を見ないうちは安心が出来なかつた。先^まず好かつた——実に俺^{おれ}は心配したよ」

こう実はお倉を奥座敷へ呼んで言つて、早速稲垣をも呼びにやつた。稲垣は飛んで来た。「へえ、名倉さんでは最早^も御発ちに成つたんですか。船やら——汽車やら——遠方をやつて来るなんて容易じや有りません」

と稲垣も膝^{ひざ}を進める。賑^{にぎや}かな笑声は急に家の内に溢^{あふ}れて来た。

実の机の上には、何処^{どこ}の料理店で式を挙げて、料理は幾品^{およ}、凡そ幾人前、酒が幾合ずつ、半玉^{いくたり}が幾人、こう事細かに書いた物が用意してあつた。

「時に、銚^{ちようし}子を持つ役ですが」と実は稲垣の方を見て、「君の許^{とこ}の娘を借りて、俊と、二人出そうと思いましたがね、それも面倒だし……いつそ雛妓^{おしやく}を頼むことにしました」「その方が世話なくて好い」とお倉が言葉を添える。「雄蝶^{おちよう}、雌蝶^{めちよう}だなんて、娘達に教えるばかりでも大変ですよ」

「いや、そうして頂けば難^{ありがた}有^い」と稲垣も言った。「実は吾家^{うち}でもその事で氣を揉^もんでいました。それから式へ出るのは、私だけにして下さい。簡単。簡単。皆な揃^{そろ}って押出すのは、大に儲^{もう}けた時のことにしましょう——ねえ、姉さん」

「眞^{ほん}実に、そうですよ」とお倉は微笑^{ほほえ}んで、「私なんか出たくも、碌^{ろく}な紋付も持たない」「まあ、姉さんのように仰^{おつしや}るものじゃ有りません」と言つて、稲垣は手を振つて、「出たいと思えば、何程^{いくら}でも出る方法は有りますがね——隣の娘なんか借着で見合をしましたよね、御覽なさい、それをまた損料で貸して歩く女も居る——そういう世の中ですけれど、時節というものも有りますからね」

「簡単。簡単」と実も力を入れて命令するように言つた。

稲垣は使に出て行つた。料理屋へは打合せに行く、三吉の方へは電報を打つ、この人も多忙^{いそが}しい思いをした。その電報が行くと直ぐ三吉も出て来る手筈^{てはず}に成つていた。

「宗蔵は暫^{しばらく}時稲垣さんの方へ行つておれや」

と兄に言われて、宗蔵も不承々に自分の部屋を離れた。彼は、不自由な脚^{あし}を引摺^{ひきず}りながら、稲垣の家の方へ移されて行つた。

婚礼の日は、朝早く実も起きて庭の隅^{すみ}々まで掃除した。家の内も奇麗に取片付けた。

奥座敷に並べてある諸道具は、丁寧に鳥毛の塵ちりばらい払はをかけて、机の上から筆筒たんす茶戸棚ちやとだなまで、自分の氣に入つたように飾つてみた。火鉢ひばちの周圍まわりには座蒲団ざぶとんを置いた。煙草盆たばこぼん、巻煙草入、灰皿なども用意した。こうして、独りひとで茶を入れて、香かおりの薫かおりに満ちた室内を眺め廻した時は、名倉の家の人達が何時いつ来ても好いと思つた。床の間に飾つた孔雀くじゃくの羽いろどりの色彩ことは殊に彼の心よろこを歎なげばせた。

弟の森彦からも、三吉の結婚を祝つて来た。その手紙には、自分は今旅舎住居やどやずまいの境遇であるから、式に出ることだけは見合わせる、万事兄上の方で宜敷よろしく、三吉にも宜敷、としてあつた。

「貴方、俊の下駄げたを買つて来ました——見てやつて下さい」

こう言つて、お倉は娘と一緒に買物から歸つて来た。

「どれ、見せろ」と実は高い表付の赤く塗つた下駄を引取つた。「こんな下駄を穿はかして、式に連れて行かれるものか。これは、お前、雛妓おしやくなぞの穿くような下駄だ」

「だって、『母親おつかさん、これが好い、これが好い』ツて、あの娘こが聞かないんですもの」とお倉が言う。

「親が附いて行つて……こんなものはダチカン……鈴の音のしないような、塗つて無いの

が好い。取替えて来い」と実は叱るように言つた。

「私も、そうも思つたけれど」とお倉は苦笑しながら。

「母親さん、取替えて来ましようよ」と娘は母の袂を引いた。

生め、殖せ、小泉の家と共に榮えよ——この喜悅は実が胸に満ち溢れた。彼は時の経つのを待兼ねた。遠方から着いた名倉の母、兄などは、先ず旅舎で待つということ、実と稲垣とは約束の刻限に其方へ向けて家を出た。

丁度、お倉の実の姉のお杉も、手伝いながら来て、掛っている頃であつた。このお杉の他に、稲垣の細君もやつて来て、二人してお俊の為に晴の衣裳を着せるやら、帯を〆しめ〆させるやらした。直樹の老祖母さんも紋付を着てやつて来た。目出度、目出度、という挨拶は其処にも此処にも取換された。田舎の方から引返して来た三吉は、この人達と一緒に、料理屋を指して出掛けた。日暮に近かつた。

一同出て行つた後、家に残つた人達は散乱つた物を片付けるやら、ざつと掃除をするやらした。その晩は平常より洋燈の数を多く点けて、薄暗い玄關までも明るくした。急に家

の内は改まったように成った。

「今晚は」

と稲垣の娘も入って来て、母親と一緒に成った。お杉、お倉なども長火鉢の周圍に集つた。

稲垣の細君は起つて行つて、次の部屋に掛けてある柱時計を眺めて、それから復た娘の側へ戻つた。

「最早それでも皆さんは料理屋の方へ被入したでしようか」と稲垣の細君が言つてみた。「どうして、おばさん、未だナカナカですよ」とお倉は笑つて、「名倉さんの旅舎で御酒が出るんですもの。散々彼処で祝つて、それからでなければ——」

「丁度今頃は御酒の最中だ」とお杉も言つた。

「名倉さんの方では母親さんと兄さんと附いていらしたんですツてね。必とまた吾家の阿爺が喋舌つていましようよ。遠方から来た御客様をつかまえて、ああだとか、こうだとかツて——しかし、母親さんも御大抵じや有りませんね、御嫁さんの仕度から何から一人で御世話を成さるんじや……」

こう稲垣の細君が言つと、娘は母に倚凭りながら、結婚ということを想像してみるよ

うな眼付をしていた。

部屋々々の洋燈は静かに燃^{とほ}つた。お倉は一つの洋燈の向うに見える丸^{まる}蓋^{がさ}の置洋燈の灯を眺めて、

「私なぞも小泉へ嫁^{かたづ}いて来る時は——真^{ほん}実^とに、まあ、昔話のように成^なつて了^{しま}つた——最早親の家にも別れるのかと思つて、ちよつと敷居^{また}を跨^{また}ぐと……貴^{あなた}方、涙がボロボロと零^{こぼ}れて……」

稲垣の細君も思出したように、「誰でもそうですよ、あんな哀^{かな}しいことは有りませんよ」「もう一度私もあんな涙を零してみたい——」とお杉も笑つて、乾いた口唇^{うるお}を濡^{うる}すようにした。「アアアア、こんなお婆さんに成^なつちや終^{おしまい}だ……年を拾^おうばかりで……」

「厭^{いや}だよ、この娘^こは——ブルブル震えてサ」と稲垣の細君は娘の顔を眺めて言つた。

「何だか小母^{おぼ}さんの身体まで震えて来た」

こうお杉は細君の手から娘を抱取るようにして笑つた。

静かな夜であつた。上野の鐘は寂^{しん}とした空氣に響いて聞えて来た。留守居の女達は、楽しい雑談^{ふけ}に耽^{ふけ}りながら、皆なの帰りを待つていた。

柱時計が十時を打つ頃に成つて、一同車で歸つて来た。急に家の内は人^{べん}で混雜^{ごんざ}した。

「どうも名倉さんの母親さんには感心した。シツカリしたものだ」

こう実と稲垣とは互に同じようなことを言った。復た酒が始まった。その時、三吉の妻は家の人々や稲垣の細君などに引合わされた。

「お俊ちゃん、叔母さんが一人増えたことね」と稲垣の娘が言った。

「ええ、そうよ、お雪叔母さんよ」とお俊も笑った。

「稲垣さん、種々御尽力で難有う御座いました」と実は更に盃を差した。

「酒はもう沢山」と稲垣は手を振って、「今夜のように私も頂いたことは有りません」

「こんな嬉しいことは無い」と実は繰返し言った。「私一人でも今夜は飲み明かさなくちや成らん」

「三吉——宗蔵はお前の方へ頼む。今度田舎へ行く序に、是非一緒に連れてツてくれ」

こう実は、婚礼のあつた翌日、三吉に向つて茶話のように言出した。

巢を造るか造らないに最早かういう難題が持上ろうとは、三吉も思いがけなかった。お杉やお倉ですら持余もてあましている宗蔵だ。その病人の世話が、嫁かたづいて来たばかりのお雪に届

くであろうか、覺^{おぼ}束^{つか}なかつた。実の頼みは、茶話のようで、その実無理にも強^しいるような力を持っていた。とにかく、三吉は田舎へ発つまでに返事をすることにした。

一方に学校を控えていたので、そう三吉もユックリする余裕は無かつた。不取敢^{とりあえず}、森彦、宗蔵の二人の兄に妻を引合せて行きたいと思つた。

名倉の母達が泊つてゐる宿からは、柳行李^{やなぎごうり}が幾個^{いくつ}も届いた。「まあ、大変な荷物だ」と稲垣も来て言つて、仮にそこへ積重ねてくれた。

稲垣の家は近かつた。三吉はお雪を連れて、その方に移されていた宗蔵を訪ねた。この病人の兄は例の縮^{ちぢ}かまつたような手を揉^もんで、「遠方から御苦勞様」という眼付をして、弟の妻に挨拶^{あいさつ}した。

「宗さんには逢^あつた。これから森彦さんの許^{ところ}だ」と三吉は稲垣の家を出てから言つた。

「その兄さんは何を為^なさる方ですか」こうお雪が聞いた。

長いこと森彦は朝鮮の方に行つてゐた。東亜の形勢ということに眼を着けて、その間種々な方面の人に知己の出来たことや、時には貿易事業に手を出したことなどは、大体の輪廓^{わうかく}だけしか身内の者の間に知られていなかった。それから歸つて来て、以前尽力した故郷の山林事件の為に、有志者を代表して奔走を続けている。この兄は、一平民として、地方

の為に働きつつあるとは言える。しかし、何——屋とか、何——者とか、一口に話せないような人であつた。

「まあ、俺おれと一緒に行って、逢つてみるが可い」

三吉はこんな風に言つてみた。

森彦の旅舎やとやへは、お俊も三吉夫婦に伴われて行つた。二階の座敷には熊の毛皮などが敷いてあつて、窓に寄せて、机、碁盤ごばんの類が置いてある。片隅かたすみに支那鞆かばんが出してある。室内の心地こころもちよく整頓せいとんされた光景さまを見ても、長く旅舎住居をした人ということが分る。

「よく来てくれた。私は兄貴ところの許へ手紙を遣つて置いたが、名倉さんにもお目に懸らなくて失礼しました。今日は一つ、皆なに西洋料理でも御馳走ごちそうしよう」こう森彦は言つて、茶盆を取出して置いて手を鳴らした。

「何か御用で御座いますか」と宿の内儀かみさんが入つて来た。

「ヤ、内儀おかみさん、これが弟の嫁です」と森彦はお雪を紹介した。「時に、何か甘い菓子を取りに遣つて下さい」

「では、僕も巻煙草を頼もう」と三吉が言つた。

「三吉はえらく煙草ふかを燻すように成つたナ」と森彦はすこし顔をシカめた。この兄は煙草

も酒もやらなかった。

昼食^{ひる}には、四人で連立って旅舎を出た。森彦は弟達をある洋食屋の静かな二階へ案内した。そこで故郷の方に留守居する自分の家族の噂^{うわさ}をした。

森彦にも遇^あわせた。三吉は更に、妻の友達にも、と思つて、二人の婦人^{おんな}の知人^{しりひと}を紹介しようとした。お雪も逢つてみたいと言う。で、順にそういう人達の家を訪問することにした。

暮れてから、三吉は曾根^{そね}という家の方へお雪を連れて行つた。

曾根は、お雪が学校時代の友達の叔母にあたる人で、姉の家族と一緒に暮していた。細長い陶器^{せともの}の火鉢を各自^{めいめい}に出すのがこの家の習慣に成っていた。その晩はある音楽者の客もあつて、火鉢が何個^{いくつ}も出た。ここはすべてが取片付けてあつて、あまり部屋を飾る物も置いて無い。子供のある家で、時々泣出す声も聞える。六つばかりに成る、色の白い、髪を垂下げた娘が、曾根の傍へ来て、三吉夫婦に御辞儀をした。

「まあ、可愛らしいお娘^こさんですね」

とお雪が言うと、娘は神経質らしい容子しなをして、やがてキマリが悪そうに出て行つた。

お雪から見ると、曾根は年長としうえだった。お雪の眼には、憂鬱ゆううつな、気心の知れない、隠そう隠そうとして深く自分を包んでいるような、まだまだ若く見える女が映つた。曾根は最早いろいろな境涯を通り越して来たような人であつた。言葉も少なかった。

客もあつたので、夫婦は長くも居なかつた。小泉の兄の家へ歸つてから、三吉はこんな風に妻に尋ねてみた。

「どうだね、あの人達は」

「そうですね……」

とお雪は返事に窮こまつた。交際つきあつて見た上でなければ、彼女には何とも言つてみようが無かつた。

翌日あくるひの午後、三吉達は東京を発つことにした。買物やら、荷造やら、いそがしい思をした。その時、三吉は実の居るところへ行つて、一と先まず宗蔵の世話ことわを断つた。

「あれはすこし無理だった——俺の方が無理だった」

と実は笑いながら点頭うなずいた。

名倉の母や兄からは、停車場ステーションまでは見送らないと言って、お雪の許へ筆筒を買う金を

二十円ほど届けて来た。別離わかれの言葉が取換とりかわされた。三時頃には、夫婦は上野の停車場へ荷物と一緒に着いた。多くの旅客も集つて来ていた。

暗くなつて三吉夫婦は自分等の新しい家に着いた。汽車の都合で、途中に一晩泊つて、猶なほさ程旅を急がなかつた為に、復た午後から乗つて来た。その日のうちに着きさえすれば可い、こういう積りであつたので。お雪は汽車を降りるから自分の家の庭に入るまで、暗い、知らない道を夫に連れられて来た。

庭を上ると、直ぐそこは三尺四方ばかりの炉を切つた部屋で、炉辺ろべたには年若な書生が待つていた。この書生は三吉が教えに行く学校の生徒であつた。

「明日は月曜ですから、最早それでも御帰りに成る頃かと思つて、御待ち申していました」と書生はお雪に挨拶した後で言つた。

「大分ユツクリやつて来ました」と三吉も炉辺くつろに寛いだ。

お雪は眺め廻ながしながら、

「へえ、こういうところですか」

と言つて、書生に菓子などを出して勧めた。先ず眼につくものは、炉に近い戸棚、暗い煤^{すす}けた壁、大きな、粗末な食卓……

「ここは士族屋敷の跡なんだそうだ」と三吉は妻に言い聞かせた。「後の方に旧^{もと}の入口があるがね、そこは今物置に成てる。僕等が入つて来たところは、先に住んだ人が新規^{こしら}に造^{つく}えた入口だ。どうも、酷^{ひど}い住方をして行つたものサ。壁を張る、畳を取替える——漸^{ようや}くこれだけに家らしくしたところだ。この炉も僕が来てから造り直した」

書生は物置部屋の方から奥の洋燈^{ラング}を点^{つつ}けて出て来た。三吉はそれを受取つて、真暗な台所の方へ妻を連れて行て見せた。広い板間^{いたのま}、立て働くように出来た流^{ながし}許^{もと}、それからいかにも新世帯らしい粗末な道具しかお雪の目に入らなかつた。台所の横手には煤けた戸があつた。三吉はそれを開けて、そこに炭、薪、ボヤなどの入れてあることを言つて、洋燈を高く差揚げて見せたが、お雪には暗くてよく見えなかつた。

「ここをお前の部屋にするが好い」

と三吉が洋燈を持つて案内したのは、炉辺の次にある八畳の間で、高い天井、茶色の壁紙で貼^はつた床の間などがお雪の眼についた。奥には、これと同じ大きさの部屋があつて、そこには本や机が置いてある。その隣に書生の部屋がある。割合に広い住居ではあつたが、な

にしろ田舎臭い処であつた。

停車場前で頼んで置いた荷物も届いた。夫婦は未だ汽車で動ゆられているような気がした。途中から一緒に汽車に乗り込んで来た夫婦ものらしい人達は、未だ二人の前に腰掛けて二人の方を見て、何か私語ささやき合っているらしくも思われた。あの細君の大きな目——あの亭主の弱々しい、力のない眼——そういうものは考えたばかりでも羞しゆう恥うちの念を起させた。二人は人に見られて旅することを羞はじた。どうかすると互に顔を見ることすら避けたかつた。

戸の透間すきまが明るく成つた。お雪は台所の方へ行つて働いた。裏口を開けて屋外そとへ出てみると、新鮮な朝の空気は彼女に蘇いきかえ生なるような力を与えた。その清々せいせいとした空気はお雪が吸つたことの無いようなものであつた。

一晩知らずに眠つた家は隣と二軒つづきの藁わら葺ぶきの屋根であつた。暗くて分らなかつた家の周囲まわりもお雪の眼前めのまえに展ひらけた。彼女は、桑くわ畠はたけの向に見える人家や樹木の間から、遠く連つづいた山々を望むことの出来るような処へ来ていた。ゴットン、ゴットンと煩うるさく耳に

ついたは、水車の音であつた。

裏には細い流もあつた。胡頹子ぐみの樹の下で、お雪は腰を曲めて、冷い水を手に掬すくつた。隣の竹藪たけやぶの方から草を押して落ちて来る水は、見ているうちに石の間を流れて行く。こういう処で顔を洗うということすら、お雪にはめずらしかつた。

例の書生は手桶ておけを提さげて、表の方から裏口へ廻つて来た。飲水を汲くむ為には、唐松からまつの枝で囲つた垣根の間を通つて、共同の掘井戸まで行いなければ成らなかつた。

前の晩に見たよりは、家の内の住み荒あされた光景ありさまも余計に目についた。生家さとを見慣れた眼で、部屋々々を眺めると、未だ四辺そこいちを飾る程の道具一つ出来ていなかった。

書生はよくお雪の手伝いをした。不慣な彼女が勝手で働いている間に、奥の方の庭までも掃除を済ました。バケツを提さげて、その縁側へお雪が雑巾掛ぞうきんかけに行つてみると、丁度躑つじ躑つじの花の盛りである。土塀どべいに近く咲いた紫と、林檎りんごの根のところに蹲うずくま踞くまつたような白とが、互に映り合て、何となくこの屋根の下を幽静しずかな棲居すまいらしく見せた。土塀の外にも力チヤ力チ鍋なべを洗う音などがした。向の高い白壁には朝日が映あつて来た。

飯の用意も出来た。お雪は自分の手で造つたものを炉辺の食卓の上に並べて、夫にも食わせ、自分でも食つた。書生も楽しく笑いながら食つた。世帯を持って初めての朝、味噌みそ

汁も粗末な椀で飲だ。お雪が生家の知人から祝ってくれたもので、荷物の中へ入れて持
 って来た黒塗の箸箱などは、この食卓に向きそうも無かった。

やがて三吉や書生が学校へ行く時が来た。質素な田舎のことで、着て出る物も垢さえ着
 いていなければそれで間に合った。お雪は夫の為に大きな弁当箱を包んだ。こんな風にし
 て、彼女は新婚の生涯を始めた。奉公人を多勢使つて贅沢に暮して来た日までのことに
 比べると、すべて新たに習うようなものである。とはいえ、お雪は壮健な身体を持ってい
 た。彼女は夫を助けて働けるだけ働こうと思つた。

鍛冶屋に注文して置いた鍬が出来た頃から、三吉は学校から帰ると直ぐそれを手にして、
 裏の畠の方へ出た。彼は家の持主から桑畠の一部を仕切つて借りた。そこは垣根に添うた、
 石塊の多い、荒れた地所で、野菜畠として耕す前には先ず堅い土から掘起して掛らなけ
 れば成らなかつた。

俗に鉄道草と称える仕末に負えない雑草が垣根の隅に一ぱい枯残っていた。それを抜取
 るだけでも、三吉はウンザリして了つた。その他の雑草で最早根深く蔓延っているのも有

つた。青々とした芽は、其処にも、是処にも、頭を擡げていた。

労苦する人達の姿が三吉の眼に映り初めたのは、橋本の姉の家へ行く頃からであった。木曾に居る時も、幾分か彼はその心地を紙に對つて書いた。こうして僅かばかりの地所でも、實際自分で鋤を執つて耕してみるところとは、初めてである。不慣れた三吉は直に疲れた。彼の手足は頭脳の中で考えたように動かなかつた。時々彼はウンと腰を延ばして、土の着いた重い鋤に身体を持たせ凭けて、青い空気を呼吸した。

マブしい日が落ちて来た。三吉は眼鏡の上から頬冠りして、復た働き始めた。

「どうも、好く御精が出ます」

と声を掛けて、クスクス笑いながら垣根の外から覗いて通る人があつた。学校の小使だ。この男の家では小作をして、小使の傍ら相応の年貢を納めている。いずれ三吉はこの男に相談して、畠の手伝いを頼もうと思つた。野菜の種も分けて貰おうと思つた。

翌日も、学校から帰ると直ぐ三吉は畠へ出た。

お雪は垣根と桑畠の間を通つて、三吉の働いている処へ来た。書生も後から随いて来た。「オイ、そんなところに立つて見ていないで、ちと手伝いをしろ」と三吉が言た。

「御手伝いに來たんですよ」とお雪は笑つた。

「お前達はその石塊いしころを片付けナ」と三吉は言付けて、「子供のうちから働きつけた者でなくちゃ駄目だね——所詮とてもこの調子じゃ、俺も百姓には成れそうも無いナ」

三吉は笑つて、一度掘起した土を復た掘返した。大な石塊が幾個いくつも幾個も出て来た。

お雪も手拭を冠り、尻端を折つて、書生と一緒に手伝い始めた。石塊は筈やぶに入れて、水の流の方へ運んだ。掘起した雑草の根は畠の隅に積重ねてあつた。その容易に死なない、土の着いた、重いやつを、何度にか持運んで捨てに行くことすら、お雪には一仕事であつた。三人は日光を浴びながら一緒に成つて根氣に働いた。

「頼冠りも好う御座んすが、眼鏡が似合いません」

こうお雪は夫の方を見て、軽く笑うように言つた。書生も立つて見ていた。三吉も苦にがわ笑らいして、土の着いた手で額の汗を拭ぬぐつた。

清い流で鍬を洗つて、入口の庭のところに腰掛けながら、一服やった時は、三吉も楽しい疲労つかれを覚えた。お雪も足を洗つて入つて来た。激しく女の労働する土地で、麻の袋を首に掛けながら桑畠へ通う人達が会釈して通る。お雪は家を持つ早々こうして女も働けば働

けるものかということを知った。

嫁かたづいて来たばかりで、まだ娘らしい風俗がお雪の身の辺まわりに残っていた。彼女の風俗は、豊かな生家さとの生活を思わせるようなもので、貧しい三吉の妻には似合わなかった。紅あかく燃えるような帯揚げなどは、畠に出て石塊いしころを運ぶという人の色彩いろではなかった。

三吉はお雪の風俗から改めさせたいと思った。彼は若い妻を教育するような調子で、高い帯揚げしんの心は減らせ、色はもつと質素なものを択えらべ、金の指輪も二つは過ぎたものだ、何でも身の辺まわりを飾る物は蔵しまって置けという風で、この夫の言うことはお雪に取って堪え難いようなことばかりであった。

「今から浅黄の帯揚げなぞがメ《し》められるもんですか」とお雪はナサケないという眼付をした。「今からこんな物を廃よせなんて——若い時にメなければゑる時はありやしません」とはいえ、お雪は夫の言葉に従った。彼女は今までの飾を脱ぎ去って、田舎教師の妻らしく装うことにした。「よくよく困った時でなければ出すなッて、阿爺おとつさんに言われて貰って来たんですが……」と言って、百円ばかりの金の包まで夫の前に置いた。お雪は又、附添つけたして、仮令たとひ倒死のたれじにするとも一旦嫁とついだ以上は親の家へ帰るな、と堅く父親に言い含められて来たことなどを話した。凜然りんとした名倉の父の気魄きはく、慈悲——そういうものは、

お雪の言葉を通してほぼも略三吉に想像された。

「若布わかめは宜よう御座んすかねえ」と門口に立つて声を掛ける女が幾人いくたりもあつた。遠く越後の方から来る若い内儀かみさんや娘達の群だ。その健気けなげな旅姿を眺めた時は、お雪も旅らしい思に打たれた。蛙の鳴声も水車の音に交つて、南向の障子に響いて来る……ガタガタ荷馬車の通る音も聞える……

この三吉の家は旧い街道の裏手にあたつて、古風な町々に連続つづいたような位置にある。

お雪は一度三吉に連れられて、樹木の多い谷間たにあいを通つて、校長という人の家に案内された時、城跡に近い桑畠の向に建物の窓を望んだ。それが夫の通う学校であつた。三吉はその道を取ることもあり、日によつては裏の流について、停車場前の新しい道路を横に切れて、それから桑畠だの石垣だのの間を折れ曲つて鉄道の踏切のところへ出ると、そこで一里も二里も通つて来る生徒の群に逢あつて、一緒にアカシヤの生おい茂つた学校の表門の前へ出ることもある。お雪は夫の話によつて、自分等の住む家が大きな山の上の傾斜の中途にあることを知つた。幾十里隔てて、橋本の姉と同じ国に來ているような気がしない、と夫は言つたが、お雪にはまだその方角さえも判然はつきりしなかつた。

裏の畠には、学校の小使に習つて、豆、馬鈴薯じゃがいも、その他作り易い野菜から種を播まいた。
葱苗ねぎなえを売りに来る百姓があつた。三吉の家では、それも買つて植えた。

お雪が三吉の許もとへ嫁いて来るについては種々いろいろな物が一緒に附纏つきまとつて来た。「未来のWと思つていたが、君が嫁いて失望した……いずれその内に訪ねて行く……」こんなことを女名前にして書いて寄よこす人も有つた。お雪はそれを三吉に見せて、こういう手紙には迷惑もっすると言つた。三吉は好奇心を以て読よみみた。放擲うっちゃらかして置いた。どうかするとお雪は不思議な沈黙ありさまの状態に陥おちることも有つた。何か家の遣方やりかたに就いて、夫から叱られるようなことでも有ると、お雪は二日も三日も沈んで了う。眼に一ぱい涙を溜ためていることも有る。こういう時には三吉の方から折れて出て、どうしても弱いものには敵かなわないという風で、種々に細君きげんの機嫌を取つた。

「氷豆腐というものもナカナカ好いものだね……ウマイ……ウマイ……今日の菜さいは好く出来た……」

こう三吉の方で言うと、お雪も氣を取直して、夫と一緒に楽しく食うという風であつた。
尤もこの沈黙はそう長くは続かなかつた。一度その状態ありさまを通り越すと、彼女は平素いつものお

雪に復かえった。そして、晴々しい眼付をして、復た根氣よく働いた。お雪は夫の境涯をさ程苦にしているでもなかった。

お雪の部屋には、生家さとから持つて来た道具なども置かれた。大きな定紋の付いた唐皮からかわの箱には、娘の時代を思わせるような琴の爪つめ、それから可愛らしい小さな男おとこ女おんなの人形なども入れてあった。親戚や知人からはそれぞれ品物やら手紙やらで祝よこつて寄した。三吉が妻の友達にと紹介した二人の婦人からも来た。

「曾根さんは曾根さんらしい細い字で書いて来たネ」と三吉が言て笑った。

「真実ほんとに皆さんは御上手なんですネえ」とお雪も眺めた。

名倉の店に勤めている人で、お雪が義理ある兄の親戚にあたる勉あからも、お雪へ宛あてて祝の手紙が来た。これは又、若い商人らしい達者な筆で書いてあった。

こんな風にして、三吉夫婦の若い生涯まじは混まじり始めた。やがて裏の畠に播さいた莢豌豆さやえんどうも貝割葉かいわればを持上げ、馬鈴薯も芽を出す頃は、いくらかずつ新しい家の形を成して行なつた。

お雪は住居の近くに、二人の小母さんの助言者をも得た。一人は壁一重隔とまりてて隣家に住む細君で、この小母さんは病身の夫と多勢の子供とを控とえていた。小母さん達はかわるがわる来て、時の総菜が出来たと言つてはくれたり、世帯持の経験を話して聞かせたりするよ

うに成つた。

五

東京の学校が暑中休暇に成る頃には、お雪が妹のお福も三吉の家へやって来た。お福は、お雪の直ぐ下にあたる妹で、多勢の姉きょうだい妹を離れて、一人東京の学校の寄宿舎に入れられている。名倉の母の許を得て、一夏を姉の許に送ろうとして来たのである。

三吉が通っている学校は、私人の経営から町の事業に移りかけているような時で、夏休というものもお福の学校の半分しかなかった。お福の学校では二月の余も休んだ。裏の畠はたけの野菜も勢よく延びて、馬鈴薯じゃがいもの花なぞが盛んに白く咲く頃には、漸く三吉も暇のある身からだに成つた。

三吉は新あらたに妹が一人増ふえたことをめずらしく思った。読書の余暇には、彼も家のもの相手に成つて、この妹を款待もてなそうとした。お雪は写真の箱を持出した。

名倉の大きな家族の面影おもかげはこの箱の中に納められてあつた。風通しの好い南向の部屋で、お雪姉妹は集つて眺ながめた。養子して名倉の家を続ついだ一番年長うえの姉、※という店を持

つて分れて出た次の姉、こういう人達の写真も出て来る度たびに、お雪は妹と生家きとの噂うわさをした。お福の下にまだ妹が二人あつた。その写真も出て来た。姉達の子供を一緒に撮とつたのもあつた。この写真の中には、お雪が乳母と並んで撮つた極く幼い時から、娘時代に肥つた絶頂かと思われる頃まで、その時その時の変遷うつりかわりを見せるようなものがあつた。中には、東京の学校に居る頃、友達と二人洋傘こうもりを持つて写したもので、顔のところだけ掻かき撈むしつて取つたのもあつた。

三吉の方の写真も出て来た。お雪は妹に指して見せて、この帽子を横に冠つたのは三吉が東京へ出たばかりの時、その横に前垂を掛けているのが宗蔵、中央まんなかに腰掛けて帽子を冠っている少年が橋本の正太、これが達雄、これが実、後に襟えり巻まきをして立つたのが森彦などと話して聞かせた。

「どうです、この兄さんは可愛らしいでしょう」

と三吉もそこへ来て、自分がまだ少年の頃、郷里くから出て来た幼友達と浅草の公園で撮つたという古い写真を出して、お福に見せた。

「まあ、これが兄さん？」とお福は眺めて、「これは可愛らしいが、何だか其方そっちはコワイようねえ」

お雪も笑った。お福がコワイようだと言ったは、三吉の学校を卒業する頃の写真で、熟と物を視^みつめたような眼付に撮れていた。

お雪が持つて来た写真の中には、女の友達ばかりでなく、男の知^{しり}人^{びと}から貰ったのも有った。名だけ三吉も聞いたことの有る人のもあり、全く知らない青年の面影^{おもかげ}もあつた。

「勉強さんねえ」

とお福は名倉の店に勤めている人のを幾枚か取出して眺めた。

「福ちゃん」

とお雪は妹を呼んだ。返事が無かつた。お福はよく上り端^{はな}の壁の側や物置部屋の風通しの好いところを択^{えら}んで、独^{ひと}りで読^よ書^みするという風であつたが、何処^{どこ}にも姿が見えなかつた。

「福ちゃん」

と復^またお雪は呼んで探してみた。

南向の部屋の外は垣根に近い濡^{ぬれ}縁^{えん}で、そこから別に囲われた畠の方が見える。深い桑

の葉の蔭に成つて、妹の居る処は分らなかったが、返事だけは聞える。

お雪は入口の庭から裏の方へ廻つて、生い茂つた桑畠の間を通つて、莢豌豆さやえんどうの花の垂れたところへ出た。高い枯枝に纏まとひ着いた蔓つるからは、青々とした莢もが最早沢山に下つていた。

「福ちゃん、福ちゃんツて、探してるのに——そんなところに居たの」こうお雪が声を掛けた。

お福は畠の間から姉の方を見て、「今ね——一寸裏へ出て見たら、あんまり好く生なてるもんだから。すこし取つて行つて進あげようと思つて」

「そう……好く生つたことね」と言つてお雪も摘取りながら、「福ちゃん、此頃こないだ姉さんと約束したもの……あれを書いておくれナ。母親おつかさんの許ところへ手紙を出すんだから——」

「姉さん、そんなに急いがなくなつて可いいわ」

「だって、どうせ出す序ついでだもの」

「それもそうね」と言つてお福は姉の傍へ寄つた。

妹は自分で摘取つた莢を姉の前垂の中へあけて、やがて畠を出て行つた。お雪はそこに残つていた。

桑の葉を押分けて、復たお雪が入口の庭の方へ戻って行った頃は、未だ妹は引込んで書いていた。お雪は炉辺の食卓の上に豆の莢を置いて、一つずつその両端を摘切った。

お福は下書を持って静かな物置部屋の方から出て来た。

「姉さん、これで可^よくツて？」とお福は書いたものを姉に見せて言った。

「もうすこし丁寧にお書きな」とお雪が言った。

「だって、どう書いて好いか解らないんですもの」と妹は首を傾^{かし}げて、娘らしい微笑^{えみ}を見せた。

お福は姉の勧めに従って、勉と結婚することを堅く約束する、それを楽しみにして卒業の日を待つ、という意味を認^{したた}めて、お雪に渡した。お雪は名倉の母へ宛^あてた手紙の中へこの妹に書かせたものを同封して送ることにした。

名倉の母からは、お福が行って世話に成るといふ手紙と一緒に、菓子の入った小包が届いた。遠く離れた母の手紙を読むことは、お雪に取って何よりの楽しみであつた。お雪はその返事を書いたのである。序に妹のことをも書き加えたのである。

お雪の許へ宛てて勉からは度々^{たびたび}文通が有る。復たお雪は受取った。彼女は勉から来る手紙の置場所に困った。

ある日、三吉は勉からお雪へ宛てた手紙を他の郵便と一緒に受取った。

「勉さんからはよく手紙が来るネ」

こう三吉はお雪を呼んで言つて、何気なくその手紙を妻の手に渡した。

どういう事柄が書かれてあるにもせよ、それを聞こうともしなかった程、三吉は人の心を頼んでいた。こういう文通の意味を略^{ほほ}彼も想像しないではなかった。しかし、それに驚かされる年頃でもなかった。彼は、自分が種々なところを通り越して来たように、妻もまた種々なところを通り越して、そして嫁^{かたづ}いて来たものと思つていた。お雪も最早二十二に成る。こうして種々な手紙が新しい家まで舞込んで来るのは、別に三吉には不思議でもなかった。唯、妻が自己^{おのれ}の周囲^{まわり}を見過^{みあやま}らないで、従順^{すなお}に働いてくれさえすればそれで可い、こう思つた。彼には心を労しなれば成らないことが他に沢山有つた。

畠の野菜にもそれぞれ手入をすべき時節であつた。三吉は鋤^{くわ}を携えて、成長した葱^{ねぎ}などを見に行つた。百姓の言葉でいう「サク」は最早何度かくれた。見廻る度に延びている葱の根元へは更に深く土を掛けて、それから馬鈴薯の手入を始めた。土を掘つてみると、可^か

なり
成大きな可愛らしいやつが幾個となく出て来た。

「ホウ、ホウ」

と三吉は喜んで眺めた。

裏の流で取れただけの馬鈴薯を洗って、三吉は台所の方へ持って行って見せた。お雪もめずらしそうに眺めた。新薯は塩茹にして、食卓の上に置かれた。家のものはその周囲に集って、自分達の手で造ったものを楽しそうに食ったり、茶を飲んだりした。

その晩、三吉はお福や書生を奥の部屋へ呼んで、骨牌の相手に成った。黄ばんだ洋燈の光は女王だの兵卒だのの像を面白そうに映して見せた。お福はよく勝つ方で、兄や若い書生には負けずに争った。お雪も暫時仲間入をしたが、やがてすこし頭が痛いと言って、その席を離れた。

炉辺の洋燈は寂しように照していた。何となくお雪は身体が倦くもあった。毎月あるべき筈のものも無かった。尤も、さ程気に留めてはいなかったもので、炉辺で独り横に成ってみた。

奥の部屋では楽しい笑声が起った。一勝負済んだと見えた。復た骨牌が始まった。頭の軽い痛みも忘れた頃、お雪は食卓の上に巻紙を展げた。彼女は勉への返事を書いた。つい

家のことに追われて、いそがしく日を送っている……この頃の御無沙汰も心よりする訳では無いと書いた。妹との結婚を承諾してくれて、自分も嬉しく思うと書いた。恋しき勉強へ……絶望の雪子より、と書いた。

この返事をお雪は翌日^{あくるひ}まで出さずに置いた。折を見て、封筒の宛名だけ認めて、肩に先方^{さき}から指してよこした町名番地を書いた。表面^{おもて}だつて交換^{とりか}わす手紙では無かつたからで。お雪は封筒の裏に自分の名も書かずに置いた。筆筒^{たんす}の上にそれを置いたまま、妹を連れて、鉄道の踏切からずつとまだ向の崖^{がけ}下^{した}にある温泉^{はいつり}へ入浴^{はいつり}に行つた。

ふと、この裏の白い手紙が三吉の目に着いた。不思議に思つて、開けてみた。一度読んだ。氣を沈^{おち}着^つけて繰返^{くりか}してみた。彼は自分で抑えることもどうすることも出来ない力のままに動いた。知らないでいる間は格別、一度こういう物が眼に触れた以上は、事の真相を突留^{とど}めずにいられなかつたのである。つと筆筒の引出を開けてみた。針箱^{すみ}も探してみた。櫛^{くし}箱^{ばこ}の髻^{かもし}まで搔^{かき}廻^{まわ}してみた。台所の方へも行つてみた。暗い入口^{すみ}の隅^{すみ}には、空いた炭俵^{かみくず}の中へ紙屑^{かみくず}を溜^ためるようにしてあつた。三吉は裏口の柿の樹の下へその炭俵^{かみくず}をあけた。

隣の人に見られはせぬか、女おんなれん連もつは最早もつ歸りはせぬか、と周囲あたりを見廻したり、震えたりした。

勉が手紙の片きれはその中から出て来た。その時、三吉はこの人の熱い情を読んだ。若々しい、心の好きそうな、そして気の利いたき勉の人となりまでも略想像ほぼされた。温泉に行つた人達の歸りは近づいたらしく思われた。読んだ手紙は元の通りにして、妻が歸つて来て見ても、ちゃんと筆筒の上あに在るようにして置いた。

お雪とお福の二人は洋傘こうもりを持つて入つて来た。お雪は温泉場の前に展ひらけた林檎りんご畠、青々と続いた田、谷の向に見える村落、それから山々の眺望の好かつたことなどを、妹と語り合つて、復た洗濯物を取込むやら、夕飯の仕度に掛るやらした。

やがて家のものは食卓の周囲まわりに集つた。お雪は三吉と相さしむかい対たいに坐つて、楽しそうに笑いながら食つた。彼女の眼は柔順と満足とで輝いていた。時々三吉は妻の顔を眺めたが、すこしも變つた様子は無かつた。三吉は平素いつものように食えなかつた。

一夜眠らずに三吉は考えた。翌日あくるひに成つてみると、お雪や勉が交とりかわ換した言葉で眼に

触れただけのものは暗記^{そらん}じて了った程、彼の心は傷み易く成っていた。家を出て、夕方にボンヤリ帰って来た。

夫の好きな新しい野菜を料理して、帰りを待つていたお雪は、家のものを蒐^{あつ}めて夕飯にしようとした。土地で「雪割^{ゆきわれ}」と称^{とな}えるは、莢^{さや}豌豆^{えんどう}のことで、その実の入った豆を豚の脂^{あぶら}でいためて、それにお雪は塩を添えたものを別に夫の皿へつけた。彼女は夫の喜ぶ顔を見たいと思つた。

「頂戴^{ちやうだい}」

とお福や書生は食い始めた。三吉は悪い顔色をして、折角お雪が用意したものを味おうとしなかつた。

「今日は碌^{ろく}に召上らないじや有りませんか……」

と言つて、お雪は萎^{しお}れた。

その晩、三吉は遅くまで机に對つて、書籍^{ほん}を開けて見たが、彼が探そうと思うようなものは見当らなかつた。復た夜通し考え続けた。名倉の母へ手紙でも書こうか、お雪の親しい友達に相談しようか、と思ひ迷つた。

錯乱した頭脳^{あたま}は二晩ばかり眠らなかつた為に、余計に疲れた。彼はお雪と勉の愛を心に

あわれにも思つた。ブラリと家を出て、復た日の暮れる頃まで彷徨^{うろつ}いた三吉は、離縁という思想^{かんがえ}を持つて歸つて来た。もし出来ることなら、自分が改めて媒^{ばい}妁^{しやく}の勞を執つて、二人を添わせるように尽力しよう、こんなことまで考えて来た。

家出——漂泊——死——過去つたことは三吉の胸の中を往^いつたり来たりした。「自分は未だ若い——この世の中には自分の知らないことが沢山ある」この思想^{かんがえ}から、一度破つて出た旧^{ふる}い家へ死すべき生命^{いのち}も捨てずに戻つて来た。その時から彼はこの世の艱難^{かんなん}を進んで嘗^なめようとした。艱難は直に来了。兄の入獄、家の破産、姉の病氣、母の死……彼は知らなくても可いようなことばかり知つた。一縷^{いちる}の望は新しい家にあつた。そこで自分は自分だけの生涯を開こうと思つた。東京を發^たつ時、稲垣が世帯持の話をして、「面白いのは百日ばかりの間ですよ」と言つて聞かせたが、丁度その百日に成るか成らないかの頃、最早自分の家を壊そうとは三吉も思いがけなかつた。

倒^{のたれ}死^じするとも帰るなと堅く言つてよこしたという名倉の父の家へ、果してお雪が歸り得るであらうか。それすら疑問であつた。お雪は既に入籍したものである。法律上の解^{おぼつか}釈は自分等の離縁を認めるであらうか。それも覺^{おぼつか}束^{つか}なかつた。三吉はある町に住む弁護士^{ちえ}の智慧を借りようかとまで迷つた。蚊屋^{かや}の内へ入つて考えた。夏の夜は短かつた。

三吉は家を出た。彼の足は往時^{むかし}自分の先生であつたという学校の校長の住居^{すまい}の方へ向いた。古い屋敷風の門を入つて、裏口へ廻つてみると、向の燕^{からすみぎ}麦を植えた岡の上に立つてしきりと指図^{さしず}をしている人がある。その人が校長だ。先生は三吉を見つけて、岡を下りて来た。先生の家では学校の小使を使つて可成^{かなり}大きな百姓ほど野菜を作っていた。

師はやがて昔の弟子^{でし}を花畠に近い静かな書齋の方へ導いた。最早入歯をする程の年ではあつたが、氣象の壯^{さか}んなことは壯年^{わかもの}にも劣らなかつた。長い立派な髯^{ひげ}は余程白く成りかけていた。この阿爺^{おと}さんとも言いたいような、親しげな人の顔を眺めて、三吉は意見を聞いてみようとした。他に相談^{ひと}すべき事柄では無いとも思ったが、この先生だけでは簡単に話して、どう自分の離縁^つに就て考えるかを尋ねた。先生は三吉の為に媒妁^との勞を執つてくれた大島先生のそのまた先生でもある。

雅致のある書齋の壁には、先生が若い時の肖像と、一番最初の細君の肖像とが、額にして並べて掛けてあつた。

「そんなことは駄目です」と先生は昔の弟子の話を聴取^{ききと}つた後で言つた。「我輩のことを

考えてみ給え——我輩などは、君、三度も家内を貰った……最初の結婚……そういう若い時の記憶は、最早二度とは得られないね。どうしても一番最初に貰った家内が一番良いような気がするね。それを失うほど人間として不幸なことは無い。これはまあ極く正直な御話なんです……」

三吉は黙つて先生の話を聞いていた。先生は往時戦争にまで出たことのある大きな手で、いろいろ種々な手真似てまねをして、

「君なぞも、もつと年をとつてみ給え、必きつと我輩の言うことと思ひ当ることが有るから……我輩はソクラテスで感心してることが有る。ソクラテスの細君と言へば、君、有名な箸はしにも棒にも掛らないような女だ……それをジツと辛抱した……一生辛抱した……ナカナカあの真似はできないね……あそこが我輩はあの哲学者の高いところじゃないかと思うね」

先生の話は宗教家のような口調を帯びて来た。そして、種々なところへ飛んで、自分の述懐に成つたり、亜米利加時代アメリカの楽しい追想に成つたりする。

「亜米利加の婦人などは、そこへ行くと上手なものだ。以前に相愛の人でも、自分の夫に紹介して、奇麗に交際して行く——「He is my lover」なんて……それは君、サツパリしたもののサ。日本の女もああいかなけりや面白くないね」

訪ねて来た客があつたので、先生は他の話に移った。

「まあ、小泉さん、よく考えてご覧なさい」という言葉を聞いて、三吉は旧師の門を出た。
 一歩家の方へ踏出してみると復た堪え難い心に復たかえつた。三吉は自分の家の草屋根を見る
 のも苦しいような気がした。

家にはお雪が待つていた。何処どこまでも夫を頼みにして、機嫌きげんを損そこねまいとしているよう
 な、若い妻の笑顔は、余計に三吉の心を苦めた。

燈火あかりの点く頃まで、三吉は自分の部屋に倒れていた。

「オイ、手拭てぬぐいを絞しぼつて持つて来てくれ」

こう夫から言付けられて、お雪は一度流ながしもと許もとへ行つて、戻つて来た。あおのけに畳の
 上に倒れている夫の胸は浪打なみうつように見えた。

「まあ、どうなすつたんですか」

と言つて、お雪は夫の胸の上へ冷い手拭あてがを宛行あてがつた。

翌晩、三吉は机むかに對つて紙を展ひろげた。遅くまで書いた。書生は部屋の洋燈ランプを消し、お福

も寢床へ入りに行つたが、未だ三吉は書いていた。

「お雪、すこしお前に読んで聞かせるものが有る……俺が済むまで、お前も起きておいで」

こう妻を呼んで言つた。お雪は炉辺で独り解き物をしていた。小さな夏の虫は何処から来るともなく洋燈ランブの周囲まわりに集つた。

お雪が鳴らしていた鋏はさみを休めた頃は、十二時近かつた。お福や書生は最早前後も知らずに熟睡している頃であつた。

「何ですか」

とお雪は不思議そうに夫の机の傍へ來た。

「こういうものを書いた、この手紙はお前にもよく聞いて貰わんけりや成らん」

と言つて、三吉は洋燈を机の真中に置直した。彼は平氣を装おうとしたが、その実周章あわてて了つたという眼付をしていた。声も度を失つて、読み始めるから震えた。とはいえ、彼はなるべく静かに、解り易くやす読もうとした。

お雪は耳をそばだ敲たたてた。

「甚だ唐突ながら一筆申上候……かねてより御噂うわさ、蔭乍ながら承り居り候。さて、未だ御目にかからずとは申しながら腹藏なく思うところを書き記し候。此手紙この、決して悪あしき心を

持ちて申上ぐるには候わず。何卒々々心静かに御覧下されたく候……」

お雪は鋭く夫の顔を眺めて、復た耳を澄ました。

「実は、君より妻へ宛てたる御書面、また妻より君へ宛てたる手紙、不図したることより生の目に触れ、一方には君の御境遇をも審にし、一方には……妻の心情をも酌取りし次第に候……」

お雪は耳の根元までも紅く成つた。まだ世帯慣れない手で顔を掩うようにして、机に倚りながら聞いた。

「斯く申す生こそは幾多の辛酸にも遭遇しいささか人の情を知り申し候……されば世にありふれたる卑しき行のよう一概に君の涙を退くるものとのみ思召さば、そは未だ生を知らざるにて候……否……否……」

どうかすると三吉の声は沈み震えて、お雪によく聞取れないことがあった。

「斯く君の悲哀を汲み、お雪の心情をも察するに、添い遂げらるる縁とも思われねば、一旦は結びたる夫婦の契を解き、今迄を悲しき夢とあきらめ、せめては是世に君とお雪と及ばず乍ら自身媒妁の労を執つて、改めて君に娶せんものと決心致し、昨夜、一昨夜、殆ど眠らずして其方法を考え申候……ここに一つの困難というは、君も知り給う名倉の父

の氣質に候。彼^{かれ}是^{これ}を考うれば、生が苦心は水の泡^{あわ}にして、反^{かえ}つて君の名を辱^{はづかし}むる不幸の決果を来さんかとも危まれ候……」

暫時^{しばらく}、部屋の内は寂^{しん}として、声が無かつた。

「ああ君と、お雪と、生と——三人の關係を決して輕きこととも思われず候。世間幾多の青年の中には、君と同じ境遇に苦む人も多からん。新しき家庭を作りて始めて結婚の生涯を履^ふむものの中には、あるいは又生と同じ疑問に迷うものもあらん。斯^かることを書き連ね、身の恥を忘れ、愚かしき悲嘆^{なげき}を包むの暇^{いとま}もなきは、ひとえに君とお雪とを救わんと願^{ねが}ひ外ならず候。あわれむべきはお雪に候。君もし真にお雪を思うの厚^{なげ}き情もあらば、願^{ねが}わくは友として生に交らんことを許し給え……三人の新しき交際——これぞ生が君に書き送る願^{ねが}なれば。今後吾家庭の友として、喜んで君を迎えんと思ひ立ち候。思うに君は春秋に富まるるの身、生とても同じ。一旦の悲哀よりして互に終生を棄つるなく、他日手を執りて今日を追想し、胸^{きょう}襟^{きん}を披^{ひら}いて相語るの折もあらば、これに過ぎたる幸はあらじと存じ候……」

この勉へ宛てた手紙を読んで了つた時、三吉は何か事業^{しごと}でも済ましたように、深い溜^{ため}息^{いき}を吐^ついた。お雪は畳の上に突伏^{つつぶ}したまま、やや暫時^{しばらく}の間は頭を揚げ得なかつた。

「オイ、そんなことをしていたって仕様が無い。この手紙は皆なの寝てるうちに出してさおう」

と三吉は慰撫^{なだ}めるように言つて、そこに泣倒れたお雪を助け起した。郵便函^{ポスト}は共同の掘井戸近くに在つた。三吉は妻を連れて、その手紙を出しながら一緒にそこいらを歩いて来ようと思つた。

お福や書生の眼を覚ませまいとして、夫婦は盗むように家の内を歩いた。表の戸を開けてみると、屋外^{そと}は昼間のように明るかつた。燐^{りん}のような月の光は敷居の直ぐ側まで射して来ていた。

裏の流は隣の竹藪^{たけやぶ}のところで一度石の間を落ちて、三吉の家の方へ来て復た落ちていく。水草を越して流れるほど勢の増した小川の岸に腰^{かが}を曲めて、三吉は寝惚^{ねぼ}けた顔を洗つた。そして、十一時頃に朝飯と昼飯とを一緒に済ました。彼は可恐^{おそろ}しい夢から覚めたように、家の内を眺め廻した。

口では思うように言えないからと言つて、お雪が手紙風に書いた物を夫の許へ持つて来

た頃は、書生も水泳およぎに行つて居なかつた。お雪が三吉に見てくれというのは、種々止むを得ない事情から心配を掛けて済まなかつた、自分は最早どうでも可いというようなそんな量見で嫁いて来たものでは無い、自分は自分相応の希望もを有つて親の家を離れて来た、という意味が認めてある。猶なお、勉へ宛てて最後の断りの手紙を書いたから、それだけは許してくれ、としてある。

「なにも、俺は断れと言つてあんな手紙を書いたんじゃない。お前なんかそう取るからダメだ」と三吉は言つてみた。「福ちゃんの旦那さんに成ろうという人じゃないか……行く行くは吾われわれ儕われの弟じやないか……」

お雪は答えなかつた。

冷すずしい風の来るところを択んで、お福は昼寝の夢を食むさつていた。南向の部屋の柱よりに倚か凭かりながら、三吉はお雪から身みの上うえの話うえを聴取ろうと思つた。夫婦は不思議な顔を合せた——今まで合せたことのない顔を合せた——結婚する前には、互に遠くの方でばかり眺めていたような顔を……

「勉強さんとお前とはどういう關係に成つていたのかネ」三吉は何気なく言出した。

「どういふとは？」とお雪はすこし顔を紅めて。

「家の方でサ。そういうことはズンズン話して聞かせる方が可い」

その時、三吉は妻の口から、勉と彼女とは親が認めた間柄であること、夫婦約束を結ばせたではないが親達の間だけにそういう話のあったこと、店の番頭に邪魔するものが有つて、あること無いこと言い触らして、その為に勉の方の話は破れたことなどを聞いた。

済んだことは済んだこと、こう妻は言い消して了おうとした。夫はそれでは済まされなかった。

寂しい心が三吉の胸の中に起つて来た。その心は、女をいたわるといふことにかけて、自分もまた他の男に劣るものではないといふことを示させようとした。その日、三吉は種々と細君の機嫌きげんを取つた。機嫌を取りながら、悶もだえた。

間もなく勉から返事が来た。一通は三吉へ宛て、一通はお雪へ宛ててあつた。お雪へ宛てては、「自分の為に君にまで迷惑を掛けて気の毒なことをした、君に咎とがむべきことは一つも無い、何卒どうか自分にかわつて君から詫わひをしてくれよ」という意味が書いてある。お雪はその手紙を読んで泣いた。

月を越えて、三吉の家では一人の珍客を迎えた。三吉は停車場まで行つて、背の高い、胡麻塩ごましおひげの鬚みなりの生えた、質素な服装をした老人を旅客の群の中に見つけた。この老人が名倉の父であつた。

「まあ、阿父さん……」

とお雪も門に出て迎えた。

名倉の父は、二人の姉娘に養子して、今では最早余生を楽しく送る隠居である。強い烈はげしい気象、實際的な性質、正直な心——そういうものはこの老人の鋼鉄のような額に刻み付けてあつた。一代の中に幾棟いくむねかの家を建て、大きな建築を起したという人だけあつて、ありあまる精力は老いた体軀からだを静止じつとさして置かなかつた。愛する娘のお雪が、どういう壮わ年かものと一緒に、どういう家を持つたか、それを見ようとして、遙々はるばる遠いところを出掛け来たのであつた。

「先ずこれで安心しました」

と老人はホツと息を吐くように言つた。

南向の部屋の柱には、新しい時計が懸つた。そして音がし出した。若夫婦へ贈る為に、わざわざ老人が東京から買つて提さげて来たのである。これは母から、これは名倉の姉から、

これは※の姉から、と種々な土産物みやげものがそこへ取出された。

煤すすけた田舎風の屋の内うちなかを見て廻った後、老人は奥の庭の見える座敷に粗末な膳ぜんを控えた。

お雪やお福のいそいそと立働くさまを眺めたり、水車の音を聞いたりしながら、手酌でちびちびりやつた。

「何卒どうぞもうすこしも関かまわずに置いて下さい。私はこの方が勝手なんで御座いますから」

と老人が言つた。何がなくともお雪の手製てづくりのもので、この酒に酔うことを楽しみにして来たことなどを話した。

三吉は炉辺へお雪を呼んで、

「何かもうすこし阿爺おぢさんに御馳走ごちそうする物はないかい」

「あれで沢山です」とお雪が言う。

「こんな田舎じや何物なんにも進あげるようなものが無い。罐詰かんづめでも買いにやろうか」

「宜よう御座んすよ。それに、阿爺さんは後から何か持つて行つたつて、頂きやしません」

幼少の時父に別れた三吉は、こういう老人が訪ねて来たことを珍しく嬉しく思つた。父というものは彼がよく知らないようなもので有つた。三吉が何時いつまでも亡くなつた忠寛を畏おそれているように、お雪やお福は又、この老人を畏れた。

名倉の父は二週間ばかり逗留して、東京の学校の方へ帰るお福を送りながら、一緒に三吉の家を發つて行つた。この老人は橋本の姉や小泉の兄の方に無いようなものを後へ残して行つた。そして、亡くなった忠寛が手本を残しておいた家の外に、全く別の技師が全く別の意匠で作つた家もある、ということ三吉に思わせた。「こんな書籍を並べて置いたつて、売ると成れば紙屑の値段だ」——こう言うほど商人気質の父ではあつたが、しかし三吉はこの老人の豪健な氣象を認めずにはいられたかつた。

翌年の五月には、三吉夫婦はお房という女の兄の親であつた。書生は最早居なかつた。手の無い家のことで、お雪は七夜の翌日から起きて、子供の襁褓を洗つた。その年の初夏ほど、三吉も寂しい旅情を経験したことは無かつた。奥の庭には古い林檎の樹があつて、軒に近い枝からは可憐の花が垂下つた。蜜蜂も来て楽しい羽の音をさせた。すべての物の象は、始めて家を持つた当時の光景に復つて来た。

「俺の家は旅舎だ——お前は旅舎の内儀さんだ」

「では、貴方は何ですか」

「俺か。俺はお前に食物くいものをこしらえて貰ったり、着物を洗濯して貰ったりする旅の客サ」

「そんなことを言われると心細い」

「しかし、こうして三度々々御飯を頂いてるかと思うと、難有ありがたいような気もするネ」

こんな言葉を夫婦は交換とりかわした。

ヒヨイヒヨイヒヨイヒヨイと夕方から鳴出す蛙の声は余計に旅情をそそるように聞える。それを聞くと、三吉は堪え難いような目付をして、家の内を歩き廻った。

新婚の当時のことは未だ三吉の眼にあった。東京を発って自分の家の方へ向おうとする旅の途中——岡——躑躅つづし——日の光の色——何もかも、これから新しい生涯に入ろうとするその希望で輝かないものは無かった。洋燈ランブの影で書籍ほんを読みながら聞いた未だ娘のような妻の呼吸——それも三吉の耳にあった。彼は女というものを知りたいと思うことが深かったかわりに、失望することも大きかったのである。

どうかすると、三吉は往時むかしの漂泊時代の心に突然帰ることが有った。お雪が勝手をする間、子供を預けられて、それを抱きながら家の内を歩いている時、急に子も置き、妻も置いて、自分の家を出て了おうかしらん、こんな風に胸を突いて湧き上わって来ることも有った。

「好い児だ——好い児だ——ねんねしな——」

眠たい子守歌をお房に歌ってやりながら三吉は自分の声に耳を澄ました。お雪はよく働いた。

裏の畠には、前の年に試みた野菜の外に茄子^{なす}、黄^き瓜^{うり}などを作り、垣根には南^か瓜^ぼの蔓^{つる}を這^はわせた。ある夕方、三吉が竹^{たけ}箒^{ぼうき}を持って、家の門口を掃除したり、草むしりをしたりにしていると、そこへ来て風呂敷包を背負った旅姿の人が立った。

橋本の大番頭、嘉助が行商の序^{ついで}に訪ねて来たのであった。毎年の例で、遠く越後路から廻^{まわ}つて来たという。この番頭の日に焼けた額や、薬を入れた籠^{つづら}の荷物^{あが}を上^{はな}り端^{はな}のところへ卸した様子は、いかに旅の苦痛に耐えて、それに又慣らされているかということをおぼせさせる。嘉助は草鞋^{わらじ}の紐^{ひも}を解いて上った。

「是方^{こちら}でも子供衆が出来さつせえて、御新造さんも手が有らつせまいで、寄るだけは寄れ、御厄介には成るな——こう姉^{あねさま}様から言付かつて来ました」と嘉助が言った。

「まあ、そんなことを言わなくても可い。是非泊つて行つて下さい、姉さんの家の話も種^い

ろいろ
々伺いたい」

と三吉は引留めて、一年に一度ずつ宿をすることに定めていたと言った。お雪も勝手の方から飛んで来た。

嘉助は橋本の家を出て最早足掛二月に成るという。この長い行商の旅は、ずっと以前から仕来ったことで、橋本の薬といえば三吉が住む町のあたりまで弘まっていた。燈火の点く頃から、お雪も嘉助の話を聞こうとして、子供を抱きながら夫の傍へ来た。

「女のお児さんかなし。子供衆の持薬には極く好いで、すこし置いていかず」

こう嘉助が言つて、土産がわりに橋本の薬を取出した。

「貴方のところでもお嫁さんがいらしたそうで……」とお雪は正太の細君のことを言つた。「豊世さんでしたね」と三吉も引取て、「吾家へも手紙を貰いましたが、なかなか達者に好く書いてありましたッけ」

「ええ、まあ、御蔭様で好いお嫁さんを見つけました。あれ位のお嫁さんは探したつてそ
う沢山無い積りだ。大旦那始め皆な大悦びよなし……」

と言つて、嘉助は禿頭を撫でた。正太が結婚について、いかに壮んな式を挙げたかということとは、この番頭の話で略想像された。

「嘉助さんが褒める位だから、余程好いお嫁さんに相違ないぜ」

「正太さんも御仕合ですこと」

こんな言葉を、三吉夫婦は番頭の聞いていないところで交換した。

翌朝早く嘉助は別離を告げて発った。その朝露を踏んで出て行く甲斐々々しい後姿は、余計に寂しい思を三吉の胸に残した。

三吉は東京の方の空を眺めて、種々な友達から来る音信を待ち侘びる人と成った。学校がひける、門を出る、家へ帰ると先ず郵便のことを尋ねる。毎日顔を突合せている同僚の教師の外には、語るべき友も無かった。

お雪の友達にもと思つて三吉が紹介した一人の婦人からは、結婚の報知が来た。三吉は又曾根からも山の上へ避暑に行こうと思うという手紙を受取った。

六

ステーション
停車場の方で汽車の音がする。

山の上の空気を通して、その音は南向の障子に響いて来た。それは隅田川を往復する

川蒸汽の音に彷彿^{そつくり}で、どうかするとあの川岸に近い都会の空で聞くような気を起させる。よく聞けばやはり山の上の汽車だ。三吉はそれを家のものに言つて、丁度離れた島に住む人が港へ入る船の報知^{しらせ}でも聞くように、濡縁^{ぬれえん}の外まで出て耳を立てた。新聞にせよ、手紙にせよ、新しい書籍^{ほん}の入った小包にせよ、何か一緒に置いて行くものはその音より外に無かつた。三吉は曾根から来た手紙のことを胸に浮べた。最早^{もう}山の上に来てゐるかしらんとも思つた。

曾根が一夏を送りたいと言つて寄^{よこ}したは、三吉夫婦が住む町とは五里ばかり離れたところにある避暑地である。同じ山つづきの高原の上で、夏は人の集る場所である。

東京へ行つた学生達はポツポツ帰省する頃のことであつた。三吉の家へは、復^またお福がやつて来ていた。

丁度三吉も半日しか学校のない日で、外出する用意をして、炉^{ひる}辺で昼飯をやつた。

「何処^{どこ}へ？」とお雪は給仕しながら尋ねてみた。

「曾根さんが来てるか行つて見て来ようと思う」こう三吉は答えた。

「最早いらしたんでしょうか」とお雪は夫の顔を眺める。

「居るか居ないか解らんがね、まあ遊びがてら行つて見て来る」

三吉が曾根を妻に紹介して、二人の女の間を結び付けようとしたのは、家庭の友として恥かしからぬ人と思つたからで。曾根は音楽に一生を托たくしているような婦人で、三吉が向いて行こうとする方面にも深く興味を有もつていた。言わば、三吉には、自分を知ってくれる人の一人と思われた。この思想かんがえが彼を喜ばせた。

しかし、お雪はあまり喜ばないという風であつた。三吉が曾根のことを言つて、彼女の身内が悲惨な最期を遂げた時に、それを独ひとりで仕末したという話をして、「どうして、お前なかなかシツカリモノだぜ」などと言つて聞かせると、「その話を聞くのはこれで三度目です」とか何とかお雪の方では笑つて、「最早も沢山」という眼付をする。お雪は曾根を知ろうともしなかつた。どうしてこう女同志は友達に成れないものかしらん、と三吉は嘆息することもある。

三吉は妻の狭い考えを笑つた。そして、男とか女とかということを離れて、もつと種々な人を知りたいと思つた。

「何卒どうぞ、御逢あいでしたら宜敷よろしく」

こういう妻の言葉を聞捨てて、三吉は出て行つた。暑い日であつた。

曾根の宿を探しあぐんで、到頭三吉は分らず仕舞に自分の家の方へ引返した。ギラギラするような日光を通して見た避暑地の光景は、三吉の心を沈着かせなかつた。彼は種々な物の象を眼に浮べながら歸つて来た——ところどころに新築された別荘、赤く塗った窓、蕃牡丹畠……それから古い駅路の両側にある並木、その蔭を往来する避暑客、金色な髪の子供を連れて歩く乳母……

三吉は又、はじめて曾根を知つた当時のことを想いながら歸つて来る人であつた。多勢若い男や女の居る部屋で、ふと曾根は三吉の傍へ来て、亡くなつた友達のことを尋ねた。机の上には、短い曲の譜があつた。「神の意のままに」という題で、男女の別離を歌つたものだつた。メンデルソンの曲だ。その一節を、曾根は極く小さい震えるような声で歌つて聞かせた。音楽者の癖で、曾根が手の指は無心に洋琴の鍵盤に触れるように動いた。これはそう古いことでも無かつた。急に、三吉はこの人と親しみを増すように成つた。十年一日のような男同士の交際とは違つて、何故かこう友情を急がせるようなところもあつた。

垣根に這わせた南瓜は最早盛んに咲く頃であつた。その大きな黄色い花に添うて、三

吉は往来の方から入って来た。家には珍しい客が待っていた。

「直樹さん——」思わず三吉は微笑^{ほほえ}んで言った。

「兄さんのお留守へやって参りました」と直樹も出て迎えた。

この中学生は、三吉と一緒に木曾路^{きそじ}を旅した頃から比べると、見違えるほど成人していた。丁寧な口の利き^きようからして、いかにも都会に育った青年らしい。丁度この直樹位の年頃の生徒を毎日学校で相手にしている三吉には、余計にその相違が眼についた。直樹は父の許を得て、暑中休暇を三吉の家で送ろうとして来たのである。

日頃親身の弟のように思う人がこうして一緒に成ったということは、三吉を喜ばせたばかりでは無かった。「姉さん、姉さん」と呼ばれるお雪も心から喜んで、この青年を迎えた。退屈でいるお福も好い話相手を得た。遽^{にわ}かに三吉の家では賑^{にぎや}かに成った。

翌日から、直樹は殆^{ほと}んど家の人であった。子供を可愛がることも、この青年の天性に近かった。お福は、娘でありながら、直樹のように子供を好かなかった。

「房^ふちゃん、房^ふちゃん」と言つて、子供を背中に乗せて、家の内を歩く直樹の様子^{なまが}を眺めると、三吉は昔時^{むかし}自分が直樹の家に書生した時代のことを思出さずにいられたかった。

「僕も、ああして、よく直樹さんを背負って歩いたものだ」

と三吉は妻に話した。直樹は生れ落ちるから、三吉の手に抱かれた人である。

「曾根さんが先刻訪ねていらつしやいましたよ」とお雪は入口の庭のところで張物をしながら言った。

屋外から入つて来た三吉は、妻の顔を眺めた。何時山の上へ着いたとも、何処へ宿を取つたとも、判然知らせて寄さないような曾根が、こうして自分等の家へ訪ねて来たということは、酷く三吉を驚かした。

「あの」とお雪は張物する手を留めて、「そこいらまで見物に被入した序に御寄んなすつたんですツて」

「お前も又、待たして置けば好いのに——折角来たものを」

「だつて御上りなさらないんですもの。お連の方がお有んなさるからツて」

「へえ、誰か一緒に来たのかい」

「女の方が二人ばかり、流の処に蹲踞んでいらつしやいました」

「姉さん」とお福は上り框のところ腰掛けながら、「あの連の方は必と耶蘇ですよ」

「どうして耶蘇ということが分るの」とお雪は妹の方を見た。

「衣服きものの風や束髪で分りますわ」とお福が言った。

「復た寄るとは言わなかつたかい」と三吉は妻に尋ねた。

「ええ、被入いぢらつしやりたいような様子でしたよ」とお雪は妙に力を入れて、「なんでも、

停車場前の茶屋に寄つていらつしやるんですツて」

「行つて見て来るかな」

こう三吉は言捨てて、停車場の方を指して急いだ。

茶屋には、曾根が二人の連と一緒に休んでいた。連の一人は曾根の身内にあたる婦人で、艶つやの無い束髪や窠やつやつ々しいほど質素な服装などが早く夫に別れたらしい不幸な生涯を語っていた。今一人は肥え太った、口数のすくない女学生であつた。いずれもすこし歩き疲れたという風で、時刻過ぎてからお腹なかをこしらえようとしていた。三吉は休茶屋にあるものを取寄せて、この人達をもてなした。

「何卒どうぞおかまい下さいますな。私共は持つて参りました……」

と言つて、年長としうえの婦人は寂しそうに笑つた。山歩きでもするように、宿から用意して来た握飯むすびがそこへ取出された。肥つた女学生は黙つて食つた。

やがて、三吉はこの人達を城跡の方へ案内した。桑畠の間を通って、鉄道の踏切を越すと、そこに大きな額の掛った門がある。四人は熱い日の映あつた赤土の崖がけに添うて、坂道を上った。高い松だの、アカシヤだのの蔭を落している石垣の側へ出た。

どうかすると、連の二人はズンズン先へ歩いて行つて了しまつた。曾根は深張こうもりの洋傘に日を避けながら、三吉と一緒に連の後を追つた。

大きな石を積み上げた古い城跡には、可憐な薔薇ばらの花などが咲乱れていた。荒廃した石段を上つて、天主台のところへ出ると、長い傾斜の眺望が四人の眼め前に展ひらけた。

三吉はその傾斜の裾すその方を指して見せて、林に続く村落の向にはある風景画家の住居もあることなどを語り聞かせた。曾根は眼を細くして、

「私もこうして人の知らない処へでも来ていたらばと思います」

と眺め入りながら沈しおみ萎れた。

松林の間を通して、深い谷の一部も下瞰みおろされる。そこから、谷底を流れる千曲川ちくまがわも見える。

夕立を帯びた雲の群は山の方角を指して松林の上を急いだ。遽然にわかにザアと降つて来た。

三吉は天主台近くにある茶屋の二階へ客を案内した。広い座敷へ上つて、そこで茶だの菓く物だのを取り寄せながら、一緒に降つて来る雨を眺めた。廊下の欄てすりから手の届くほど近いところには、合ね飲木や藤が暗く掩おほい冠かぶさつていた。雫しずくは葉を伝つて流れた。

冷々とした空気は三吉が心の内部なかまでも侵入はいつて来た。どうかすると彼は、家の方を

思出したような眼付をしながら、夏梨をむく曾根の手を眺めていた、曾根が連の寡婦やもめは宗教の伝道に従事していることなどを三吉に語った。こういう薄命な、とはいえ独りで立つて行こうとするほど意志の堅い婦人は、まだ外にも、曾根の周囲まわりにあつた。曾根は女の力で支えられたような家族の中に居て、又、女の力で支えられたような芸術たすさわに携つていた。

時とすると、彼女の言うことは、岩の間を曲り折くねつて出て来る水のように冷たかつた。

間もなく夏の雨は通り過ぎた。三吉は客と一緒にこの眺望の好い二階を下りた。四人は高い石垣について、元来た城跡の道を歩いて行つた。

雨がかかると鶯うぐいすの象が踊あちあちれるように言い伝えられた大きな石の傍へ来掛る頃は、復た連の二人がサツサと歩き出した。二人の後姿は突出た石垣の蔭に成つた。

曾根は草木の勢に堪たえ難いような眼付をして、

「山の上へ参りましたら病氣も癒^{なお}るだろう、海よりは山の方が好い——なんて懇意な医者に言われるもんですから、人様も憐^{あわれ}んで連れて来て下すつたんですけれど……やっぱ駄目です……」

独身でいる曾根の懊^{なやみ}悩は、何とも名のつけようの無いもので有った。彼女は医者と言葉をすら頼めないという語気で話した。

「尤^{もつと}も、僅か一週間ばかりの故^{せい}だとは言いますけれど……」と復た曾根は愁^{うれ}わしげに言つた。

「貴方^{あなた}のはどういう病氣なんですか」と三吉は尋ねて、歩きながら巻煙草^{まきたばこ}に火を点^つけた。「^{わたくし}我的持病です」と曾根は答えた。

暫時^{しばらく}二人は黙つて歩いた。目映^{まぶ}しい日の光は城跡の草の上に落ちていた。

「あんまり考え過ぎるんでしょう」

と三吉は嘲^{あざけ}るように笑つて、やがて連の人達に追付いた。

城門を出たところで、曾根は二人の婦人と一緒に世話に成つた札を述べた。鉄道草の生^おい茂つた踏切のところを越して、岡の蔭へ出ると、砂まじりの道がある。そこで曾根は三吉に別れて、疲れた足を停車場の方へ運んだ。

「曾根さんも相変らずの調子だナア」

こう三吉は口の中で言ってみて、家を指して帰って行つた。

お雪は屋外に出して置いた張物板を取込んでいた。そこへ夫が帰つて来た。曾根のことは二人の話に上つた。

「真実に、曾根さんはお若いんですね……」とお雪は乾いた張物を集めながら言つた。

「女の年齢というものは分らんものサ」と三吉も入口の庭に立つて、「俺は二十五六だろ
うと思うんだ」

「まさか。あんなにお若くつて——二十三位にしか見えないんですもの」

「独身でいるものは何時までもああサ」

「それに、あんなに派手にしていらつしやるんですもの」

「そうさナア。あの人にはああいふ物は似合わない」

「紫と白の荒い縞の帯なぞをしめて……あんな若い服装をして……」

「あの人のはツクルと不可。洒瀟とした平素の服装の方が可い。縮緬の三枚重かなん

かで撮^とつた写真を見たが、腰から下なぞは見られたものじゃなかった。なにしろ、ああいう気^{きまぐ}紛^まれな人だから、種々な服装をしてみるんだろうよ……ある婦^{おんな}人があの人を評した言葉が好^{ひと}い、他^{ひと}が右と言え左、他^{ひと}が白いと言え黒いって言うような人だトサ」

「惻^{りこう}好^{こう}そうな方ですねえ。私もああいう惻^{りこう}好^{こう}な人に成つてみたい——一日でも可いから……ああ、ああ、私の氣が利かないのは性分だ……私はその事ばかり考えているんですけれど……」

こう言つて、お雪は萎^{しお}れた。

直樹とお福とは部屋の方で無心に口笛を吹きかわしていた。

その晩、三吉は直樹やお福を集めて、冷^{すず}しい風の来るところで話相手に成つた。

「さあ、三人でかわりばんこに一ツずつ話そうじや有りませんか」と直樹が言出した。

「私が話したらば、その次にお福さん、それから兄さん」

「それじゃ泥棒廻^{まぜ}りだわ」とお福が混^{まぜ}反^{かえ}す。

「そんなら、兄さんから貴方」

「私は出来ません。話すことが無いんですもの」

こう若い人達が楽しそうに言い争つた。雑談は何時の間にか骨^{トラ}牌^{ンブ}の遊に變つた。

「姉さんもお入りなさいよ」と直樹はお雪の方を見て勧めるように言った。

「私は止よします」とお雪は子供の傍で横に成る。

「何故？」と直樹はツマラなさそうに。

「今夜は何だか心こころ地もちが悪いんですもの——」と言って、お雪は小さな手をシャブつて
いる子供の顔を眺めた。

無邪気な学生時代を思わせるような笑声が起った。「ああ、ツライなあ、運が悪いなあ」
などと戯れて、直樹が手に持った札を数える若々しい声を聞くと、何時もお雪は噴飯ふきださず
にいられないのであるが、その晩は一緒に遊ぼうとしなかった。急にお房は反返そりかえつて、
鼻を鳴らしたり、足で蹴けつたりした。お雪は肥え太った子供の首のあたりへ線香の粉にし
たのを付けた。お房は怒つて、泣いた。乳房を咬くわえさせて、お雪は沈んで了った。

田舎いなかの盆過に、復た曾根は三吉の家を訪ねた。その時は一人でやって来た。水車の音も
都会の人にはめずらしかった。暫時しばらく彼女は家の門口に立って、垣根のところから南瓜の
生り下ったような佻わびしい棲居すまいのさまを眺めた。

お雪は裏の柿の樹の下へ洗濯物が乾いたかを見に出た。直樹は遊びに出て居なかった。

「曾根さん——」

とお雪は女の客を見つけて、直に家の内へ案内した。

寂しくている三吉も喜んで迎えた。曾根が一人で訪ねて来たということは、ある目に見えない混雑を三吉の家の内へ持来した。曾根は、戸の間隙からでも入って来て、何時の間にか三吉の前に坐っている人のようであつた。

「お雪、鮎でも取りにやつておくれ。それから、お前も話しに来るが可い」と三吉は妻の居る処へ来て言つた。

「私なんか……」とお雪はすねる。

「そう言うものじゃないよ。ああいう人の話も聞くものだよ」

こう言つて置いて、三吉は客の方へ戻つた。

庭に咲いた松葉牡丹、凌霄葉蘭などの花の見える奥の部屋で、三吉は大きな机の上へ煙草盆を載せた。音楽や文学の話が始まった。蜂と蟻と蜘蛛の生活に関する話なども出た。

「こういう田舎で御座いますから、何にも御構い申すことが出来ません」

とお雪は、子供を抱きながら、取寄せたものを持運んで来た。

「まあ、房ふうちゃん御座いますか」

と曾根は可懐なつかしげに言つて、お雪の手から子供を借りて抱いてみた。膝ひざの上に載せて、頬ほおを推当おしあてるようにもしてみた。お房は見慣れない他よその叔母おばさんを恐れたか、声を揚げて泣叫ぶ。土産みやげにと用意して来た翫具おもちゃを曾根が取出して、それを見せても、聞入れない。お雪はこの光景ありさまを見ていたが、やがてお房を抱取つて、炉辺の方へ行つて了つた。

暫時しばらく、曾根は耳を澄まして、お房の泣声を聞いていた。

「昨晚は——私は眠られませんでした」

と曾根が言つて、避暑地の霧に悩まされていることなどを話出した。彼女は、何かこうシツカリと捉つかまる物でも無なければ、自分の弱い体軀からだまで今に何処へか持つて行かれて了うような眼付をした。

「日記といえば」と曾根は又思出したように、「私も日記をつけてみましたけれど……不平なようなことばかりで、面白くないものですから、大晦日おおみそかの晩に焼いて了いました。そして、元日に遺言状を書きました。ああ狂きちがい……私のようなものが世の中に居るのは間違なんで御座いましょう……」

深く洄々さえずえとした彼女の黒瞳くろめは自然と出て来る涙の為に輝いた。

その日、曾根は興奮した精神の狀態ありさまにあつた。どうかすると、悲哀かなしみの底から浮び上つたように笑つて、男というものを嘲るような語気で話した。

お雪はこの仲間入に呼出されても、直に勝手の方へ行つて、妹を相手に洗濯物を取込むやら、霧を吹いて昼むやらしていた。曾根が礼を述べて、別れて帰る時、お雪は炉辺で挨拶あいさつした。

「まあ、宜しいじや御座いませんか……もつと御ご緩ゆつくりなすつたら奈何いかがで御座います……」と客を引留めるように言つたが、曾根は汽車の時間が来たからと断つて、出た。三吉はお雪に言付けて、停車場まで見送らせることにした。

お雪が子供を背負おぶいながら引返して来てみると、机の下に、「お雪さまへ、千代」とした土産が置いてあつた。千代とは曾根の名だ。

「曾根さんは黙つてこういうことをして行く人だ」と三吉が笑つた。

お雪はその紙に包んだ女持の帕子ハンケチを眺めながら、「汽車が後おくれて、大分停車場で待ちましたよ——三十分の余も」

「何か話が出たかネ」と三吉は聞いてみた。

「曾根さんが私のことを、『大變貴方は顔色が悪い』なんて……」

何となく家の内はガランとして来た。三吉夫婦は互に顔も見合せずに、黙って食卓に対うことすら有った。

むずかしい顔付をして考え込んでばかりいるような夫の様子は、お雪の小さな胸を苦しめた。この機嫌きげんの取りにくい夫の言うことは、又、彼女に合点の行かないことが多かった。夫はお房が可愛くて成らないという風で、「この児この頬ほは俺おつの母親おつさんに彷彿そっくりだ」などと言っているかと思えば、突然だしぬけにお雪に向ってこんなことを言出す。

「房ちゃんほんは真実ほんに俺の児かねえ」

「馬鹿な……自分の児でなくて、そんなら誰の児です」

こういう馬鹿らしい問答ほど、お雪の氣いたを傷めることは無かった。

「一体、お前はこういう積りで俺の家かたへ嫁よめいて来た……」

「どういう積りなんて、そんな無理なことを……」

「いつそ俺は旅にでも出て了おうかしらん——どうかすると、そういう気が起って来て仕方ない」

「まあ、どうしてそんな氣に成るんでしようねえ」

お雪はもう呆あきれて了う。「他所よそから歸つて来ると、自分の家ほど好い処は無いなんて、よく言うじや有りませんか——真実ほんとに、貴方は氣が変り易やすいんですねえ」こうも並べてみる。お雪には、夫が戯れて言うとはどうしても思われなかった。それは、唯考えてみたばかりでも、彼女の心をムシヤクシヤさせた。

熱い日が射あたつて来た。三吉の家では、前の年と同じように、鴨居かもいから鴨居へ細引を渡した。お雪が生家さとから持つて来たもので、この田舎では着る時の無いような着物が虫干する為に掛けられた。結婚の時に用いた夫の羽織袴はおりはかま、それから彼女の身に纏まとうた長襦袢ながじゆばんの類まで、吹通る風の為に静かに動いた。小泉の兄の方から送った結納ゆいのうの印の帯などは、未だ一度も締ひたことが無くて、そっくり新しいまま眼前めのまえに垂下したつた。

「ああ、ああ、着物も何も要いらなくなっちゃった」

と言つて、お雪は深い溜息ためいきを吐ついた。

子供は名倉の母から貰ひとつたネルの単衣ひとえを着せて、そこに寐ねかしてあつた。

「それ、うまうま」

とお雪は煩うるさそうに横に成つて、添乳そえちをしながら復た自分の着物を眺めた。

午睡ひるねから覚さめた時の彼女は顔の半面と腰骨のあたりを射し入る光線に照らされていた。

彼女はすこし逆のぼ上のぼせたような眼付をして身を起した。額も光った。こういう癩かんしゃく癩かんしゃくの起

きた時は、平常ふだんより余計に立働くのがお雪の癖で、虫干した物を片付けるやら、黙ふつて拭ふ掃除きそうじをするやらした。彼女は夫や客の為に食事の用意をして置いて、一緒に食おうとも

しなかった。裏の流の水草に寄る螢ほたるは、桑畠の間を通つて、南向の部屋に近い垣根の外ま

で迷つて来た。お雪は濡縁ぬれえんのところに立つて、何の目的めあてもなく空を眺めた。隣のおばさ

んは鎌かまを腰に差して畠はたけの方から帰つて来る。桑を背負つた男もその後から会釈して通る：

：

「一筆ひとふでしめし上げ※。さてとや暑さきびしく候そうろうところ、皆様には奈何御暮いかがしなされ候や。

私よりも一向音信いたさず候えども、御許おんもとよりも御便り無これなく之候故、日々御案じ申上げ

候。御蔭さまにて当方は一同無事に日を送り居り候。御安心被くだされ下たく候。私こと、毎日

々々そこここと手伝見舞にまいり、いそがしく、それに仕事の方も間に合せたくと存じ、

それ着物の浸拔しみぬき、それ洗あらひ張はりと、騒さわぎにばかり日を暮し、未だ父上の道中着物ほどき

もせず居るような仕末に御座候。

——私よりの御無沙汰、右の次第にて、まことに申訳なく候えども、あまり御許よりも手紙なきゆえ、定めし子供を控え手もすくなく其日々々のことに追われ、暇なき身とは御察し申しながら、父上着なされ候てより未だ一通の手紙もまいらず、御許のこのみ気に懸り、心許なくぞんじ居り候。奈何いたし候や。あるいは御許の心変りしやとも考え、斯くては定めし夫に対しても礼義崩れ、我儘なることもなきやと、日々心痛いたし居り候。御許ばかりは左様の事なきかとは思ひ居り候えども、人間の我儘はいずれにもあることなれば、実に安心の成らぬものに御座候。それにしても、御許にかぎりて、左様なことは有るまじくと存じ居り候。何につけ善悪とも御便り下されたく候。

——お福も最早学校も間近に相成り候。長々の間、定めて御心を懸け下され候ことと、ありがたく、父上ともども喜び居り候。

——就いては、先日より何か送りと存じながら、彼や是やにひかされて今日まで延引いたし、誠に不本意に御座候。只今小包便にて、乾塩引少々、鰹節五本、豆せんべい、松風いずれも少々、前掛一枚、右の品々めずらしくも無い物に御座候えども、御送り申上候。乾塩引は素人の俄か干しに候間、何分身は砕け、うまみも無く候。されど今

は斯この品ばかりの時節に候。尤もつとも、斯の品にて小なる物一本四十五錢に御座候。送り物に
 直段書ねだんがきなどは可笑おかしく候。

——御話もいろいろ有之候えども、今日は之にて御免を願ひ上げ候。福子へも宜敷よろしく御
 伝え下されたく候。先まずは、あらあら。

母より

雪子どの

末筆ながら旦那様へ宜敷御申訳くだされたく、御頼申上げ※。又、御近所へは何も進あげ
 る物なきゆえ、何卒々々よろしく御伝え下されたく候」

お雪はしばらく生家さとへも書かなかつた。この母からの便りは彼女に種々いろいろなことを思わ
 せた。お雪は、母の手紙を顔に押当てて、泣いた。

「どうしてそう家が面白くないんでしょうねえ」

こうお雪は夫の傍へ子供を抱いて来て、嘆息するように言った。奥の庭の土塀どべいに近く、
 大きな李すももの樹があつた。沢山密集かたまつて生なつた枝からは、紫色に熟した実がポタポタ落ちた。

三吉は沈思を破られたという風で、子供の方を見て、

「なにも、俺は面白い家庭などを造ろうと思つて掛つたんじゃない——初から、艱難かんなんな生活を送る積りだ」

「でもこの節は毎日々々考えてばかりいらつしやるじゃ有りませんか」とお雪は恨めしうに、「ああ、家を持つてこんな風に成ろうとは思わなかった」

「じゃ、こうだろう、お前のは平素芝居しよつちゆうでも見られるような家へ行きたかつたんだろう」

「そう解とつちや困りますよ。芝居なんか見たか有りませんよ。直に貴方あなたはそれだもの。なんでも私の為することは氣に入らない。第一、貴方は何事なんにも私に話して聞かせて下さらないんですもの」

「こうして話してるじゃないか」と三吉は苦にが笑わらいした。

「話してるなんて……」と言つて、お雪は子供の顔を眺めて、「ああ、もっと惻りこかな女うに生れて来れば好かつた。私も……私も……この次に生れ變つて来たら……」

「生れ變つて来たら、どうする」

お雪は答えなかった。

「あんまり貴方も考え過ぎるんでしょう」

とお雪は冷かに微笑^{ほほえ}んで、「ちと曾根さんの方へでも遊びに行つてらしたらどうです」

「余計な御世話だ」と三吉は力を入れて言つた。「お前は直に、曾根さん、曾根さんだ。それがどうした。お前のような狭い量見で社会^{よのなか}の人と交際が出来るものか」こう彼は言おうとしたが、それを口には出さなかつた。

「だって、こうして引籠^{ひっこ}んでばかりいらつしやらないで、御出掛に成つたら可いでしょうに……」

「行こうと、行くまいと、俺の勝手じゃないか」

土堀の外の方では、近所の子供が集つて李を落す音がした。

「房ちゃん」とお雪は子供を抱^{あつち}め《だきしめ》るようにして、「父さんに嫌^{きら}われたから、彼方^{あつち}へ行きましょう」

力なげにお雪は夫の傍を離れた。三吉は、「妙なことを言うナア」と口の中で言つてみて、復た考え沈んだ。

暮れてから、三吉と直樹とは奥の部屋に洋燈^{ランペ}を囲んで、一緒に読んだり話したりした。急にお雪は嘔氣^{はきけ}を覺えた。縁側の方へ行つて吐いた。

「姉さん、どうなすつたんですか」

と直樹はお雪の側へ寄つて、背中を撫でてやる。

「ナニ、何でもありません」とお雪は暫時動かずにいた後で言った。「難有う——直樹さん、もう沢山です」

この嘔吐の音は直樹を驚かした。三吉は何か思い当ることが有るかして、すこし眉を顰めた。流許の方から塩水を造つて持つて来て、それを妻に宛行つた。

その晩は、お雪はお福と一緒に蚊帳を釣つて、平常より早くその内へ入つた。蚊が居て煩いと言いながら、一度横に成つた姉妹は蠟燭を点して、蚊帳の内を尋ね廻つた。

綠色に光る麻蚊帳を外から眺めながら、三吉と直樹の二人は遅くまで読んだ。

お雪は何時まで団扇の音をさせていたが、夫や直樹の休む頃に復た起きて、蚊帳の外で涼んだ。三吉も寝る仕度をして、子供の枕許を覗くと、お雪が見えない。

「何してゐるんだらうナア」

こう独語のように言つて、三吉は探してみた。表の入口の戸が明いていた。隣近所でも最早寝たらしい。向の料理屋の二階だけは未だ賑かで、三味線の音だの、女の笑い声だのが風に送られて聞えて来る。瓦斯の燈はシヨンボリとした柳の樹を照している。一歩三吉が屋外へ出てみると、暗い空には銀河が煙の様に白かつた。

「お雪——」

と三吉が呼んだ。お雪は白い寝衣ねまきのままで、冷々とした夜気に打たれながら、彼方あちこち是方と歩いていたが、夫の声を聞きつけて引返して来た。

「オイ、風邪を引くといかんぜ」

と三吉は妻を家の内へ呼入れて、表の戸を閉めた。

急に、子供は身体が具合が悪かった。三吉の学校では暑中休暇も短いので、復た彼は弁当を提さげて通う人であつたが、帰つて来てみると、家のものが皆なでお房の機嫌きげんを取つていた。お房は母親から離れずに泣き続けた。

「まあ、どうしたんだろう、この児は」とお雪は持余もてあましている。

「智慧熱ちえねつという奴かも知れんよ」と三吉も言つてみた。「橋本の薬をすこし服のませてみるが可い」

夫婦は他の事を忘れて、一緒にお房のことを心配した。子供の泣声ほど直接じかに三吉の頭あたまへ響けて、苦痛を与えるものは無かつた。あまりお房が泣止まないので、三吉は抱取つ

て、庭の方へ行つて見せるやら、でんでん太鼓だの笛だのを取出して見せるやら、種々にして賺^{すか}したが、どうしてもお房の氣に入らなかつた。

お房の発熱は、大人の病氣と違つて、さまざまなことを夫婦に考えさせた。その夜は二人とも、熱臭い子供の枕許に集つて、一晚中寝ずにも看護をしようとした。やがてお房は熟睡した。熱もそうタイしたことでは無いらしかった。三吉はお房の寝顔を眺めていたが、そのうちに疲労^{つかれ}が出て、眠くなつた。

何時の間にか三吉は時と場所の区別も無いような世界の中に居た。そこには、唯恐しさがあつた。無智な子供のような恐しさがあつた……見ると病室だ。出たり入ったりしているのは医者らしい人達だ。寝台^{ねだい}の上に横たわっている婦人は曾根だ。曾根は三吉に蒼^{あお}ざめた手を出して見せて、自分の病氣はここに在^あると言う。人差指には小さい穴が二つ開いている。痛そうに血が浸^{にじ}染^じんでいる。医者が来て、その穴へU字形の針金を填^はめると、そんな酷^{ひど}いことをしてどうすると叫びながら、病人は子供のように泣いた……

三吉はすこし正氣に復^{かえ}つた。未だ彼は曾根の病床に附いていて、看護を怠らないような氣がしていた……ふと眼が覺めた。氣がついてみると、三吉は自分の細君の側に居た。

このお房の発熱は一晩若い親達を驚かしたばかりで、彼女は直に壯健^{しょうけん}そうな、好く笑う

子供に復^{かえ}つた。

朝晩は羽織を欲しいと思うように成つたのも、間もなくであつた。暑中休暇を送りに来た人達もそろそろ帰仕度^{はじめ}を始^はめた。九月に入つて、お福は東京の学校へ向けて発^はつた。

直樹が別れて行く日も近づいた。浅間登山の連^{つれ}があつて、この中学生も一行の中に加わつて出掛けた。丁度三吉は午前だけ学校のある日で、課業を済まして門を出ると、曾根の宿を訪ねてみた^せ成つた。折角^{せつかく}知人が同じ山の上に来て^きいる。この人の帰京も近づいた^ろう。病気はどうか。こう思^{おも}つた。彼の足は学校から直^{じか}に停車場の方へ向^むいた。

上りの汽車が来^きた。

午後の一時過^すには、三吉は汽車の窓から浅間の方を眺^{なが}めて、直樹のことを想像しながら行く人であつた。濃^こい灰色の雲は山の麓^{ふもと}の方まで垂下^すつて来^きていた。

高原の上はヒドい霧であつた。殆^{ほと}んど雨のような霧であつた。停車場^{ステーション}から曾根の宿^{やど}まで、道^{みち}は可成^{かなり}有^ある。古い駅路に残^{のこ}つた旅舎^{やどや}へ着^きいた時は、三吉が学校通いの夏服も酷^こく濡^ぬれた。

曾根が借りている部屋は、奥の方にある二階の一室で、そこには女ばかり三四人集っていた。嬬やもめぐら暮しをしつけた人達は、田舎の旅舎へ来ても、淋しい男おとこけ気のない様子に見えた。いずれも煙草一つ服のまないような婦人の連で、例の曾根の親戚にあたるという人は見えなかったが、肥った女学生は居た。煙草好きな三吉はやりキレなくて、巻煙草を取出しながら独りで燻ふかし始めた。

「あれ、煙草盆も進あげなかった」

と曾根はサツパリした調子で言つて、客の為に宿から取寄せて出した。女学生はかわるがわる茶を入れたり、菓物くだものを階下したから持運んだりした。歩いて来た故せいか、三吉ばかりは額から汗が出る。

曾根はつつましうに、

「まあ、そんなに御暑いんですか。私は又、御寒いと思つていますのに」

こう言いながら、白い単衣ひとえの襟を搔かき合あわせた。彼女は顔色も蒼あおざめていた。

何時の間にか連の人達は出て行つた。窓の障子の明いたところからは、冷々とした霧が部屋の内まで入つて来た。曾根の話は、三吉の家を訪ねた時のことから、草木の茂つた城跡の感じの深かつたことや、千曲川の眺望ながめの悲しく思われたことなどに移つた。三吉は曾

根の身体のことを尋ねてみた。

「別に変りましたことも御座いません」と曾根は悩ましそうに、「山を下りましたら、海^か辺^{いへん}へ参つてみようかと思ひます」

こう言つて、それから海と山の比較などを始める。「たしか、小泉さんは山が御好んで御座いましたねえ」とも言つた。

三吉はすこし煩^{うる}さそうに、

「医者は何と言うんですか、貴方^{あなた}の御病氣を」

「医者？ 医者の言うことなぞがどうして宛^{あて}に成りましょう。女の病氣とさえ言えば、直ぐ歇^{ヒステリイ}私^{ヒステリイ}的^{ヒステリイ}里……」

曾根の癖として、何時^{いつ}でも自身の解剖に落ちて行く。彼女はそこまで話を持つて行かなければ承知しなかつた。

「私の友達と一緒に音楽を始めました人も、そう申すんで御座いますよ——私ほど氣心の解らない者は無い、こうして十年も交際^{つきあ}つてゐるのにツて」曾根は自分で自分を嘲^{あざけ}るように言つた。

三吉も冷やかに、「貴方のは——誰もこう同情を寄せることの出来ないような人なんで

しょう」

「では、私を御知りなさないんだ」と言つて、曾根は寂しそうに笑つて、「昨晚は悲しい夢を見ましたんで御座いますよ……」

三吉は曾根のシヨンボリとした様子を眺めた。

「私は死んだ夢を見ました……」

こう言つて、曾根は震えた。暫時^{しばらく}二人は無言でいた。

「ああ……私は東京の方へ帰るといふ氣分に成りません。東京へ帰るのは、眞実^{ほんと}に厭^{いや}で……」曾根は嘆息するように言出した。

「してみると、貴方も孤独な人ですかネ」と言つて、復た三吉は卷煙草を燻した。窓の外は陰気な霧に包まれたり、時とすると薄日^{かす}が幽かに射したりした。

旅情を慰める為に、曾根が東京から持つて来た書籍^{ほん}は机の上に置いてあつた。それを曾根は取出した。旅に来ては客をもてなす物も無かつたのである。その曾根が東京の友達から借りて来たと言つて、出して見せたような書籍は、以前三吉も読み耽^{ふけ}つたもので、そう

いう書籍の中にあるような思想に長いこと彼も生活していた。この山の上へ移ってから、次第に彼の心は曾根の愛読するような書籍から離れた。折角の厚意と思つて、三吉はその書籍を手につけて見た。しかし、彼は別の話に移ろうとした。こうして彼が曾根の宿へ訪ねて来たのは、他でもなかった。彼は平素曾根の口から聞く冷い刺すような言葉を聞きたくて来たのである。自分の馬鹿らしさを嘲られたくて来たのである。

意外にも、その日の曾根は涙ぐんでいるような人であつた。何となく平素よりは萎れていた。

「小泉さん、ここへ被入いらしつて御覧なさい——まあ、ここまで被入しつて御覧なさい」

曾根は窓に近い机の側へ行つて、そこに客の席を作ろうとしたが、三吉は辞退した。

「ここで沢山です」と三吉は答えて、新しい巻煙草に火を点けた。

柱には、日蔭干ひかげぼしにした草花の束が掛けてあつた。曾根は壁のところに立つて、眼を細くしてその花束を嗅いで見せた。親しいようでも、何処か三吉には打解けないところがあるので、やがて曾根も手持無沙汰に元の席へ戻つた。彼女は、二度まで三吉の家を訪ねて世話に成つたことを考へて、何卒どうかして客をもてなしたいという風で有つた。林檎りんごなどをむいて勧めた。二人の雑談は音楽のことから、ある外国から来ている音楽者の上に移つた。

「先生がこう申しますんです」と曾根はその年老いた音楽者のことを言った。「曾根さん、貴方は宗教おしえを信じなければいけません、宗教を信じなければ死んだ後で復た御互あに逢うことが出来ませんからツて——死んで極樂へ行く積りも御座いいませんけれど、逢えませんでは心細う御座いますねえ……」

間もなく汽車の時間が来た。三吉は宿の主人に頼んで、車を用意して貰うことにした。

「今日は学校から直じかに汽車に乗つてやつて来ました」と三吉が言つた。

「御宅へ黙つて出ていらしたんでしよう……」と曾根も気の毒そうに苦にが笑わらいした。

「何卒どうぞ、御帰りでしたら、奥さんに宜敷よろしく……」

家の方のことは妙に三吉の氣に掛つて来た。それを言出した時ほど、彼も平氣を装おうとしたことは無かつた。三吉は曾根に別れを告げて、復た霧の中を停車場の方へと急いだ。

日暮に近い頃、三吉は自分の住む町へ入つた。家の草屋根が見える辺あたりまで行くと、妙に

彼の足は躊躇ちゆうちよした。平素ふだんとは違つて、わざわざ彼は共同の井戸のある方へ廻道して、

日頃懇意な家の軒先に立つた。別に用事も無いのに、しばらくそこで近所の人と立話をした。その日の空模様では浅間登山の連中もさぞ困るであらうなどと話し合つた。ちらちら燈火あかりの点く頃に、三吉はブラリと自分の家へ歸つた。

こんな風に、断^{ことわり}なしで外出した例は三吉に無いことであつた。直樹は山の上で一夜を明す積りで出掛けたので、無論夕飯には帰らず、夫婦ぎりで互に黙^{むか}つたまま食卓^{むか}に對つて食つた。妻の氣を悪くした顔付を見ると、三吉は話して差^{さしつかえ}支^えの無いことまで話せなかつた。

夕飯の後、お雪は尋ねた。

「曾根さんは未だ居^いらつしやいましたか」

この問には、三吉は酷^{ひど}く狼狽^{ろうばい}したという様子をして、咽喉^{のど}へ干乾^{ひから}び付いたような声を出して、

「私が知るものかね、そんなことを」

と思わず知らずトボケ顔に答えた。三吉はウソを吐^つかずにはいらなかった。そのウソだということを自分で聞いても隠^{かく}されないような氣がした。

その晩、夫婦の取換した言葉は唯^{ただ}これぎりであつた。物を言わないは言うよりか、どれ程苦痛であるか知れなかつた。直樹は居ず、三吉は独りで奥の蚊帳の内に横に成りながら、自分で自分の為^することを考えてみた。氣味の悪い蚊帳は髪に触^ふつて、碌^{ろく}に眠られもしなかつた。

十二時過ぎた頃、お雪は寝衣のままで、別の蚊帳の内に起直って、

「御休みですか」

と声を掛ける。三吉の方では返事もせずに、沈まり返っていた。お雪の噺^{すすりなき}泣^{なき}の聲が聞えた。

「貴方、御休みですか」

と復た呼ぶので、三吉は眠いところを起されたかのように、

「何か用が有るかい」

「何卒^{どうぞ}、私に御暇^{ごやすみ}を頂かせて下さい」

お雪は寢床の上に倒れて、声を放^なつて哭いた。

「明日にしてくれ……そんなことは明日にしてくれ……」

こう三吉はさも草臥^{くたぶ}れているらしく答えて、それぎり黙つて了った。身動きもせずにいると、自分で自分の呼吸を聞くことが出来る。彼は寢床の上に震えながら、熟^{じゅつ}と寝た振をしていた。そして耳を澄ました。お雪は泣きながら蚊帳の外へ出て、そこいらを歩く音をさせた。畳がミシリミシリ言う。箆^{たんす}筒^すが鳴る。三吉は最早疑心に捕えられて了つて、その物音を恐れた。そのうちに、蚊帳の内に寝かしてあつた子供が泣出した。三吉は子供の傍

の方で妻のなきじやくり歔泣の音を聞くまでは安心しなかった。

浅間登山の一行は翌日の午前に成つて歸つて来た。直樹は好きな高山植物などを入口の庭に置いて草鞋わらじの紐ひもを解いた。

「兄さんにチョッキを借りて行つて、好い事をしました——寒くて震えましたよ」

こう直樹は三吉の顔を眺めて言つた。山登りをした制服も濡ぬれ萎れて見えた。この中学生はあけがた払曉に噴火口を見て、疲れた足を引摺ひきずりながら降りて来た。

直樹を休ませて置いて、三吉は何処どこへという目的めあてもなく屋外そとへ歩きに行つた。お雪の言つたことに對しても、何とか彼は答えなければ成らなかつた。

午後に成つて、三吉はスタスタ歩いて歸つて来た。彼は倚より凭かかつて眺め入つていた田圃たんぼの側わきだの、藉しいていた草だの、それから岡よぎを過る旅人の群などを胸に浮べながら歸つて来た。家へ戻つてみると、直樹は疲労つかれを忘れる為に湯に行つた留守で、お雪は又、子供を背お負ぶいながら働いていた。彼女は、「お暇を頂かせて下さい」と言出したに似合わず、それ程避けたい生活を送っている人とも見えなかつた。三吉は自分の部屋へ行つた。机の上に

紙を展ひろげた。

曾根——旅舎やしやの二階の壁のところに立つて、花束を嗅いで見せた曾根の蒼あおざめた頬は、未だ三吉の眼にあつた。「吾儕われわれは友達ではないか——どこまでも友達ではないか——互に多くの物に失望して来た仲間同志ではないか」この思想かんがえは、三吉に取つて、見失うことの出来ないものであつた。

ここから三吉は曾根へ宛てて最後の別離わかれの手紙を書いた。「——あるいは、これを好しとみ給うの日もあるべきかと存じ候」と書いた。

この長く御無沙汰するという手紙を、三吉はお雪を呼んで見せた。それから、彼はすこし改まったような、決心の籠こもった調子で、こう言出した。

「お断り申して置きますが、僕の家は解散していますから」

「ええ……どうでも貴方の御好きなように……私は生家うちへは帰りませんから」

とお雪は恨めしそうに答えた。

何故夫が曾根への手紙を見せて、同時に家を解散すると言出したかは、彼女によく汲取くみとれなかった。で、その手紙のことに就いては、「そんなことを為なさらないたツても可いでしょうに……」と言つてみた。

その時、お雪は不思議そうに夫の顔を熟視^{みまも}つて、「誰も暇が貰いたくて、下さいと言うものは有りやしません」と眼で言わせていた。復た彼女は台所の方へ行つて働いた。

湯から歸つて来た直樹は、縁側に出て、奥の庭を眺めた。庭の片隅^{かたすみ}には、浅間から採つて来た植物が大事そうに置いてあつた。それを直樹は登山の記念として、東京への好い土産だと思つてゐる。

この温和^{すなお}な青年の顔を眺めると、三吉は思うことを言いかねて、何度かそれを切出そうとして、反^{かえ}つて自分の無法な思想^{かんがえ}を笑われるような気がした。

「直樹さん、すこし僕も感じたことが有つて、吾家^{うち}は解散して了おうかと思ひます」と三吉は話の序^{ついで}に言出した。

直樹は答えなかつた。そして、深い溜息^{ためいき}を吐いた。常識と同情とに富んだこの青年の柔嫩^{やわらか}な眼は自然^{おのず}と涙を湛^{たた}えた。

「君はどう思うか知らんが」と三吉は言淀^{いいよど}んで、「どういふものか家がウマくいかない……僕の考えでは、お雪は生家^{さと}へ歸した方が可いかと思うんです」

「しかし、兄さん」と直樹は涙ぐんだ眼をしばたいて、「それでは姉さんが可哀想です。もし、そんなことにでも成れば、一番可哀想なのは房ちゃんじゃ有りませんか」

「房は可哀想サ」と三吉も言つた。

長いこと二人は悄然として、言葉もかわさずに庭を眺めていた。

お雪は食事の用意が出来たことを告げに來た。それを聞いて、直樹は起ちがけに、三吉に向つて、

「ああ——私のように弱い者は、今のような御話を聞くと、最早何事も手に付ません。私は実に涙もろくて困ります——」

「まあ、行つて飯でもやりましょう」と三吉も立上つた。

「兄さん、兄さん、眞実に考え直してみて下さい」

こう言つて、直樹は三吉の後を追つた。

直樹は三吉夫婦と一緒に食卓に対つても、絶間がなく涙が流れるという風であつた。その晩は三人とも早く臥床に就いたが、互におちおち眠られなかつた。直樹は三吉と枕を並べてしくしくやりだす。お雪もその同情に誘われて、子供に添乳をしながら泣いた。

この二人の暗いところで流す涙を、三吉は黙つて、遅くまで聞いた。

頑固な三吉が家を解散すると言出すまでには、離縁の手續、妻を引渡す方法、媒人などに言つて聞かせる理由、お雪の荷物の取片付、それから家を壊した後の生活のことまでも

想像してみたので、一度それを口にしたら、容易に譲ることの出来ないという彼の心も、いくらか和やわげられたような日が来た。「君の志は有難い——まあ、僕もよく考えてみよう」こう三吉は直樹に言つて、それから復た学校の方へ出掛けたが、帰つて来てみると、曾根からの葉書が舞込んでいた。彼女も避暑地をた発つ、奥様へ宜敷、房子様へも宜敷、と認しためてあつた。三吉から出した手紙は東京へ宛てたので、未だ曾根は知る筈はずがない。そんな手紙が待つとは知らずに、彼女は帰京を急ぐのであつた。

到頭、三吉も譲歩した。家の解散も見合せることにしたと言出した。それを聞いて、お雪はホツと息を吐ついた。直樹も漸ようやく安心したという顔付で、三吉が自分の意見を容いれたことを喜んだ。

「姉さん、浅間の話でもしましょう」

と直樹は勇ましそうに笑ながら言つた。その時に成つて、三吉も登山の話をする氣に成つた。「一度行かない馬鹿、二度行く馬鹿」と土地の人のよく言うことなどを持出した。そして、世帯を持つからその日までのことを考えてみて、今更のように家の内を歩いてみた。

直樹の出発はそれから間もなくで有つた。この青年が中学の制服を着けて、例の浅間土

産なごりを手に提げて、名残惜しように別れを告げて行く朝は、三吉も学校通いの風呂敷包を小脇わきに擁かかえながら、一緒に家を出た。

「直樹さん。左様なら」

とお雪は子供を抱いて、門口のところまで出て見送った。

停車場で直樹に別れた三吉は、直ぐその足で軌路レールの側わきを通って、学校へ廻った。日課を終った後、三吉は家の方へ帰ろうとして、復た鉄道の踏切を越した。その時は城門の前を横に切れて、線路番人の番小屋のある桑畠のところへ出た。番人は緑色の旗を示しながら立っていた。暫時しばらく三吉も佇立たたずんで眺めた。轟然ごうぜんとした地響と一緒に、午後の上り汽車は三吉の前を通過した。

「直樹さんも行つて了った。曾根さんも行つて了った」

こう三吉は思いやった。

ぼつぼつと汽車が置いて行つた煙は、一ひとかたまり団かたまりずつ桑畠の間を這はつて、風の為に消えた。停車場の方で、白い蒸気を噴出す機関車、馳かけて歩く駅夫、乗ったり降りたりする旅客の光景さまなどは、その踏切のところから望むことが出来る。やがて盛んな汽笛が起った。

「直樹さん、左様なら」

と三吉は朝一番で発った人のことを思出して、もう一度別れを告げるように口の中で言ってみた。汽車は出て行つた。三吉は山の上に残つた。

七

一年経つた。三吉は沈んで考えてばかりいる人ではなかった。彼の心は事業しごとの方へ向いた。その自分の氣質に適した努力の中に、何物を以もつても満みたすことの出来ない心の空虚みだを充みそうとしていた。

彼が探さがしていた質実な生活は彼の周囲まわりに在あつた。先まず彼は眼を開いて、この荒こうりよう寥れうとした山の上を眺めようとした。そして、その中にある種いろいろ々な物の意味を自分に学ぼうとしていた。

お雪も最早もう家を持つてから足掛三年に成る。次第に子供も大きく成つた。家には十五ばかりに成る百姓の娘も雇入れてあつた。年寄の居ない三吉の家では、夫婦して子供を育てるということすら容易でなかつた。

丁度三吉は学校の用向を帯びて出京した留守で、家では皆な主人の帰りを待侘まちわびていた。

「今晚は」

こう声を掛けて、近所の娘達が入つて来た。この娘達は、夕飯の終る頃から手習の草紙を抱えて、お雪のところへ通つて来るように成つたのである。

「何卒、お上んなさいまし」とお雪は入口の庭の方へ子供を向けて、自分も一緒に蹲踞みながら言つた。

「まあ、房ちゃんの肥つていなさること」と娘の一人が言つた。

他の娘も笑いながら、「房ちゃん、シイコが出ますかね」

お房は半分眠つていた。お雪は子供の両足を持添えて、「シ——」とさせて、やがて自分の部屋の方へ連れて行つた。

子供の寢床は敷いてあつた。お雪が寢衣を着更えさせていると、そこへ下婢は線香の粉にしたのを紙に包んで持つて来た。お房は股擦がして、それが傷そうに爛れている。お雪は線香の粉をなすつて、襠褌を宛てて、それから人形でも縛るようにお房の足を縛つた。

お雪が横に成つて子供を寝かしつけている間に、近所の娘達は洋燈の周囲へ集つた。下婢も台所を片付けて来て、手習の仲間入をさして貰つた。ともかくもこの娘は尋常科だけ卒業したと言つて、その前に雇つた下女のように、仮名の「か」の字を右の点から書き始

めたり、「す」の字を結むすだけ書き足すようなことはしなかった。

しかし、この下婢おんなは性来読書よみかきが嫌いきらいと見えて、どんなに他の娘達が優美な文字を書習おうとして骨折うづやつていても、それを羨ましいとも思わなかった。お雪が起きて来て、ヨモヤマの話を始める頃には、下婢も黙もくつて引込んでいない。無智な彼女はまたそれを得意しやべにして、他の娘達よりも喋舌しゃべつた。

お房を背負おぶつて町へ遊びに行つた時、ある人がこんなことを言つたと言つて、それを下婢が話し出した。

「教師の赤にしては忌々いめいめしいほどミットモねえなあ——赤もフクレてるし、子守もフクレてるし、よく似合つてらあ」

お雪も他の娘も笑わずにいられなかった。

「明日はこちらの叔父さんも御歸りに成りやしよう」

と娘の一人が言つた。お雪はこの娘達を相手にして、旅にある夫の噂うわさをした。

東京から三吉は種々な話を持つて歸つて来た。旅に出て歸つて来る時ほど、彼も家を思い妻子を思うことはなかった。

「房ちゃん、御土産おみやが有るぜ」

と三吉は旅の鞆かばんをそこへ取出した。

「父さんが御土産を下さるツて。何でしょうね」とお雪は子供に言つて聞かせて、鞆ひもの紐ひもを解ときかけた。「まあ、この鞆の重いこと。父さんの荷物は何時いつでも書籍ほんばかりだ」

下婢おんなは茶を運んで来た。三吉は乾いた咽喉のどを露うるおして、東京にある小泉の家の変化を語り始めた。兄の実が計画していた事業は驚くべき失敗に終つたこと、更に多くの負債を残したこと、銀行の取引が停止されたこと、これに連関して大將の家まで破産の悲運に陥りかけたこと、それから実の家ではある町中まちなかの路地のような処へ立退たちのいたことなどを話した。「姉さんの姉さんで、ホラ、お杉さんという人が有つたろう。あの人も兄貴の家で亡くなつた」と三吉は附添つけたした。

「宗さんはどうなさいました」とお雪が聞いた。

「宗さんか。あの人は世話してくれるところが有つて、そっちの方へ預けてある。今度は俺おれは逢あわなかつた。見舞として菓子だけ置いて来た——なにしろ、お前、兄貴の家では非常な変り方サ。でも兄貴は平気なものだ」

「姉さんも御心配でしょうねえ」

こう夫婦が話し合つてしていると、お房はそこへ来て茶を飲みたいと迫る。母が飲ませてや

ると言えば、それでは聞入れなかった。なんでもお房は自分で茶碗ちやわんを持って飲まなければ承知しなかった。終には泣いて威した。おど

「未だ独りで飲めもしないくせに」

と言つて、お雪が渡すと、子供は茶碗の中へ鼻も口も入れて飲もうとした。皆なゴボして了つた。しま

「それ、御覧なさいな」とお雪は帕子ハンケチを取出した。

「ア——舌打してらあ。あれでも飲んだ積りだ」と三吉が笑う。

「この節は何でも母さんの真似まねばかりしてるんですよ。母さんが寝れば寝る真似をするし、お櫃ひつを出せば御飯をつける真似をするし——」

「どれ、父さんが一つ抱ツこしてみてやろう——重くなつたかな」と三吉は子供を膝ひざの上に載せてみた。

お房の笑顔えがおには、親より外に見せないような可憐あどけなさがあつた。

「兄貴の家を見たら、俺もウカウカしてはいられなく成つて来た」

こう三吉が言つて、子供をお雪の手に渡した。

「房ちゃん」と下婢はそこへ来て笑いながら言つた。「父さんに股眼鏡まためがねしてお見せなさ

い」

「止せ、そんな馬鹿な真似を」

と三吉が言つたが、お房は母の手を離れて、「バア」と言いながら後向に股の下から母の顔を覗いた。

「隣の叔母さんが、房ちゃんの股眼鏡するのは復た直に赤さんの御出来なさる証拠だッて」
 こう下婢が何の気なしに言つた。三吉夫婦は思わず顔を見合せた。

夫婦は眠い盛りであつた。殊に三吉が旅から歸つて来てからは、下婢まで遅く起きるよ
 うに成つた。どうかすると三吉の学校へ出掛けるまでに、朝飯の仕度の間に合わないこと
 も有つた。

朝の光が薄白く射して来た。戸の透間も明るく成つた。一番早く眼を覚すものは子供で、
 まだ母親が知らずに眠っている間に、最早床の中から這出した。

子供は寝衣のまま母の枕頭に遊んでいた。お雪は半分眠りながら、
 「ちよッ。風邪を引くじゃないか」

と叱るように言つて、無理に子供を床の中へ引入れた。お房は起きたがつて母に抱かれながら悶き暴れた。

水車小屋の方では鶏が鳴いた。洋燈は細目に暗く赤く点つていた。お雪は頭を持上げて、炉辺に寝ている下婢を呼起そうとした。幾度も続けざまに呼んだが、返事が無い。

「ああああ、驚いちまった」

お雪は嘆息した。この呼声に、下婢が眼を覚まさないで、子供が泣出した。

「ハイ」

と下婢は呼ばれもしない頃に返事をして、起きて寝道具を畳んだ。下婢が台所の戸を開ける頃は、早起の隣家の叔母さんは裏庭を奇麗に掃いて、黄色い落葉の交つた芥を竹藪の方へ捨てに行くところであつた。

「どんなにお前を呼んだか知れやしない……いくら呼んだつて、返事もしない」

こうお雪が起きて来て言つた。

暗い、噓せるような煙は煤けた台所の壁から高い草屋根の裏を這つて、炉辺の方へ遠慮なく侵入して行つた。家の内は一時この煙で充たされた。未だ三吉は寢床の上に死んだように成つていた。

「最早、起きて下さい」

とお雪が呼起した。三吉は眠がつて、いくら寝ても寝足りないという風である。勤務の時間が近づいたと聞いて、彼は蒲団ふとんを引剥ひきはがすように妻に言付けた。

「宜よう御座んすか。真実ほんとに剥がしますよ——」

お雪は笑った。

漸ようやく正氣に返った三吉は、急いで出掛ける仕度をした。その日、彼は学校の方に居て、下婢いなかが持つて来た電報を受取った。差出人は東京の実で、直に金を送れとしてある。しかも田舎教師の三吉としてはすくなくからぬ高である。前触まえふれも何もなく突然こういうものを手にしたということは、三吉を驚かした。

兄弟とは言いながら、殆んど命令的に金の無心をして寄した電報の意味を考えつつ三吉は家へ帰った。委くわしいことの分らないだけ、東京の家の方が氣遣きづかわしくもある。とにかく、兄の方で、よくよく困った場合でもなければ、こんな請求の仕方も為すまいと想像された。そして、小泉の一族の上に、何となく暗い雲を翹望まちもつけるような氣がした。

三吉は断りかねた。と言つて、余裕のあるべき彼の境涯でも無かつた。お雪もそれを氣の毒に思つて、万一の急に備えるようにと名倉の父から言われて貰つて来た大事の金を送

ることに同意した。三吉は電報がわせ為替を出しに行った。

夫は出て行つた。お雪は子供の傍に横に成つた。次第に発育して行くお房は、離れがたいほどの愛らしい者と成ると同時に、すこしも母親を休息させなかった。子供を育てるということは、お雪に取つて、めずらしい最初の経験である。しかし、泣きたい程の骨折でもある。そればかりではない、気の荒い山家育ちの下婢おんなを相手にして、こうして不自由な田舎に暮すことは、どうかすると彼女の生活を单调なものにして見せた。

「ああああ——毎日々々、同じことをして——」

こうお雪は嘆いて、力なさそうに溜息ためいきを泄もらした。暫時しばらく、彼女は畳の上に俯臥うつぶしに成つていた。復たお房は泣出した。

「それ、うまうま」

と子供に乳房を咬くわえさせたが、乳は最早出なかった。お房は怒つて、容易に泣止まなかつた。

炉に掛けた鉄瓶てつびんの湯はクラクラ沸立っていた。郵便局まで出掛た三吉は用を達して戻

つて来て、炉辺で一服やりながら、一雨ごとに秋らしく成る山々、蟋蟀こおろぎなどの啼出なきだした田圃側たんぼわき、それから柴車だの草刈男だのの通る淋さびしい林の中などを思出していた。お雪は子供を下婢おふわに背負せて置いて、夫の傍へ来た。

「房ちゃん、蠡いなこ捕りに行きましょう」

と言つて、下婢は出て行つた。

夫婦は、質素な田舎の風習に慣れて、漬物で茶を飲みながら話した。めずらしくお雪は煙草たばこを燻ふかした。

「何だつてそんなに人の顔をジロジロ見るんです」とお雪が笑つた。

「でも、煙草なぞをやり出したからサ」こう答えて、三吉もスパスパやつた。

「どういふものか、私は普通なみの身体からだでなくなると、煙草が燻したくつて仕様が有りません」
「してみると、いよいよ本物かな」

三吉は笑い事では無いと思つた。今からこんなに子供が出来て、この上殖えたらどうしようと思つた。

それから四五日経つて、三吉は兄の実から手紙を受取つた。その中には、確かに送つてくれた金を受取つたとして、電報で驚かしたことを気の毒に思うと書いてあつたが、家の

事情は何一つ知らして寄さなかった。唯、負債ほど苦しい恐しいものは無い、借金する^{なか}勿れ、という意味が極く簡単に言つてあつた。

十一月に入つて、復^また実は電報を打つて寄した。そうそうは三吉も届かないと思つた。しかし、弟として、出来得るかぎりの力は尽さなければ成らないような気がした。せめて全額でないまでも、送金しようと思つた。その為に、三吉は三月ばかり掛つて漸く書き終つた草稿を売ることにした。

「オイ、子供が酷^{ひど}く泣いてるぜ。そうして休んでいるなら、見ておやりよ」

「私だつて疲れてるじや有りませんか——ああ、復た今夜も終^{よつび}宵泣かれるのかなあ。さあ、お黙りお黙り——母さんはもう知らないよ、そんなに泣くなら——」

こんな風に、夫婦の心が子供の泣声に奪われることは、毎晩のようであつた。母の乳が止つてから、お房の激^{やす}し易く、泣き易く成つたことは、一通りでない。それに、齒の生え初めた頃で、お房はよく母の乳房を噛^かんだ。「あいた——あいた——いた——いた——ち、ち、ちッ——何だつてこの児はそんなに乳を噛むんだねえ——馬鹿、痛いじゃないか」と言つて、母がお房の鼻を摘^{つま}むと、子供は断^{ちぎ}れるような声を出して泣いた。

「馬鹿——」

と叱られても、お房はやはり母の懷ふところを慕った。そして、出なくても何でも、乳房くわを咬くえなければ、眠らなかつた。

三吉は又、自分の部屋をよく出たり入ったりした。子供の泣声を聞きながら机むかに對うほど、彼の心を焦いら々させるものは無かつた。日あたりの好い南向の部屋とは違って、彼が机の置いてあるところは、最早寒く、薄暗かつた。

收穫とりのいれの休暇やすみが来た。農家の多忙いそがしい時で、三吉が通う学校でも一週間ばかり休業した。ある日、三吉は散歩から歸つて来た。お雪は馳かけ寄つて、

「西さんが被い入らつしやいましたよ」

と言いながら二枚の名刺を渡した。

「御出掛おつしやですかつて、仰おつしやいましてね——それじゃ、出直しておいでなさるツて——」とお雪は附添つけたした。

こういう佗わびしい棲居すまいで、東京からの友人を迎えるというは、数えるほどしか無いことでは有つた。やがて、「お歸りでしたか」と訪れて来た覚えのある声からして、三吉には嬉しかつた。

西は少壯としわかな官吏であつた。この人は、未だ大学へ入らない前から、三吉と往来して、

中村という友達などと共に若々しい思想^{かんがえ}を取換^{とりかわ}した間柄である。久し振で顔を合せてみると、西は最早堂々たる紳士であつた。

西が連れて来て三吉に紹介した洋服姿の人は、やはりこの地方に来てゐる新聞記者であつた。B君と言つた。奥の部屋では、めずらしく盛んな話声が起つた。

西は三吉の方を見て、

「僕は君、B君なら疾^{とつ}から知つていたんだがネ、長野に来ていらつしやるとは知らなかつた……新聞社へ行つて、S君を訪ねてみたのサ。すると、そこに居たのがB君じゃないか」

「ええ、つい隣に腰掛けるまで、西君とは思ひませんでした」と記者も引取つて、「それに苗^{みょうじ}字は變つてましよう、髭^{ひげ}なぞが生えてる、見違えて了^{しま}いましたネ。実は西君が来ると言いますから、S君などと散々悪口を利^きいて、どんな法学士が来るかなんて言つていました——来てみると西君でサ」

西も笑出した。「君、なかなか人が悪いんだよ……僕もね、今度県庁から頼まれてコオペレエションのことを話してくれと言うんで来たのサ。ところが君、酷^{ひど}いじゃないか。僕の来る前に、話しそうなことを皆な書いちまつて、困らしてやれツて、相談していたんだとサ——油断が成らない——人の悪い連中が揃^{そろ}つてゐるんだからね」

西は葉巻の灰を落しながら、粗末な部屋の内を見廻したり、こういう地方に来て引籠ひきこもつて
 いる三吉の容子ようすを眺ながめたりした。三年ばかり山の上で暮すうちに、三吉も余程田舎臭く
 成った。

「B君は寒いでしょう。御免蒙ごうむつて外套がいとうを着給え」と西は背広を着た記者に言つてみて、
 自分でもすこし肩を動ゆつた。「どうも、寒い処だねえ——こんなじや有るまいと思つた」
 お雪はいそいそと茶を運んで来た。西は旅で読むつもりほんの書籍を取出して、それを三吉
 の前に置いて、

「小泉君、これは未だ御覧なさないでしょう。中村に何か旅で読む物はないかつて、
 聞いたら、これを貸してくれました。その葉書の入つてるところまで、読んでみたんです
 ——それじゃ御土産がわりに置いて行きましょう——葉書は入れといってくれ給え」

記者もその書籍ほんを手につけて見た。「私のように仕事にばかり追われてるんじや仕様が
 有りません。すこし静かな処へ引込んで、こういう物を読む暇が有ったら、と思います」

西は記者の横顔を眺めた。

記者は嘆息して、三吉の方を見た。「貴方なぞは仕事を成さる時に、何かこう自然から借金でも有つて、日常しよつちゆうそれを返さなけりや成らない、と責められて、否応いやおうなしに成さるようなことは有りませんか——私はね、それで苦しくつて堪りたまません。自分が何か為なければ成らない、と心で責められて、それで仕方なしに仕事を為っているんです。仕事を為ないではいられない。為すれば苦しい。ですから——ああああ、毎日々々、彼方あつちこつち是方と馳かけずり廻つて新聞を書くのかナア——そんなことをして、この生涯が何に成る——とまあ思ふんです」

「そりやあ君、確かに新聞記者なぞを為せいている故だよ」と西が横よこ槍やりを入れた。「廃よしてみ給え——新聞を長く書いてると、必きつとそういう病氣かかに罹る」

「ところがそうじゃ無いねえ」と記者は力を入れて、「私もすこしは楽な時が有つて、食う為に働かんでも可いという時代が有りました。やつぱり駄目です。今私が新聞屋を廃やめて、学校の教員に成つてみたところが、その生涯がどうなる……畢竟つまり心に休息の無いのは同じことです」

「それは、君、男の遺伝性の野心だ。野心もそういう風に伝わって来れば、寧ろむし尊いサ」と西が笑つた。

「そうかナア」と記者は更に嘆息して、「——所詮^{とても}自然を突破するなんてことは出来ない。

突破するなら、死ぬより外に仕方が無い。そうかと言って、自然に従うのは厭^{いや}です。何故厭かと言うに、あまり残酷じや有りませんか……すこしも人を静かにして置かないじや有りませんか……私は、ですから、働かなけりや成らんという心持から退^のいて、書籍^{ほん}も読みたければ読む、眠たければ眠る、という自由なところが欲しいんです」

「僕もそう思うことが有るよ」と西は記者の話を引取った。「有るけれども、言わないのサ——言うとな、この主人に怒られるから——小泉君は、働くということに一種の考えが有るんだねえ。僕は疾^{とう}からそう思つてる」

「実際——Lifeは無慈悲なものです」

と復た記者が言つた。

「君、君」と西は記者の方を見て、「真^{ほん}実^{とう}に遊ぶということは、女にばかり有ることで、男には無いサ。み給え——小説を読んでさえそうだ、只^{ただ}は読まない——何かしらに仕ようという気で、既に読んでるんだ。厭だね、男の根性という奴は。ホラ、あのゾラの三カ条——生きる、愛する、働く——厭な主義じやないか。ツマラない……」

「小泉さんはこういう処にいらしつて、御寂^{おさみ}しくは有りませんか」と記者が聞いた。

「そりやあ君、細君の有る人と無い人とは違うからね」

こう西が戯れるように言出したので、思わず三吉は苦^{にが}笑^{わらい}した。

「そこだよ」と記者は言葉を続けた。「細君が有れば寂しくは無いだろうか。細君が有つて寂しくないものなら、僕はこうやって今まで独身などで居やしない——しかも、新聞屋の二階に自炊なぞをして、クスブったりして——」

西は話頭^{はなし}を変えようとした。で、こんな風に言つてみた。「男が働くというのも、考えてみれば馬鹿々々しいサ。畢竟^{つまり}、自然の要求というものは繁殖に過ぎないのだ」

「そうすれば、やつぱり追い使われているんだね。鳥が無心で何の苦痛も知らずに歌うというようには、いけないものかしら……」と記者が言った。

「鳥だって、み給え、対手^{あいて}を呼ぶんだと言うじゃないか。人間でも、好い声の出る者が好い配偶を得るといふ訳なんだろう……ところが人間の頭数が増えて来たから、繁殖ということばかりが仕事で無くなつて来たサ——だから、自分の好きな熱を吹いて、暮しても、生きていられるのが今の世の中サ」

「何だか僕等の生涯は夢らしくて困る」

「いずくんぞ知らん、日本国中の人の生涯は皆な夢ならんとはだ」

三吉は黙つて、この二人の客の話を聞いていた。その時記者は沈んだ、痛ましそうな眼付をして、西の方を見た。西は目を外した。しばらく、客も主人も煙草ばかり燻していた。

お房が覗きに來た。

「房ちゃん、被入つしやい」

と西が見つけて呼んだ。お房は恥かしそうに、母のかげに隠れた。やがて母に連れられて、菓子皿の中にある物を貰いに來た。

「お客様にキマリが悪いと見えて、母さんの後であんがとうしてます」と言つてお雪は笑つた。

西は二度も三度も懷中時計を取出して眺めた。

「君は何時まで居られるんだい。なんなら泊つて行つても可いじゃないか」と三吉が言つた。

「ああ難有う」と西は受けて、「今夜僕の為に歓迎会が有るというんで、どうしても四時半の汽車には乗らなくちゃ成らない。今夜はいずれ酒だろうから、僕はあまり難くない

方だけだ——それに、明日はいよいよ演説をやる日取だ」

「それにしても、まあユツクリして行つてくれ給え」

「あの時計は宛に成らない」と西は次の部屋に掛けてある柱時計と自分のとを見比べた。

「大變後れてるよ」

「アア吾家のは後れてる」と三吉も答えた。

お雪はビールに有合せの物を添えて、そこへ持つて来た。「なんにも御座いませんけれど、どうか召上つて下さい」と彼女が言った。三吉も田舎料理をすすめて、久し振で友人をもてなそうとした。

「こりやどうも恐れ入ったねえ。僕は相変らず飲めない方でねえ」と西は言った。「しかし、気が急いて不可から、遠慮なしに頂きます」

三吉は記者にもビールを勧めた。「長野の新聞の方には未だ長くいらっしやる御積りなんでしょうか」

「そうですナア、一年ばかりも居たら帰るかも知れませんが……是方に居ても話相手は無し、ツマリませんからね……私は信濃という国には少許も興味がありません」こう記者が答えた。

西はめずらしそうに、牛額うしびたいと称する輩きのかの塩漬などを試みながら、「僕は碓氷うすいを越す時に——おととい一昨日だ——ほんと真実に寂しかったねえ。彼方あそこまでは何の気なしに乗って来たが、さあトンネル隧道に掛つたら、旅という心こころ地もちが浮いて来た。あの隧道を——君、そうじゃないか——誰だって何の感じもしないで通るといふ人は有るまいと思うよ。小泉君が書籍ほんを探しに東京へ出掛けて、彼処を往つたり来たりする時は、どんな心地だろう」

客を見送りながら、三吉は名残惜なごりしそうに停車場まで随ついて行つた。寒く暗い停車場の構内には、懷手ふところをした農夫、真綿帽子かぶを冠かぶつた旅商人、それから灰色な髪の子守の群などが集つていた。

西と三吉とは巻烟草まきたばこに火を点けた。記者もその側に立つて、

「僕が初めて西君と懇意に成つたのは、何時頃いつだっけね。そうだ、君が大学へ入つた年だ。僕はその頃、新聞屋仲間の年少者サ——二十の年だっけ——その頃に最早天下の大勢なんてことを論じていたんだよ」

「今は余程よっぽど分つていなくちやならない——ところが、君、やっぱり今でも分らないんだ

ろう」と西が軽く笑った。

記者は玉子色の外套の隠袖^{かくし}へ両手を入れたまま、反返^{そりかえ}って笑った。やがて、すこし萎^{しお}れて、前曲^{まえこ}みに西の方を覗^{のぞ}くようにしながら、

「その頃と見ると、君も大分変った」

と言われて、西は黙って記者を熟視^{みつめ}た。三吉は二人の周囲^{まわり}を歩いていった。

三人は線路を越して、下りの汽車を待つべきプラットフォームの上へ出た。浅間へは最早雪が来ていた。

「寒い寒い」と西は震えながら、「僕は汽車の中で凍え死ぬかも知れないよ」

「すこし歩こう」と三吉が言出した。

「そうだ。歩いたら少しは暖かに成る」と言つて、西は周囲^{あたり}を眺め廻して、「この辺は大抵僕の想像して来た通りだった」

三吉は指^{ゆびさ}して見せた。「あそこに薄^{うす}すらと灰紫色に見える山ねえ、あれが八つが岳だ。ずっと是方^{こち}に紅葉した山が有るだろう、あの崖^{がけ}の下を流れてるのが千曲川^{ちくまがわ}サ」

「山の色はいつでもあんな紫色に見えるのかい。もつと僕は乾燥した処かと思った」

「今日は特別サ。水蒸気が多いんだね。平常^{いつも}はもつとずっと近く見える」

「それじゃ何ですか、あれが甲州境の八つが岳ですか——あの山の向が僕の故郷です」と記者が言った。

「へえ、君は甲州の方でしたかねえ」と西は記者の方を見た。

「ええ、甲州は僕の生れ故郷です……ああそうかなア、あれが八つが岳かなア。何だか急に恋しく成つて来た……」と復た記者が懐かしそうに言った。

三人は眺め入った。

「小泉君」と西は思出したように、「君は何時までこんな山の上に引込んでいる気かね……今の日本の世の中じゃ、そんなに物を深く研究してかかる必要は無いと思うよ」

三吉は返事に窮^{こま}った。

「しかし、新聞屋さんもあまり感心した職業では無いね」と西は言った。

「君は又、エジトルだつて、そう見くびらなくツても可いぜ」と記者が笑った。

西も笑つて、「あんなツマラないことは無いよ。み給え、新聞を書く為に読んだ本が何に成る。いくら読んだつて、何物も後へ残りやしない。僕は、まあ、厭だねえ。君なんかも早く切上げて了いたまえ」

「君はそういうけれど、僕は外に仕方が無いし……生涯エジトルで暮すだろう……これも

悪縁でサ」と言つて、記者は赤皮の靴を鳴らして、風の寒いプラットフォームの上を歩いてみた。

下りの汽車が来た。少壮としわかな官吏と、少壮な記者とは、三吉に別れを告げて、乗客も少ない二等室の戸を開けて入った。

「この寒いのに、わざわざ難有う」

と西は窓から顔を出して言つた。車掌は高く右の手を差揚げた。列車は動き初めた。長いこと三吉はそこに佇立たたずんでいた。

黄ばんだ日が映あつて来た。收穫とりのいれを急がせるような小春の光は、植木屋の屋根、機械場の白壁をかすめ、激しい霜の為に枯々に成った桑くわばたけ、畠の間を通して、三吉の家の土壁を照した。家毎に大根を洗い、それを壁に掛けて乾すべき時が来た。毎年山家での習慣とは言いながら、こうして野菜を貯えたり漬物の用意をしたりする頃に成ると、復た長い冬ふゆご籠もりの近づいたことを思わせる。

隣の叔母さんは裏庭にある大きな柿の樹の下へ蓆むしろを敷いて、ネンネコ半天を着た老婆おばあさ

んと一緒に大根を乾す用意をしていた。未だ洗わずにある大根は山のように積重ねてあった。この勤勉な、労苦を労苦とも思わないような人達に励まされて、お雪も手拭を冠り、ウワツパリに細紐を巻付けて、下婢を助けながら働いた。時々隣の叔母さんは粗末な垣根のところへやって来て、お雪に声を掛けたり、お齒黒の光る口元に微笑を見せたりした。下婢は酷い荒れ性で、鞭の切れた手を冷たい水の中へ突込んで、土のついた大根を洗った。「地大根」と称えるは、堅く、短く、蕪を見るようで、荒寥とした土地でなければ産しないような野菜である。お雪はそれを白い「練馬」に交ぜて買った。土地慣れない彼女が、しかも身重していて、この大根を乾すまでにするには大分骨が折れた。三吉も見かねて、その間、子供を預った。

日に日に発育して行くお房は、最早親の言うなりに成っている人形では無かった。傍に置いて、三吉が何か為ようとすると、お房は掛物を引張る、写真挾を裂く、障子に穴を開ける、終には玩具にも飽いて、柿の食いかけを机になすりつけ、その上に這上って高い高いなどをした。すこしでも相手に成っていなければ、お房が愚図々々言出すので、三吉も弱り果てて、鏡や櫛箱の置いてある処へ連れて行って遊ばせた。お房は櫛箱から櫛を取出して「かんか、かんか」と言った。そして、三吉の散切頭を引捕えながら、逆

さに髪をとく真似まねをした。

「さあ、ねんねするんだよ」

こう三吉は子供を背中に乗せて言つてみた。書籍ほんを読みながら、自分の部屋の中を彼方あち是方こちと歩いた。

お房が父の背中に頭をつけて、心こころ地もち好よさそうに寝入った頃、下婢は勝手口から上つて来た。子供の臥床ふしどが胡燧こたつの側に敷かれた。

「とても、お前達のするようなことは、俺おれには出来ない」

と三吉は眠つた子供をそこへ投ほうりだ出すように言つた。

「旦那さん、お大根が縛れやしたから、釣るしておくんなすつて」

と下婢が言つた。この娘は、年に似合わないマセた口の利きようをして、ジロジロ人の顔を見るのが癖であつた。

三吉は裏口へ出てみた。洗うものは洗い、縛るものは縛つて、半分ばかりは乾かされる用意が出来ていた。彼は柿の樹の方から梯子はしごを持つて来て、それを土壁に立掛けた。それから、彼の力では漸く持上るような重い大根の繋つないである縄なわを手に提げて、よろよろしながらその梯子を上った。お雪や下婢は笑つて揺れる梯子を押えた。

「どうも、御無沙汰ごぶさたいたしやした」こう言つて、お房の時に頼んだ産婆が復た通つて来る頃——この「御無沙汰いたしやした」が、お雪の髪を結っていた女髪結を笑わせた——三吉は東京に居る兄の森彦から意外な消息に接した。

それは、長兄の実が復た復た入獄したことを知らせて寄よこしたもので有つた。その時に成つて三吉も、度々たびたび実から打つて寄したあの電報の意味を了解することが出来た。森彦からの手紙には、祖先の名誉も弟等の迷惑をも顧みられなかつたことを搔口説かきくどくようにして、長兄にしてこの事あるはくれぐれも痛嘆の外は無い、と書いて寄した。

三吉は二度も三度も読んでみた。旧い小泉の家を支えようとしている実が、幾度いくたびか同じ蹉跌つまずきを繰返して、その度に暗いところへ陥没おちいつて行く怪路みちすじは、ありありと彼の胸に浮んで来た。三吉が過去の悲惨であつたも、曾かつてこういう可畏おそろしい波の中へ捲込まきこまれて行つたからで——その為に彼は若い志望を擲なげうとうとしたり、落胆の極に沈んだりして、多くの暗い年月を送つたもので有つた。

実が残して行つた家族——お倉、娘二人、それから他へ預けられている宗藏、この人達

は、森彦と三吉とで養うより外にどうすることも出来なかった。それを森彦が相談して寄した。この東京からの消息を、三吉はお雪に見せて、実にヤリキレないという眼付をした。「まあ、実兄さんもうなすつたと言んでしようねえ」

と言つて、お雪も呆れた。^{あき}夫婦は一層の艱難^{かんなん}を覚悟しなければ成らなかった。

冬至には、三吉の家でも南^{かぼちや}瓜^{ふきみそ}と落味^{らくみ}噌^{そう}を祝うことにした。落^との臺^{とう}はお雪が裏の方へ行つて、桑畑の間を流れる水の辺^{ほとり}から頭を持上げたやつを摘取つて来た。復た雪の来そうな空模様であつた。三吉は学校から震えて歸つて来て、小倉^{あんどんばかま}の行燈^{あんどん}椅^いのなりで食卓^{しょくかく}に就いた。相変らず子供は母の言うことを聞かないで、茶^{ちや}碗^{わん}を引取るやら、香^かの物を掴^{つか}むやら、自分で箸^{はし}を添えて食うと言つて、それを宛^{あて}行^がわなければ割れる様な声を出して泣いた。折角^{せつかく}祝おうとした南^な瓜^かも落味^{らくみ}噌^{そう}も碌^{ろく}にお雪の咽喉^{のど}を通らなかつた。

「母さんは御飯が何処へ入るか分らない……」

お雪はすこし風邪^{かぜ}の気味で、春着の仕度を休んだ。押詰^{おしづめ}つてからは、提^{ちやう}灯^{うちん}つけて手習に通つて来る娘達もなかつた。お雪が炬燵^{こたつ}のところ^{ところ}に頭を押付けているのを見ると、下^お

婢んなも手持無沙汰の気味で、アカギレの膏こうやく藥やくを火箸ひばしで延ばして貼はったりなぞしていた。

寒い晩であつた。下婢は自分から進んで一字でも多く覚えようと思うような娘ではなかつたが、主人の思惑おもわくを憚はばつて、申訳ばかりに本の復習おさらいを始めた。何時いつの間にか彼女の心は、蝗虫いなごを捕とつて遊んだり草を藉しいて寝そべったりした楽しい田圃側の方へ行つて了つた。そして、主人に聞えるように、同じところを何度も何度も繰返し読んでいるうちに、眠くなつた。本に顔を押当てたなり、そこへ打臥つつぶして了しまつた。

急に、お房が声を揚げて泣出した。復またた下婢は読み始めた。

「風邪を引いてるじゃないか。ちつとも手伝いをしてくれやしない」

こうお雪が言つた。お雪はもう我慢が仕切れないという風で、いきなり炬燵を離れて、不熱心な下婢の前にある本を壁へ投付けた。

「喧やかましいい!!」

下婢は止すにも止されず、キョトキョトした眼付をしながら、狼狽うろたえている。

「何事なんにも為してくれなくても可いよ」とお雪は鼻を噤すり上げて言つた。「居眠り居眠り本を讀んで何に成る——もう可いから止してお休み——」

唐紙を隔てた次の部屋には、三吉が寂しい洋燈ランブに對むかつて書物を展ひろげていた。北側の雪は

消えずにあつて、降った上降った上へと積るので、庭の草木は深く埋^{うずも}れている。草屋根の軒から落ちる雫^{しずく}は茶色の氷柱^{つちら}に成つて、最早二尺ばかりの長さに垂下^{しりぞ}っている。夜になると、氷雪の寒さが戸の内までも侵入して来た。時々可^{おそ}恐^ろしい音がして、部屋の柱が凍割^{しみわ}れた。

「旦那^{だんな}さん、お先へお休み」

と下婢は唐紙をすこし開けて、そこへ手を突いて言った。やがて彼女は炉辺の方で寝る仕度をしたが、三吉の耳に歔^{すすり}泣^{なき}の音が聞えた。一方へ向いては貧乏と戦わねばならぬ、一方へ向いては烈^{はげ}しい氣候とも戦わねばならぬ——こういう中で女子供の泣声を聞くのは、寂しかった。三吉は綿の入ったもので膝^{ひざ}を包んで、独^{ひと}りで遅くまで机の前に坐っていた。三吉が床に就く頃、子供は復た泣出した。柱時計が十二時を打つ頃に成つても、未だお房は眠らなかつた。

お雪は氣を焦^{いら}つて、

「誰だ、そんなに泣くのは……其方^{そっち}行け……あんまり種々な物を食べたがるからそうだ……めッ」

いよいよお房は烈しく泣いた。時には荒く震える声が寒い部屋の壁に響けるように起つ

た。母が怒って、それを制しようすると、お房は余計に高い声を出した。

「ねんねんや、おころりや、ねんねんねんねしな……」とお雪は声を和やわらけて、何卒どうかして子供を寝かしつけようとする。お房は嬉しそうな泣声に変って、乳房を咬くわえながらも泣止まなかった。

「母さんだつて、眠いじゃないか」

と母に叱られて、復たお房はワツと泣出す。終しまには、お雪までも泣出した。母と子は一緒に成つて泣いた。

「どうしてあんなに子供を泣かせるんだねえ。あんなに泣かせなくつても済むじゃないか」とお雪は下婢の前に立つて言った。隣家となりでは朝から餅搗もちつきを始めて、それが壁一重隔せわて地響のように聞えて来る。三吉の家でも、春待宿はるまつやどのいとなみに忙せわしかった。門松は入口のところに飾り付けられた。三吉は南向の日あたりの好い場所を択えらんで、裏白だの、譲ゆ葉ずりだの、橙だいだいだのを取散して、粗末ながら注連飾しめかざりの用意をしていた。

貧しい田舎教師の家にも最早正月が来たかと思われた。三吉は、裏白の付いた細長い輪

飾を部屋々々の柱に掛けて歩いたが、何か復た子供のことでお雪が氣を傷めていたかと思うと、顔を渋めた。三吉の癖で、見込の無い下婢よりは妻の方を責める——理窟が有つても無くても、一概に彼は使う方のものがワルいとしている。だから下婢が増長する、こうまたお雪の方では残念に思っている。

「そりや、お前が無理だ」と三吉はお雪に言った。「未だ彼女は十五やそこいらじゃないか——子供じゃないか——そんなに責めたつて不可」

「誰も責めやしません」とお雪はさも口惜しそうに答えた。お雪は夫が奉公人というものを克く知らないと思っている——どんなに下婢が自分の命令を守らないか、どんなに子供をヒドくするか、そんなことは一向御構いなしだ、こう思っている。

「責めないって、そう聞えらア」と復た三吉が言った。

「私が何時責めるようなことを言いました」とお雪は憤然とする。

「お前の調子が責めてるじゃないか」

「調子は私の持前です」

「お前が父親さんに言う時の調子と、今のとは違うように聞えるぜ」

「誰が親と奉公人と一緒にして、物を言うやつが有るもんですか。こんな奉公人の前で、

親の恥まで曝さらさなくつても可よう御坐んす」

「解らないことを言うナア——なにも、そんな訳で親を昇かつぎ出したんじやなし——奉公人は親ぐらいに思つていなくつて使われるかい」

奉公人そツちのけにして、三吉とお雪とはこんな風に言合つた。その時、お房は何事が起つたかと言つたような眼付をして、親達の顔を見比べた。下婢は下婢で、隅すみの方に小さく成つて震えていた。

「女中のことと言合をするなぞは——馬鹿々々しい」と三吉は思い直した。そして、自分等夫婦も、何時の間にかこんな争あらそい鬭を始めるように成つたか、と考えた時は腹立しかつた。

「今日は。お餅もちを持つて参じやした。どうも遅なはりやして申訳がごわせん」

こう大きな百姓らしい声で呶どな鳴りながら、在の米屋が表から入つて来た。

「お餅！ お餅！」と下婢は子供に言つて聞かせた。お房は手を揚げて喜んだ。この児は未だ「もう、もう」としか言えなかつた。

百姓は家の前まで餅をつけた馬を引いて来た。「ドウ、ドウ」などと言って、落葉松からまつの枝で囲つた垣根のところへ先まずその馬を繫つないだ。

八

橋本の姉が夫の達雄と一緒に、汽車で三吉の住む町を通過ぎようとしたのは、翌々年の夏のことであつた。

姉のお種は病を養う為に、伊豆の伊東へ向けて出掛ける途中で、達雄は又、お種を見送りながら、東京への用向を兼ねて故郷を発つたのである。この旅には、お種は娘のお仙も嫁の豊世も家に残して置いて、汽車の窓で三吉夫婦に逢われる順路を取つた。彼女は、故郷で別れたぎりしばらく末の弟にも逢わないし、未だ弟の細君も知らないし、成るなら三吉の家で一晩泊つて、ゆつくり子供の顔も見たいと思うのであつたが、多忙しい達雄の身がそうは許さなかつた。

この報知を受取つた三吉夫婦は、子供に着物を着更えさせて、停車場を指して急いだ。夫婦は、四歳に成る総領のお房ばかりでなく、二歳に成るお菊という娘の親でもあつた。お房は母に手を引かれて、家から停車場まで歩いた。お菊の方は近所の娘に背負さつて行つた。

「お前は菊ちゃんを抱いてた方が好かう」

と三吉は、停車場に着いてから、妻に言った。お雪は二番目の子供を自分の手に抱取つた。

上りの汽車が停まるべきプラットホームのところには、姉夫婦を待受ける人達が立っていた。やがて向の城跡の方に白い煙が起つた。牛皮の大靴を穿いた駅夫は彼方此方と馳け歩いた。

種々な旅客を乗せた列車が三吉達の前で停つたのは、間もなくで有つた。達雄もお種も二等室の窓に倚凭つて、呼んだ。弟夫婦は子供を連れてその側に集つた。その時、お雪は初めて逢つた人々と親しい挨拶を交換した。

「橋本の伯母さんだよ」

と三吉はお房を窓のところへ抱上げて見せた。

「房ちゃんですか」と言つて、お種は窓から顔を出して、「房ちゃん……お土産が有りますよ……」

「ヨウ、日に焼けて、壮健そうな児だわい」と達雄も快潤らしく笑つた。

お種は窓越しに一寸でもお房を抱いてみたいという風であつたが、そんなことをして

いる時は無かった。彼女はいそがしそうに、子供へと思つて用意して来た品々の土産物を取出して、弟夫婦へ渡した。

「ずっと東京の方へ御出掛ですか」と三吉が聞いた。

「いや、東京は後廻しです」と達雄は窓につかまつて、「私だけ東京に用が有りますから、先ず家内を送り届けて置いて……今度の様に急ぎませんとね、お種もいろいろ御話したいんでしようけれど——」

「お雪さん、ゆつくり御話も出来ないような訳ですが、今度は失礼しますよ——いずれ復たお目に掛りますよ」とお種も言つた。

お雪は二番目のお菊を抱きながら会釈する、お種は車の上からアヤして見せる、碌に言葉^{かわ}を交す暇もなく、汽車は動き出した。

お種が窓から首を出して、もう一度弟の家族を見ようとした頃は、汽車は停車場を離れた^{しま}つた。田舎^{いなか}の子供らしく育つたお房の紅い頬^{ほお}、お菊を抱いて立っているお雪の笑顔、三吉の振る帽子——そういうものは直にお種の眼から消えた。

「漸やっとこれで私も思が届いた」とお種も言ってみて、やがて窓のところに倚より凭かかった。

しばらく達雄夫婦の話は三吉等の噂うわさで持切った。旅と思えば、お種も気を張って、平常いつもより興奮した精神こころの状態ありさまにあった。なるべく彼女は弱った容子ようすを夫に見せまいとしていた。その日は達雄も酷ひどく元気が無かった。しかし、夫はまた夫で、それを外部そとへは表すまいと勉めていた。

汽車が山を下りた頃、隣の室の客で、窓から乳を絞って捨てる女が有った。お種はそれを見て子の無い自分の嫁のことを思出した。彼女は悴せがれや、嫁や、それから不幸な娘などから最早余程離れたような気がした。

この旅はお種に不安な念おもいを抱いだかせた。何ということはないに、彼女は心細くて心細くて成らなかつた。彼女の衰えた身体からだは、正太の祝言を済ました頃から、臥床とこの上に横よこわり勝で、とかく頭脳あたまの具合が悪かつたり、手足が痛んだりした。で、弟の森彦の勧めに従って、この前にも伊豆の温泉を舐えらんで、遠く病を養いに出掛けたこともあった。伊東行は丁度これで二度目だ。どういうものか、今度は家を離れたくなかつた。厭いやだ、厭いやだ、とお種がいうやつを、無理やりに夫に勧められて出て来た位である。

赤羽で乗替えて、復た東海道線の列車に移った頃は、日暮に近かつた。達雄はすこし横

に成った。お種はセル地の膝掛ひざかけを夫に掛けてやって、その側で動揺する車の響を聞いた。寝ても寝られないという風に、達雄は間もなく身を起したが、紳士らしい威厳のあるその顔には何処どことなく苦痛の色を帯びていた。彼は、眼に見ることの出来ないある物に追われているような眼付をした。

「どうか成さいましたか」とお種は心配顔に尋ねてみた。「都合が出来ましたら、貴方あなたもすこし伊東で保養していらしたら……」

「どうして、お前、そんなユツクリしたことが言っていられるもんじやない」と達雄が言った。「東京で用達をして、その模様に依よつては直に復た国の方へ引返さなけりや成らん……俺おれは今、一日を争う身だ……」

達雄は祖先から伝わった業務にばかり携わっていることの出来ない人であつた。彼は今、郷里の銀行で、重要な役目を勤めている。決算報告の期日も既に近づいている。

車中の退屈しの凌ぎに、お種は窓から買取った菓物くだものを夫に勧めた。達雄はナイフを取出して、自分でその皮を剥むこうとした。妙に彼の手は震えた。指からすこし血が流れた。

「俺も余程どうかしてるわい」

こう言つて、達雄は笑に紛らした。お種は不思議そうに夫の顔を眺めたが、ふとその時

心の内で、

「まあ、旦那だんなが手を切るなんて……今までに無い事だ」

と不審いぶかしく思つて見た。

乗りつづけに乗つて行つた達雄夫婦は、その晩遅く、疲れて、国府津こうづの宿まで着いた。

波の音が耳について、山から行つた人達は一晩中碌ろくに眠られなかった。海の見える国府津やとやの旅舎で、達雄夫婦は一緒に朝飯を食つた。

お種は多忙いそがしい夫の身の上を案じて、こんな風に言出した。

「貴方——もし御多忙ごたひやうしいようでしたらここから帰つて用を達して下さい。最早もう船に乗るだけの話で、海さえ平穩おだやかなら伊東へ着くのは造作ぞうさくない——私ひと独りで行きます」

「そうか……そうして貰えようと、俺も大きに難ありがた有い……しかし、お前独りで大丈夫かな」と達雄が言つた。

「大丈夫にも何にも。ここまで貴方に送つて頂けば沢山です。初めての旅ではないし、それに伊東へ行けば多分林さん御夫婦や御隠居さんが来ていらつしやるで、何にも心配なこ

とは有りません」

「じゃあ、ここでお前に別れるとしよう……こうつと、俺はこれから直に東京へ引返して、銀行の方の用達をしてト……おおいそがし 大多忙」

こういう話をしているところへ、宿の下婢おんなが船の時間を知らせに來た。東京の方へ出る汽車が有ると見えて、宿を発たつて行く旅人も有つた。

「汽車が出るそうな」とお種は聞耳を立てた。「丁度好い——この汽車に乗らさせるが可い」

「伊東まで行く思をして御覽な」と達雄は言つた。「なにも、そんなに周章あわてなくても好い。汽車はいくらも出る」

「でも、貴方は、一日を争う身だなんて仰おつしやつていらしたで……それほど大切な時なら、一汽車でも早く東京へ入った方が好からずと思つて」

「まあ、船までお前を送つてやるわい」

多忙いそがしがっている人に似合わず、達雄はガツカリしたように坐つて、復またた煙草を燻ふかし始めた。何となく彼は平素ふだんのように沈着おちついていなかった。

停車場の方では、汽車の笛が鳴つた。達雄は一向それに頓とんちやく着ちやくなしで、思い屈したよ

うに、深く青い海の方を眺めていた。

そのうちに、伊東行の汽船の出る時が来た。夫婦は宿を出て、古い松並木の蔭から海岸の方へ下りた。細い砂を踏んで、礫こいしのあるところまで行くと、そこには浪なみが打寄せている。旅人の群も集つて来ている。舢はしけに乗る男女の客は、いずれも船頭の背中を借りて、泡立ち砕ける波の中を越さねば成らぬ。お種は夫に別れて、あるたくましげな男に背負おぶさつた。男はジャブジャブ白い泡の中を分けて行つた。

舢はしけが浮いたり沈んだりして本船の方へ近づくに随したがつて、悄しよんぼり然然見送りながら立つてゐる達雄の顔も次第にお種には解らなく成つた。勝手を知つた舟旅で、加おまけに天気は好し、こうして独りで海を渡るといふことは、別にお種は何とも思わなかつた。唯、彼女は夫のことが気に懸つて成らなかつた。汽船に移つてから、彼女は余計に心細く思つて来た。夫は最早傍に居なかつた。

伊豆行の汽船は相模灘さがみなだを越して、明るい海岸へ着いた。旅客は争つて舢はしけに移つた。お種も、湯ゆの香かのする温泉地へ上つた。

伊東の宿には、そこでお種の懇意に成った林夫婦、隠居、書生などがその夏も来ていた。この家族は東京から毎年のように出掛けて来る浴客である。長い廊下に添うて、庭に面した二階の部屋がこの人達の陣取つていた処で、お種はその隣の一室へ案内された。不取^{とりあえ}敢^ず、彼女は嫁の豊世へ宛^あてて書いた。

その日からお種は温泉宿の膳^{ぜん}に對つて、故郷の方を思う人であつた。不思議にも、達雄からは文通が無かつた。一週間待つても、二週間待つても、夫は一回の便りもしなかつた。一月待つた。まだそれでも夫からは便りが無かつた。正太や豊世の許^{ところ}から来る手紙には、父のことに就^ついて一言も書いてなくて、家の方は案じるなどか、くれぐれも身^{からだ}を大切にしてお病を養つてくれよとか——唯、母に心配させまい心配させまいとするような風に書いてある。何となくお種は家に異状の起つたことを感じた。こうして遠く離れた土地へ——海岸へ出れば向に大島の見えるような——そんな処へ独り彼女が置^{おか}れるというは、何事も夫が見せまいとする為であろうと想像された。お種は、夫に勧められて無理に連出されて来た旅の心細かつたことや、それから途中で夫の手が震えてついぞ切つた例^{ためし}のない指などを切つたことを絶えず胸に浮べた。そんなことを思う度に、身体がゾーとして来た。

二月待つた。隣室の林夫婦は、隠居と書生だけ置いて、東京の方へ行く頃と成つた。そ

の人達を船まで見送るにつけても、お種は堪え難い思をした。

東京に居る森彦からの手紙は、すこしばかり故郷の事情を報じて来た。それを読んで、始めてお種は夫の家出を知った。森彦の考えにも、ここで姉が帰郷してみたところで、家の方がどうなるものでも無い。それよりは皆なの意見を容れて今しばらく伊東に滞在しておれ、とある。不思議だ、不思議だと、お種が思い続けたことは、漸く端緒だけ呑込めることが出来るように成った。しかし、彼女の気質を知る者は、誰一人として家の模様をあからさまに告げて寄すものが無かつた。

何にも達雄からは音沙汰が無い……苦しいことが有れば有るように、せめて妻の許だけへは家出をした先からでも便りが有りそうなもの、とこうお種は夫の心を頼んでいた。また一月待った。

橋本の若夫婦——正太、豊世の二人は、母のことを心配して、便船に乗って来た。

この人達を宿の二階に迎えた時のお種の心こころもち地は、丁度吾子を乗せた救い舟にでも遭遇あつたようで、破船同様の母には何から尋ねて可いか解らなかつた。

悴^{せがれ}や嫁の顔を見ると、お種も力を得た。彼女はすこし元気づいたような調子で、自分の落胆していることを若いものに見せまいとする風であつた。

「お前達は子が無いで——こういう温泉地へ子でも造りに来たかい」

と言われて、正太と豊世とは暫時^{しばらく}顔を見合せた。

「母親^{おつか}さん、そこどころじゃ有りませんよ……」

と豊世^{とよせ}が愁^{うれ}わしげに言出した。

正太はこの話を遮^{さへぎ}つて、妻にも入浴させ、自分でも旅の疲労を忘れようとした。

浴室は折れ曲つた階段を降りて行つたところにあつた。伊豆らしい空の見える廊下^{いたず}のところで若夫婦はちよつと佇^{たたず}立んだ。

「お前達は子でも造りに来たかいなんて——母親さんはあんな気で被^い入しやるんでしょうか」と豊世が言つてみた。「真^{ほん}実に何からお話したら可いでしょうねえ……」

「なにしろ、お前、ああいう気性の母親さんだから、一時^{いちとき}に下手^{へた}なことは話せない」と正太も言つた。「お前が側に附いていて追々と話して進^あげるんだネ」

こんな言葉を取^{とり}換^{かわ}した後、正太は二三の男の浴客に混つて、湯船の中に身を浸した。彼は妻だけこの伊東に残して置いて復た国の方へ引返さなければ成らない人で有つた。前

途は彼に取つて唯暗澹^{あんたん}としている。父が投出して置いて行つた家の後仕末もせねば成らぬ。多くの負債も引受けねば成らぬ。「家なぞはどうでも可い」とよく往時^{むかし}思い思ひした正太ではあるが、いざ旧い家が壊れかけて来たと成ると、自分から進んでその波の中へ捲^ま込まれて行つた。

湯から上つて、正太は母や妻と一緒に成つた。

母は声を低くして、「林の御隠居も隣室^{となり}へ来ておいでる……それで先刻^{さつき}あは言つてみたが、大概私も国の方のことは察しておるわい」

「実叔父さんの応援さえしなかつたら、こんなことには成らなかつたかも知れない」と正太が言つた。「しかし、今と成つてみれば、それも愚痴^{おとし}だ。父親^{おとう}さんも苦しく成つて来たから応援した——要するに、是方^{こつち}の不覚だ」

「実叔父さんもうしてあんなことを成すつたんでしよう。必^{きつ}と誰かに欺^{だま}されたんでしようねえ」こう豊世は言つた。

母は引取つて、「ホラ、私が伊東へ来る前に、実のことで裁判所から調べに来たろう——私はあれが氣に成つて氣に成つて仕方が無かつた。田舎^{いなか}のことだもの、お前、尾鰭^{おひれ}を付けて言い触らすさ」

「あれでパツタリ融通が止つた」と正太は言つた。

「大方そんなことだらうと思つた」と母も考へて、「銀行の用だ、銀行の用だと仰つて、何度父親さんも東京へ出たか知れない……東京で穴埋が出来なかつたと見えるテ。それで、何かや、後はどう成つたかや」

「成るようにしか成りません」と正太は力を入れて、「森彦叔父さんにも国の方へ行つて頂く積りです」

「嘉助もどうしたかサ」

「こういう時には、年をとつた者は何の力にも成らない……殆んど意見が立てられない」

お種が掘つて聞こう聞こうとするので、なるべく正太はこういう話を避けようとした。

その時、お種は達雄の行衛ゆくえを尋ねた。

「途中で父親さんから実印を送つて寄しました。それが最後に來た手紙でした。多分……支那の方へでも行く積りらしい……」こう正太は言い紛まぎらして、委くしいことを母に知らせまいとした。

「一旗ひとはた挙げて来る氣かいナア」

と母が力を落したように言つたので、思わず豊世は胸が迫つて來た。女同志は一緒に成

つて泣いた。

正太は母の側に長く留ることも出来なかった。伊東を発つ日、彼は母だけ居るところで、豊世の身の上に起つた出来事を告げた。

聞けば聞くほど、お種は驚愕おどろきの眼を瞪みはつた。夫が彼女のもので無くなつたばかりでなく、嫁まで彼女のものでは無くなりかけて来た。

正太は簡単に話した。父の家出が世間へ伝わりと同時に、豊世の生家さとからは電報を打つて寄した。それには老祖母おばあさんの病氣としてある。豊世は直に電報の意味を読んだ。そして、再び夫の許へ帰ることの出来ない様な疑念うたがいと恐怖おそれとに打たれた。生家へ出掛けて行つてみた時の豊世は、果して想像の通り引止められて了しまつた。離別の悲哀かなしみは豊世の眼を開けた——どこまでも豊世は正太の妻であつた——そんな訳で、彼女は自分の生家に対しても、当分国の方に居にくい人である——彼女はしばらく東京にでも留つて、何か独立することを考えようとして来た人である。こういう話を母に残して置いて、やがて正太は別れを告げて行つた。

一旦くれた嫁を取戻すとは何事だろう。この思想はお種に非常な侮辱を与えた。その時お種は、橋本の家に伝わる病気を胸に浮べた。何かにつけて、彼女は先ずその事を考えた。「あんな親子には見込が無い——」などと豊世の生家から指を差されるのも、唯、女に弱いからだと考えられた。

「だから、私が言わないこつちや無い——」

とお種は独りで嘆息して了った。彼女は豊世を抱いて泣きたいような心が起つて来た。そして皆な一緒にどうか成つて了うような気がした……

「橋本さん——貴方はそんな頭髪あたまをしていらつしやるから旦那に捨てられるんです」

お種が部屋を出て、二階の欄干てすりから温泉場の空を眺めていると、こんな串談じょうだんを言いながら長い廊下を通る人が有った。隣室の客だ。林夫婦は師走しわすの末に近くなって復た東京から入湯に来ていた。

豊世と一緒に成つた頃から、お種は髪を結う気も無く、無造作に巻きつけてばかりいたが、男の口からこんな言葉を聞いた時は酷ひどく気に成つた。

「捨てられたと思つて貰うと、大きに違ふ……私は旦那に捨てられる覚えは無いで……」
と腹の中で言つてみた。他ひとから見れば最早そんな風に思われるか、とも考えた。彼女は林が戯れて言うとも思えなかつた。

部屋へ戻ると、豊世は入替りに出て行つた。姑しゅうとめと嫁とが一緒に成つて、国の方の話を始めると、必きつと終しまいには両方で泣いて了う。二人は互に顔を合せているのも苦くるかつた。町へ——漁村へ——近くにある古跡へ——さもないければ隣室に居る家族、その他この温泉宿で懇意に成つた浴客とこの許へ遊びに行くことを勉つとめて、二人ぎり一緒に居ることはなるべく両方で避けよう避けようとした。

お種は独り横に成つた。故郷の家が胸に浮んだ。机がある、洋燈ラングが置いてある、夫はしきりと手紙を書いている……それは前の年のある冬の夜のことで、どうも夫の様子が変に思われたから、一時頃までお種は寝た振をしていたことがあつた。やがて夫が手紙を書き終つた頃に、むつくと起きて、是非それを読ませよと迫つた。未だそんなものを書く氣でいるとは、読ませなければ豊世を呼ぶとまで言つた。その時、夫がこの手紙だけは許してくれ、そのかわり女のことは思い切る、とお種に誓うように言つた……その後、女は東京へ出たとやらで、どうかすると手紙の入つた小包が届いた。夫は送金を続けていた……

お種の考えることは、この年の若い、親とも言いいたような自分の夫に媚^こびる歌妓^{うたひめ}のことに落ちて行つた。同時に、国府津の海岸で別れたぎり、年の暮に成るまで待つても夫から一回の便りも無いことを思つてみた。

到頭、お種は豊世と二人で、伊東に年をとつた。温泉宿の二階で、林の家族と一緒に、^{ごまめ}鰯、数の子、^{かちぐり}乾栗、それから膳^{ぜん}に上る数々のもので、屠蘇^{とそ}を祝つた。年越の晚には、女髪結が遅く部屋々々を廻つた。お種もめずらしく、豊世の後で髪を結わせた。姑^{まげ}の鬻^うがいつになく大きいので、それを見た豊世は奇異な思に打たれた。

お種はその晩碌に眠らなかつた。夜の明けないうちに起きて、サツパリと身じまいした。「まあ、母親^{おつか}さんは白粉^{おしろい}などをおつけなさるんですか」と豊世も臥床^{とこ}を離れて来て言つた。

「私だつて、つけなくつてサ」とお種は興奮したように笑つた。「若い時はいくらでもつけた」

「若い時はそうでしょうけれど、私が来てから母親さんがそんなに成さるところを見たことが無い」

「さあ、さあ、豊世もちやつと化粧^{おつくり}しよや。二人で揃^{そろ}つて、林さんへ御年始に行こまい

かや」

温泉場の徒然^{つれづれ}に、誰が発起するともなく新年宴会を催すことに成った。浴客は思い思いの趣向を凝らした。豊世が湯から上つて来て見ると、姑は何処^{どこ}からか袴^{はかま}を借りて来て、裾^{すそ}の方を糸で括^{くく}つているところであつた。

「豊世や、今日は林の御隠居さんと一緒に面白い趣向をして見せるぞい。ちゃんともう御隠居さんには打合せをして置いたからネ」

「こうお種が言うので、豊世は不思議そうに、

「母親さんはまた何を成さるんですか——」

「まあ、何でも好いから、お前の羽織を出して貸しとくれ」

豊世の羽織には裏に日の出に鶴をあらわしたのが有った。お種はそれを借りて、裏返しにして着て見せた。

「真実^{ほんと}に、何を成さるんですか」と豊世が心配顔に言った。 「母親さん、下手な事は止^よて下さいよ」

「お前のように、楽屋でそんなことを言うもんじやないぞい——見よや、日の出に鶴だ。丁度御誂だ。おあつらえこれで袴を穿はいて御覧、立派な万歳まんざいが出来るに」

豊世は笑つて可いか、泣いて可いか、解らないような気がした。

「旅の恥は掻捨サ」とお種が言つた。「氣晴しに、私も子供に成つて遊ぶわい……：それはそうと、豊世は御隠居さんの許ところへ行つて、御仕度はいかがですかつて見て来ておくれや」姑の言付で、豊世は部屋を出た。平素ふだんから厳格な姑のような人に、そんなトボケた真似まねが出来てあろうか、こう思うと、豊世はハラハラした。

二階の広間には種々いろいろな浴客が集つて来た。その日はこの温泉宿に逗留とまりゆうしているものばかりでなく、他よそからも退屈顔な男女が呼ばれて来て、一切無礼講で遊ぶことに成つた。板前から女中まで仲間入を許された。

賑にぎやかな笑声が起つた。隠し芸が始まつたのである。若い娘や女中達は楽しそうに私語ささやき合つたり、互に身体を持たせ掛けたりして眺めた。こういう時に見せなければ見せる時は無いと思ふかして、芸自慢の人達は我勝にと飛出した。中には、喝采かつさいに夢中に成つて、逆上のぼせたような人も有つた。

この光景ありさまを見て来て、廊下伝いに豊世は部屋の方へ戻ろうとした。林の細君に逢つた。

豊世は気が気で無いという風に、「奥さん——母親さん達は大丈夫なんでしょうかねえ。何だか私は心配で仕様が有りません」

「私共の祖母さんが太夫さんなんですトサ」と林の細君は肥満した身体を動ゆすりながら笑つた。

「母親さんもネ、家の方のことを心配なさり過ぎて、それであんなに気が昂たつたんじゃないかと思いますよ——母親さんには無い事ですもの……」

「でも、橋本さんはキサクな、面白い方ですから……私共の祖母さんを御覧なさいな」折れ曲つた長い廊下の向には、林の家族の借りている二間ばかりの部屋が見える。障子の開いたところから、動く烏帽子えぼし、頭巾づきんが見える。

仮装した女の万歳の一組がそこへ出来上つた。お種は林の隠居の手を引きながら、嫁達の立っている前を通過とぎた。

その時、お種は心の中で、

「面白可笑おかしくして遊ばせるような婦女おんなでなければ、旦那衆の気には入らないのかしらん

……ナニ、笑わせようと思えば私だつて笑わせられる」

こう自分で自分に言つてみた。彼女は余程トボケた積りでいた。嫁が心配してどのような
 だとは思ひも寄らなかつた。

盛んな喝采が起つた。浴客はいずれもこの初春らしい趣向と、年をとつた人達の戯たわむれとを
 狂喜して迎えた。豊世は氣まりが悪いような、困つて了つたような顔付をして、何を姑すが
 為るかと心配しながら立つていた。林の細君も笑いながら眺めた。

林の隠居は、こんな事をしたことの無い、溫柔おとなしい老婦としよりで、多勢の前へ出ると最早下
 を向いて了つた。その側には、お種が折角の興をさませまいとして、何か独りで万歳の
 祝いそんなことを真似まねて言つた。

「ホイ——ポン——ポン——」

お種は鼓を打つ手真似をしながら、モジモジして震えている太夫の周囲まわりを廻つて歩いた。
 豊世は立つて眺めながら、

「まあ、母親さんは……どうしてあんなことを覚えていらしたんでしょう……何時いつ、何ど
 処こで覚えたんでしょう」

「祖母さん——」と林の細君は隠居のことを言つた。

「あんなに、喋舌^{しゃべ}つて、喋舌^{しゃべ}つて、喋舌^{しゃべ}りからかいて——」と豊世は思わず国訛^{くになま}りを出した。

「奥さん、吾家^{うち}の母親さんをああして出して置いてても可いでしょうか。私はもう困つていますわ」

「そうネ。橋本さんは少しハシヤギ過ぎますネ」

こんな話をしているうちに、お種の方では目出度く祝い納めて、やがて隠居と一緒に成つて笑つた。隠居は烏帽子を擁^{かか}えたまま自分の部屋の方へ逃げて行つた。お種もその後を追つた。

部屋へ戻つてからも、お種は自分で制^{おさ}えることの出来ないほど興奮していた。豊世は姑の背後^{うしろ}へ廻つて、何よりも先ず羽織や袴を脱^{おち}がせた。

「母親さん、母親さん、すこし氣を沈^{おち}着けて下さいよ……」こう豊世は慰め顔に言つた。お種は笑つて、「なにも、そんなに心配することは無い。母親さんは、お前、皆さんと遊ぶところだぞや。そんなことを言う手間で、褒^ほめてくれよ」

豊世は何とも言つてみようが無かつた。過度の心痛から、姑がこんな精神^{こころ}の調子に成るのでは有るまいか、と考えた時は哀^{かな}しかった。

夕方まで、お種は庭に出て、浴客を相手に物を言い続けた。その晩は、親子とも碌ろくに眠られなかった。この反動と疲労とが来て、姑が沈み考えるように成るまでは、豊世も安心しなかった。

何時まで豊世も姑と一緒にいられる場合では無かった。豊世は豊世で早く東京へ出て独立の出来ることを考えなければ成らないと思っていた。旧い静かな家に住み慣れたお種には、この親子別れ別れに成るといことが心細くて、嫁を手離して遣やりたくなかった。

「豊世——お前は私のことばかり心配なように言うが、自分のことも少ちと許考えてみるが可い——そうまたお前のように周章あわてることは無いぞや」

とお種は嫁に向って言ってみた。

お種の考えでは、夫の行方に就ついて、悴せがれ夫婦の言うことに何処か判然はつきりしないところがある。どうも隠すかしているらしく思われるところが有る。もし嫁が聞知きちっているものとすれば、何とか言い賺すかして、夫の行方を突留めたい。こう思った。お種は、もうすこしもうすこしと、伊東に嫁を引留めて置きたくてならなかった。

「では、母親さん、こういうことにしましょう。私にもどうして可いか解りませんからネ、森彦叔父さんに一つ指図さしずして頂きましょう……森彦叔父さんが居た方が可いと仰つたら、居ましょう」

豊世はこんな風に言出した。

森彦からは返事が来た。それには豊世の願った通りのことが書いてあった。豊世は早く上京して前途の方針を定めよとあるし、姉は今しばらく伊東で静養するように、そのうちには自分も訪ねて行くとしてあった。

二月の末に成つて、漸く豊世は姑の側を離れて行くことに決めた。

「もうすこし、お前に居て貰いたいよ。私独りに成つて御覧、どんなに心細いか知れない」とお種は萎しおれた。

「ええ、私もこうして居たいんですけれど……居られるものなら、一日でも余計……」
 こう言いながら、嫁はサツサと着物を着更えた。旅の手荷物もそこそこに取纏とりまとめた。

船までは、林の隠居や細君と一緒に見送りたいと言出した。お種はこの人達に励まされながら豊世と連立つて、宿を出た。まだ朝のことで、湯の流れる川について、古風な町々を通過はしけぎると、やがて国府津通いの汽船の形が眼に見えるところへ出て来た。船頭は舢はしけの

用意をしていた。

最早節句の榮螺さざなえを積んだ船が下田の方から通つて来る時節である。遠い山国とはまるで氣候が違つていた。お種は旅で伊豆の春に逢うかと思うと、夫に別れてから以来の事を今更のように考えてみて、海岸の砂の上へ倒れかかりそうな眩暈心地めまいごちに成つた。

「母親さん、母親さん、すっかり御病氣を癒なおして来て下さいよ。私は東京の方で御待ち申しますよ……真実ほんとに、母親さんの側に居て進あげたいんですけれど」

と言つて、嫁は姪の方へ急いだ。

お種は林の隠居、細君と共に、豊世を乗せた汽船の方を望みながら立つていた。別離わかれを告げて出て行くような汽笛の音は港の空に高く響き渡つた。お種の眼前めのまえには、青い、明るい海だけ残つた。

宿へ戻つて、復またたお種は自分一人を部屋の内に見出した。竹翁の昔より続いた橋本の家が一夜のうちに基礎どだいからして動揺ぐらついて来たことや、子がそれを壊こわさずに親が壊そうとしたことや、何時の間にか自分までこの世に最も頼りのすくない女の仲間入をしかけているこ

となどは、全くお種の思いもよらないことばかりで有った。

豊世は行つて了つた。午後にお種は折れ曲つた階段を降りて、湯槽ゆぶねの中へ疲れた身からだを投入した。溢あふれ流れる温泉、朦朧もろうろとした湯気、玻璃窓ガラスまどから射し入る光——周囲あたりは静かなもので、他に一人の浴客も居なかつた。お種は槽おけの縁ぼんのくぼへ頸くび窩わのところを押付けて、萎しなびた乳房を温めながら、一時死んだように成つていた。

窓の外では、温暖あたたかい雨の降る音がして来た。その音は遠い往時むかしへお種の心を連れて行つた。お種がまだ若くて、自分の生家さとの方に居た娘の頃——丁度橋本から縁談のあつた当時——あの頃は、父が居た、母が居た、老祖母おばあさんが居た。この小泉へ嫁かたづいて来た老祖母の生家の方でも、お種を欲しいということで、折角好ましく思つた橋本の縁談も破れるばかりに成つたことが有つた。それを破ろうとした人が老祖母だ。母は老祖母への義理を思つて、すでに橋本の方を断りかけた。もしあの時とき……お種が自害して果てる程の決心を起さなかつたら、あるいは達雄と夫婦に成れなかつたかも知れない……

思いあまつて我と我身きずつを傷けようとした娘らしさ、母に見つかつて救われた当時の光景さま、それからそれへとお種の胸に浮んで来た。

これ程の思をして橋本へ嫁いて来たお種である。その志は、正太を腹おなかに持ち、お仙を腹

に持った後までも、変らない積であつた。人には言えない彼女の長い病氣——実はそれも夫の放蕩ほうとうの結果であつた。彼女は身を食くれる程の苦痛にも耐えた——夫を愛した——ここまで思い続けると、お種は頭脳あたまの内部なかが錯乱して来て、終しまには何にも考えることが出来なかつた。

「ああ、こんなことを思うだけ、私は足りないんだ……私が側に居ないではどんなにか旦那も不自由を成さるだろう……」

とお種は、濡ぬれた身からだを拭ふく時に、思い直した。

湯から上つて、着物を着ようとする、そこに大きな姿見がある。思わずお種はその前に立つた。湯気で曇った玻璃ガラスの面を拭いてみると、狂死した父そのままの蒼あおざめた姿が映つていた。

「眞実ほんとに、橋本さんは御お羨うらやましい御身分ですねえ——御国の方からは御金を取寄せて、こうしていくらでも遊んでいらつしやられるなんて」

すこし長く居る女の湯治客の中には、お種に向つて、こんなことを言う人も有つた。お

種は返事の仕ようが無かった。

「ええ……私のようにノンキな者は有りませんよ」

お種は自分の部屋へ入っては声を呑んだ。

林の家族はやがて東京の方へ引揚げて行った。お種の話相手に成って慰めたり励ましたりした隠居も最早居なかった。この温泉場を^た発って行く人達を見送るにつけても、お種はせめて東京まで出て、嫁と一緒に成りたいと願ったが、三月に入っても未だ許されなかった。沈^{おちつ}着け、沈着けという意味の手紙ばかり諸方から受取った。

国の方からは送金も絶え勝に成った。そのかわり東京の森彦から見舞として金を送って来た。この弟の勧めで、お種は皆なの意見に従って、更に許しの出るまで伊東に留まることにした。山に^{わらび}蕨の出る頃には、宿の浴客は連立って遠くまで採りに出掛けた。お種もよく散歩に行つて、伊豆の日あたりを眺めながら、夫のことを思いやった。採つて来た蕨は丁寧に乾し集めた。支那の方へ行つたとかいう夫の口へ、せめて乾した蕨が一本でも入るような^{つて}伝は有るまいか、とも思つてみた。

六月の初に成った。漸^{ようや}く待侘^わびた日が来た。お種は独りでそこそこに上京の仕度をした。その時に成つても、達雄からは何等の消息が無い。しかし、お種は夫を忘れることが出来

なかつた。

旅で馴染を重ねた人々にも別れを告げて、伊豆の海岸を離れて行くお種は、来た時と帰る時と比べると、全く別の人のようであつた。海から見た陸の連続、荷積の為に寄つて行く港々——すべて一年前の船旅の光景を逆に巻返すかのようで、達雄に別れた時の悲しい心こころもち地が浮んで来た。

汽船は国府津へ着いた。男女の乗客はいずれも陸へと急いだ。高い波がやって来て舳はしけを持揚げたかと思ううちに、やがてお種は波打際に近い方へ持つて行かれた。間もなく彼女は達雄が悄しよんぼり然と見送つてくれたその同じ場所に立つた。

六月の光は相模灘に満ちていた。お種は岸を立去るに忍びないような気がした。夫と一緒に歩いた熱い砂を踏んで行くと、松並木がある、道がある、小高い崖がけを上つたところが例の一晚泊つた旅舎だ。

「オヤ、只ただいま今御帰りで御座いますか。大層御緩べつやくりで御座いますネ」

何事も知らない旅舎の亭主は、お種が昼飯ひるの仕度しどに寄つて種々いろいろなことを尋ねた時に、手を揉もんだ。

豊世や、森彦や、それから留守居している実の家族にも逢われることを楽しみにして、ま

だ明るいうちにお種は東京へ入った。

九

豊世が借りている二階はゴチャゴチャとした町中であつた。そこは狭い乾燥した往来を隔てて、唯規則正しく、趣味もなく造られた同じ型の商家が対^{むか}い合っているような場所である。豊世がこういう町中を舐^{えら}んだのは、通学の便利の為で、彼女は上京する間もなく簿記を修めることにしていた。そこへお種が尋ねて行つた。

姑^{しゅうとめ}と嫁とは窮屈な二階で一緒に成つた。階^{した}下に住む夫婦者は小売の店を出して、苦しい忙しい生活を営みつつある。しかし心易い人達ではあつた。

「何にしても、これはエライところだ」とお種はすこし落付いた後で言つた。「でも、豊世——伊東で寂しい思をしながら御馳走^{ごちそう}を食べるよりかも、ここでお前と一緒にパンでも咬^{かじ}る方が、どんなにか私は安気なよ」

伊豆の方で豊世が見た時よりも、余程姑^{ようす}の容子^{いらいら}に焦^{いら}々したところが少なく成つたように思われた。で、豊世もすこし安心して、自分の生家^{さと}——寺島の母親が丁度上京中である

ことを言出した。この母は療治に出て来て、病院の方に居るが、最早間もなく退院するであらうと話しかせた。

「あれ、そうかや」とお種は切ないという眼付をした。「私は寺島の母親さんには御目に掛れない」

「関わらないようなものですけれど……」と豊世は言ってみた。

「お前は関わらないと思つても、私が困る……第一、お前をこんな処に置いて、寺島の母親さんに御目に掛れた義理じゃない……」

その時、お種は自分の留守へ電報を打って寄したという人を想つてみた。無理にも豊世を引戻そうとした人を想つてみた。唯お種は面目ないばかりでは無かった。

「では、私はこうするで……暫時森彦の方へ頼んで置いて貰うで……それから復たお前と一緒に成らず。どうしても今度はお目に掛れない……そうだ、そうせまいか……お前もまた悪く思つてくれるなや」

と姑に言われて、豊世は反つて気の毒な思をした。彼女は何もかも打開けて、話す氣に成つた。

「母親さん、私も困りましたよ。寺島の母が着いた時は、真実に無いと言つても無い……」

…葉書一枚買うことも出来ませんでしたよ、母が、国へ安着の報知しらせを出しとくれ、ちよいとコマカイのが無いからお前の方で立替えといとくれッて、言いまして、それを買に行くことが出来ません。私がマゴマゴしていますと、お前は葉書を買う金銭おあしも無いのかッて、母は泣いて了しまいました……でも、その時百円出してくれました……それで、まあ漸やっと息を吐いたんですよ」

「それは困つたろうネ、私の方へも為替かわせが来なく成つた。ああ御金の送れないところを見ると、国でも動揺ごたごたしてるわい……しかしネ、豊世、ここで家の整理が付きさえすれば、お前を正太しょうたが困らすようなことは無いぞや……」

こういう話に成ると、お種は酷ひどく大ザツパな物の考えようをすることが有つた。往時むかしは橋本の家の経済まで薬方の衆が預つて、お種は奥を守りさえすれば好い人であつた。

翌日お種は森彦の宿の方へ移ることにした。聞いてみると、嫁の側にも落付いていることが出来なかつたのである。

彼方あちこち是方とお種は転々して歩いた。森彦の宿に二週間ばかり置いて貰つて、寺島の母が

国へ歸つた頃に、漸く嫁の方へ一緒に成ることが出来た。毎日々々雨の降つた揚句で、泥
かるみ 濘をこねて戻つて来ると、濡れた往来はところどころ乾きかけている。店頭の玻璃戸
 はマブしいほど光っている。薄暗い壁に添うて、樓梯を昇ると、二階の部屋の空気が穴
 の中のように蒸暑かつた。丁度豊世はまだ簿記の学校の方に居る時で、間に合せて集めら
 れた自炊の道具がお種の眼に映つた。衣紋竹に掛けてある着物ばかりは、室内の光景に
 不似合なものであつた……お種は、何処へ行つても、眞実に倚凭れるという柱も無く、
 眞実に眠られるという枕も無くなつた。

その日からお種は豊世と二人で、この二階に臥たり起きたりした。姑と嫁の間には今ま
 でに無い心が起つて来た。お種は、自分が夫から受けた深い苦痛を、豊世もまた自分の子
 から受けつつあることを知つた。自分の子が関係した女——それを豊世が何時の間にか嗅
ぎつ 付けていて、人知れずその為に苦みつつある様子を見ると、お種は若い時の自分を丁度眼
のまえ 前に見せつけられるような心地がした。

不思議にも、貞操の女の徳であるということを口の酸くなるほど父から教えられたお種
 には、夫と他の女との関係が一番煩く光つて見えた。で、お種は自分の経験から割出して、
 どうすれば男というものの機嫌が取れるか、どうすれば他の女が防げるか、そういう女と

しての魂胆を——彼女が考え得るかぎり——事細かに嫁の豊世に伝えようと思った。夏の夜の寝物語に、お種は姑として言えないようなことまで豊世に語り聞かせた。こんな風にして、姑と嫁との隔てが取れて来た。二人は親身の親子のように思つて来た。

ある日、豊世はお種に向つて、

「母親さん、今まで貴方には隠していましたが……真実ほんとうに父親おとつさんのことを言いましようか」

こう言出した。お種は嫁の顔をつくづくと眺ながめて、

「復た……母親さんを担かつごうなんでしょう……」

「いえ、真実に……」

「豊世や、お前は真実に言う気かや……待てよ、そんなこと言われただけでも私は身体がゾーとして来る……」

その時始めて、お種は夫の滞在ありか地を知った。支那へ、とばかり思っていた夫はさ程遠くは行っていないかった。国に居る頃から夫が馴染なじみの若い芸者、その人は新橋で請出うけだされて行って、今は夫と一緒に住むとのことであつた。

「大方、そんなことだらけと思つた」

とお種は苦笑に紛したが、心の中には更に種々な疑問を起した。

八月には、お種は東京で三吉を待受けた。この弟に逢われるばかりでなく、久し振りで姉弟や親戚のものが一つ処に集るということは、お種に取って嬉しかった。豊世もまだ逢つてみたことの無い叔父の噂をした。

「橋本さんは是方ですか」

店頭みせさきの玻璃戸に燈火あかりの映る頃、こう言つて訪ねて来たのは三吉であつた。丁度お種や豊世は買物を兼ねてぶらぶら町の方へ歩きに行つた留守の時で、二階を貸している内儀かみさんが出て挨拶あいさつした。

三吉は自分の旅舎やどやの方で姉を待つことにして、皆など一緒に落合おちあいたいと言出した。

「では、御待ち申していますから、明日の夕方からでも訪ねて来るように」こう内儀に言ことつて伝つてを頼んだ。

やがて三吉は自分の旅舎を指して引返して行つた。その夏、彼は妻の生家きとの方まで遠く行く積りで、名倉の両親を始め、多くの家族を訪ねようとして、序ついでに一寸東京へ立寄つ

たのであつた。

久し振で出て来た三吉は翌日一日宿に居て、親戚のものを待受けた。森彦は約束の間を違えずやつて来た。三吉はこの兄を二階の座敷へ案内した。そこに来ていたお雪の二番目の妹にあたるお愛にも逢わせた。

「名倉さんの？」と森彦は三吉の方を見て、「先に修業に来ていた娘はどうしたい」

「お福さんですか。あの人は卒業して帰りました。もう旦那さんが有ります」

「早いものだナ。若い人のズンズン成人するには魂消ちまう——兄貴の家の娘なども大きく成つた——そう言えば、俺の許のやつも、来年あたりは東京の学校へ入れてやらなきや成るまいテ」

水色のリボンで髪を束ねた若々しいお愛の容子を眺めながら、森彦は国の方に居る自分の娘達のことを思出していた。

「お愛さん、貴方はもう御帰りなさい。保証人の方へ廻つて、認印を貰つて行つたら可いでしょう」

と三吉に言われた、お愛は娘らしく顔を紅めて、学校の方へ帰る仕度をした。

間もなく三吉は兄と二人ぎりに成つた。森彦は夏羽織を脱いで、窓に近く胡坐をかいた。

達雄や実の噂が始まった。

「いや、エライことに成つて来た。四方八方に火が点いたから驚く」と森彦が言出した。三吉も膝を進めて、「しかし、橋本の方なぞは、一朝一夕に起つた出来事じゃないんでしようネ。私が橋本へ行つてた時分——あの頃のことを思うと、ナカナカ達雄さんも好く行つていましたツけがナア——非常な奮発で。それともあの頃が一番好い時代だったのかナア」

「なにしろ、お前、正太の婚礼に千五百両も掛けたとサ。そういうヤリカタで押して行つただ」

「姉さんなぞが又、どうしてそこへ気が着かずにいたものでしょう」

「そりや、心配は無論仕ていたろうサ。細君が帯を欲しいと言えば帯を買つてくれる、着物が欲しいと言えば着物を買つてくれる——亭主に弱点が有るからそういうことに成る。姉さんの方ではそうも思わないからネ。まあ、心配はしても、それほどは考えていなかつたろうサ」

好い加減にこういう話を切上げて、三吉はこの兄の直接関係したことを聞いてみようとした。達雄のことに就いて、尋ねたいことは種々あつた。先ず夕飯の仕度を宿へ頼んだ。

この町中にある旅舎やしやの二階からは、土蔵の壁、家の屋根、樹木の梢こすえなどしか見えなかった。しかし割合に静かな座敷で、兄弟が話をするには好かった。

「どうして達雄さんのような温厚おとなしい人に、あんな思い切ったことが言えたものかしらん」
こう森彦が言出した。「そりやお前、Mさんと俺とでわざわざ名古屋まで出張して、達雄さんの反省を促しに行つたことが有るサ」

「よくまた名古屋に居ることが分りましたネ」と三吉は茶を入れ替えて兄に勧めながら言つた。

「段々詮索せんさくしてみると、達雄さんが家を捨てて出るという時に、途中である銀行から金を引出して、それで芸者を身受けて連れて行つた。それが新橋の方に居た少婦おんなさ……その時Mさんが、どうしても橋本は名古屋に居るに相違ない。俺にも行け、一緒に探せという訳で、それから名古屋に宿をとつてみたが、さあ分らない。宿の内儀かみさんはやはりそれ者の果だ。仕方がないから、内儀に事情を話して、お前さんが探出したら礼をすると言つたところが、内儀は内儀だけに、考えた。なんでもそういう旦那には、なるべく早く金を費つかわして了うというのが、あの社会の法だとサ。では、十円出して下さい、私も身体が悪い

から保養を兼ねて心当りの温泉へ行つて見て来る、名古屋に二人が居るものなら必ずその温泉へ泊りに来る、こう内儀が言つて探しに行つてくれた。果して一週間ばかり経つと、直ぐ来いという電報だ。そこで俺が飛んで行つた。まだ蚊帳かやが釣つてあつて、一方に内儀、一方にMさん、とこう達雄さんを逃がさないように附いて寝ていた。達雄さんが俺の方を向いたその時の眼付というものは……」

森彦は何か鋭く自分の眼でも打つたという手付をして見せて、言葉が続けた。

「それから、Mさんと俺とで、懇々説いてみた。実に平素ふだんの達雄さんには言えないようなことを言つたよ——自分は何もかも捨てたものだ——妻があるとも思わんし、子があるとも思わん——後はどう成つても関かまわないうつて。最早もう仕方無い。その言葉を聞いて、吾儕われわれは別れた」

「エライ発ほっしん心の仕方をしたものだ。坊主にでも成ろうというところを、少婦おんなを連れて出て行くなんて」

と三吉は言つてみたが、曾かつて橋本の家の土蔵の二階で旧ふるい日記を読んだことのある彼には、この洒落しゃらくと放縦いろうどりとで無理に彩色してみせたような達雄の家出を想像し得るように思つた。いかに達雄が絶望し、狼狽ろうばいしたかは、三吉に悲惨かんじな感を与えた。

「あの時吾儕われわれの会見したことは、ちゃんと書面に製こしらえて、一通は記念の為に正太へ送つたし、一通は俺の許とこに保存してある」こう森彦は物のキマリでもつけたように言った。

「姉さんは委くわしいことを知っていましたようか」

「これがまた難物だデ。気でも違えられた日には大事おおごとだからネ。まあソロソロと耳に入れた。その為にああして長く伊東に置いて、なるべく是方こつちの話は聞かせないようにしたよ」その時下婢おんなが夕飯の膳を運んで来た。三吉は下婢を返して、兄弟ぎりで話しながら食うことにした。

「どれ御馳走に成ろうか」と森彦は性急な調子で言つて、箸はしを取上げた。「兄貴の家にも弱つたよ。ホラ、お前の許とこのお雪さんが先頃拝跪はみに来て、当分仕送りは出来ないツて断つたもんだから、俺の方でどうにかしてやらなくちゃ成らない……しかし、お前も御苦労だった。お互に長い間のことだから。加おまけに、各自家族めいめいを控えてると来てる」

「實際、私の方にも種々な事情が有りましてネ。学校の貧乏なところへもつて来て、町や郡からの補助は削けずられる、それでも教員の数は増ふさんけりや手が足りない。私も見かねて、俸給さを割くことにしました……まあ、当分補助は覚束おぼつかないものと思つて下さい……そのかわり橋本の姉さんは私の方へ引取りましよう。今度その積りで出て来ました」

「アア、そうか。そうして貰えると、姉さんの為にも好かろう」

こんな話をして、やがて食う物は食い、喋舌しゃべることは喋舌しゃべったという風に、森彦は脱いで置いた羽織を引掛けた。

「最早もう姉さんも見えそうなものだ」と三吉が言った。「夕飯でも済ましてから来ると見えるナ」

森彦は羽織ひもの紐を結びながら、「今夜は俺の許へ話に来る人が有る。一寸用がある。これで俺は失礼します。それじゃ御馳走に成りました」

「まあ、可いじや有りませんか。もう少し話して行ったら」

「いや、復またた逢えたら逢おう。名倉さんへも、皆さんに宜敷よろしく」

紳士風の夏帽子を手に持つて出て行く森彦を送つて、間もなく三吉は姉を迎えた。

お種は豊世を連れて三吉に逢いに来た。三吉とお種とは故郷の方で別れてから以来このかた、一度汽車の窓で顔を合せたぎりである。蔭ながら三吉も姉のことでは心配していたので、こうして逢つて見るまでは安心が出来なかつた。

三吉と豊世の間には初対面の挨拶などが交換された。

「もうすこし早く来ると、森彦さんとも一緒に成れた」と三吉が姉に言った。

「そうも思いましたがネ、あんまり多勢で押掛けても気の毒だと思って——」

「叔父さん、昨晩は失礼いたしました」

と豊世は「叔父さん」を珍しそうに言う。

「私達は今、面白い二階に居ますよ」とお種は女持の煙草入を取出しながら、「お前さんなぞが上って見ようものなら、驚く位だ。一つ部屋に、応接間もあれば、ランプ部屋もあれば、お勝手もある……蚊が出て困ると言つて、実の家から蚊帳を借りたは好かったが、釣つてみると部屋一ぱいサ。環を釘へ掛けても、まだダクンダクンしてる……笑つたにも何にも……」

「そういう思いもしてみるが好う御座んす——」と三吉が言った。

お種と豊世とは顔を見合せた。やがてお種は一服やつて、「私もネ、長いこと伊東の方に居ました。森彦の親切で、すっかり保養も出来たで……是頃お雪さんから手紙を下すつたように、もしお前さんの許で私を呼んでくれるなら、行つて子供の世話でも何でもしてやるわい」

「まあ、暫時しばらく私の方へ来ていて御覧なさい——姉さんには田舎いなかの方が静かで好いかも知れませんか——そのかわり、何にも御馳走は有りませんぜ」

「御馳走なぞが要いらずか。この節では、お前さん、一週間に一度ずつ森彦やじやの旅舎へ行つて、新聞を読んで、お風呂に入れて貰つて、夕飯を振舞つて貰つては歸つて来る。それより外に何にも楽しみが無い——私は今、そういう日を送つてる」

豊世は姑から細い銀の煙管きせるを借りて、前曲まえこみに煙草を燻ふかしてみながら、話を聞いている。

「伊東に居た時分も、お前さん、他の奥様よそなぞが橋本さんは御お羨うらやましい御身分だ、こうして毎日遊んでいらしても、御国からは御金を送つて来るなんて——他ひとは何事なんにも知りませんからね……」

こういうお種の調子には、存外沈着おちついたところが有るので、三吉も心配した程では無いと思つて来た。弟は話を進めようとしたが、それを言う前に、自分の方のことを持出した。学校の暑中休暇を機会として、名倉の家まで行く積りだと話した。

「先頃お雪さんが出ていらした節は、実の家の方で御一緒に成りました」とお種が言つた。

「私はネ、叔父さん」と豊世は引取って、

「このお宿でお雪叔母さんにお目に懸りました——森彦叔父さんと御一緒に伺って」

「これはお前より叔母さんの方に先に逢つてますよ」とお種は嫁の方を弟に指して見せた。豊世はこの始めて逢つた「叔父さん」という人にジロジロ見られるような気がして、姑の傍に小さく成つていた。

夏の日が暮れて、燈火^{あかり}は三人の顔に映つた。三吉は姉の容子^{ようす}を眺めながら、こう切出した。

「達雄さんも、名古屋の方だそうですね……」

「そうだそうな」

と答えるお種の顔には憂愁^{うれい}の色が有つた。それを彼女は苦^{にが}笑^{わらい}で紛わ^{まぎら}そうともしていった。

「何処^{どこ}も彼処^{かしこ}も後家さんばかりに成つちやつた」

「三吉——俺は未だ後家の積りじゃ無いぞい」と姉は口を尖^{とが}らした。

「積りでなくなつて、實際そうじや有りませんか」と弟は戯れるように。

「馬鹿こけ——」

お種は両手を膝ひざの上に置いて、弟の方を睨にらむ真似まねした。三吉も嘆息して、

「姉さん、旦那のことは最早思い切るが宜よう御座んすよ。だって、あんまりヤリカタが洒し落やれ過ぎてるじや有りませんか。私も森彦さんから聞きましたがネ、そんな人に尽したところで、無駄です——後家さんが可い、後家さんが可い」

「これ、お前さんのように……そう、後家、後家と言つて貰うまいぞや」

「馬鹿々々しい……亭主に好きそうな人が有つたら、私がまた姉さんに世話して進あげる」
不幸な姉を憐あわれむ心から、三吉はこんな串じょうだん談を言出した。お種はもうブルブル身からだを震ふるわせた。

「三吉、見やや、豊世が呆あきれたような顔をしてることを——お前さんがそんな悪い口にくを利きくもんだからサ——国に居る頃から、お前さん、お仙なぞが三吉叔父さん、三吉叔父さんと言つて、よく噂うわさをするもんだから、どんなにか好い叔父さんだろうと思つて豊世も逢いに来たところだ……」と言つて、お種は嫁の方を見て、「ナア、豊世——こんな叔父さんなら要いらんわい」

豊世は笑わずにいられなかった。

「しかし、串談はとにかく」と三吉は姉の方を見て、「後家さんというもののはそんなにイケナイものでしょうか」

「後家に成つて、何の好い事があらず」と姉は力を入れた。

「そりや、若くて後家さんに成るほど困ることは無いかも知れません。しかし、年をとつてからの後家さんはどうです。重荷を卸して、安心して世を送られるようなものじゃ有りますまいかね……人にもよるかも知れませんが、こう私は、姉さん位の年頃に成つて、子のことを考えて行かれる後家さんが一番好かろうと思うんですが……」

「まあ、女に成つてみよや」

と言つて、姉は取合わなかった。

その晩、お種は弟の宿に泊めて貰つて、久し振で一緒に話す積りであつた。やがて町の響も沈まつて聞える頃、お種は嫁に向つて、

「豊世、お前はもう歸らッせ」

「今夜は私も母親さんの側に泊めて頂きとう御座んすわ」と豊世が言つた。「何だか御話

が面白そうですから……」

姑の許を得て、豊世は自分の宿まで一旦断りに行って、それから復た引返して来た。三人同じ蚊帳の内に横に成つてからも、姉弟は話し続けた。お種は枕まくらもと許へ煙草盆を引寄せて、一服やつたが、自分で抑えることの出来ないほど興奮して来た。伊東に居た頃、よく彼女の瞑つむつた眼には一つの点が顕あらわれて、それがグルグル廻るうちに、次第に早くなつたり、大きく成つたりして見えた。お種は寝ながらそれを手真似でやって見せた。終しまには自分の身からだまでその中へ卷込まれて行くような、可おそ恐しい焦いら々した震え声と力とを出して形容した。

「ア——姉さんは未だ真実ほんに癒なおつていないんだナ」

と三吉は腹おなかの中で思った。それを側で聞くと、豊世も眠られなかった。

再会を約して置いて、翌朝よくあさお種は三吉に別れた。豊世も姑と一緒にこの旅舎を出た。

「——三吉の家まで行つて置けば、正太の許ところから迎をよこしてくれるたつて、造作なからず」

「ええ、三吉叔父さんの御宅までいらっしやれば、もう郷里へ帰ったも同じようなものですわ」

こんな言葉を換しながら、姑と嫁とは宿の方へ帰って行つた。

例の二階で、復た復たお種が旅仕度を始める頃は、やがて八月の末であつた。森彦の旅舎だの、直樹の家だの、方々へ暇乞いにも出掛けなければ成らぬ、と思うと、心はあわただしかった。

ジメジメと蒸暑い午後、一番後廻しにした実の留守宅に暇乞に寄る積りで、お種は宿を出た。橋本へ嫁いてから以来——指を折つて数える程しか彼女は自分の生家へも帰っていない。その中で、小泉の家が東京へ引越したばかりの頃、一度彼女は母と一緒に成つたことや、その時も夫がある女に関係して、その為に長年薬方を勤めた大番頭の一人が怒つて暇を取つたことや、その時こそは夫婦別をしようかとまで彼女も悲しく思つたことや、それからその時ぎり母にも逢えなかつたことなどを胸に浮べて行つた。

小泉の家も段々小さく成つた。ある狭い路地を入れて、溝板の上を踏んで行くと、そこには種々な生活を営む人達が一種の陰気な世界を形造っている。お種は薄暗い格子戸の前に立つた。

「誰方？」
どなた

こう若々しい声で言つて、内から顔を出したのは、お俊であつた。

「母親さん——橋本の伯母さんが被入しつてよ」
おば

と復た娘は奥の方へ声を掛けた。橋本の伯母と聞いて、お倉は古びた簾の影から這出した。毎年のようにお倉は脚氣を煩うので、その夏も臥たり起きたりして、二人の娘を相手に侘しい女暮しをしているのである。
わび

過去つた日を思わせるような、こういう住居に不似合なほど大きい長火鉢の側で、女同志は話した。
すまい

「三吉が来いと言つてくれるで、私も暫時彼の方へ行つて厄介に成るわいなし」とお種が言つた。
しばらくあれ

「そりや、まあ結構です——三吉さんは私共へも一寸寄つて下さいました」とお倉は寂しそうに笑いながら、「私がこんな幽霊のような頭髮をしていたもんですから、三吉さんも驚いて逃げて行つて了いました……」
あたま

「私でも、ドモナラン」

この「ドモナラン」は茶盆をそこへ取出したお俊を笑わせた。

「俊」とお倉は娘の方を見て、「貰ったお茶が有ったろう」

「母親さん、あのお茶は最早駄目よ」とお俊はすこし顔を紅くした。

「お倉さん、番茶で沢山です。そんなに関つて下さると、生家へ来たような気がしない……」とお種は快活らしく笑つて、

「そう言えば、三吉も可笑しなことを言う奴だテ。私が豊世を連れて彼の宿まで逢いに行きましたら、何をまた彼が言出すかと思うと、何処も彼処も後家さんばかりに成つちやつた——なんて。私は怒つてやつた」

「真実に、皆な後家さんのようなものですよ——でも、姉さんなぞは未だ好う御座んすサ。私を御覧なさいな。私くらい運の悪い者は無い——私は小泉へお嫁に來ましてから、旦那と一緒に暮したなんてことは、貴方の三分一も有りやしません——留守、留守で、そんなことばかりしてゐるうちに一生済んでしまいました」

染めずにいるお倉の髪は最早老婦のように白い。

不幸だ、不幸だと言いながら気の長いお倉の様子は、余計にお種をセカセカさせた。

お種は自分の生家さとを探すような眼付をして、四辺あたりを眺め廻した。実は留守、お杉は亡くなる、宗蔵は他よそへ預けられている、よく出入した稲垣いながき夫婦なぞも遠く成った。僅かわずに兄弟の力を頼りに細々と煙を立てる有様である。二間ばかりある住居で、日も碌ろくに映あたたなかつた。それに、幾度か引越した揚句あげくのことで、ずっと昔の生家を思出させるような物は殆んどお種の眼に映らない。唯、奥の方の壁に、父の遺筆が紙表具の軸に成って掛っている。そこには、未だそれでも忠寛の精神が残っていて、廃すたれ行く小泉の家に対するかのような
ある……

こういう衰えた空気の中でも、お俊はズンズン成長した。高等女学校程度を卒おえる程の年頃に成った。

「御蔭様で、俊も、学校の方の成績は始終優等だもんですから、校長先生も大層肩を入れて下さいましてネ」と言つて、お倉は娘の方を見て、「お前の描いた画を持って来て、伯母さんにお目にお掛けな」

お俊は幾枚かの模写をそこへ取出して来て、見せた。この娘は自分で模様を描いた帯を
ズ《しめ》ていた。

「漸ようやくこういう色彩いろの入ったものを許されました」とお倉は娘の画をお種に指して見せて、

「三吉さんが、画や歌のお稽古^{けいこ}は止めて学校だけにさしたら可からう——なんて言うんですけれど、折角今までやりましたものですから、せめて画の先生だけへは通わせたいと思いますんですよ。俊も好きですから……」

「そうですとも。ここで止めさせるのは惜しいものだ」とお種が言った。

「私もネ、何を儉約^{けんやく}しても斯娘^{これ}には掛^かけたいと思ひまして……どうして、貴方、この節では母親^{おつか}さんの言うことなぞを聞きやしません。何ぞと言うと私の方がやりこめられる位です」

「教育が違いますからネ」

「ええええ、私共の若い時などは、今のように学校が有るじやなし……」

「鶴は？」とお種はお俊の妹のことを聞いてみた。

「御友達^{とも}の許^{とこ}へでも遊びに行つたんでしよう」とお俊が答える。

「俊、鶴^{つう}ちゃんの免状は何処にあつたつけねえ。伯母さんにお目に掛けたら……まあ、あの娘^こも学校が好きでして、試験と言えは賞を頂いて参ります」

こんな話をしながら、お倉は吸付けた長煙管の口を一寸袖で拭^ふいて、款待^{もてなし}顔^がにお種の方へ出した。狭い廂間^{ひあわい}から射し入る光は、窓の外を明るくした。簾^{すだれ}越しに隣の下駄職^{げたしよく}

の勞苦する光景も見える。溝の蒸されるにおいもして来る。

母に言付けられて、お俊は次の間に置いてある桐の机の方へ行つた。実の使用つていた机だ。その抽匣の中から、最近に來た父の手紙を取出した。

お倉は鼠色の封筒に入つた獄中の消息をお種に見せて、声を低くした。「ここにも御座います通り、橋本さんへも宜敷申すようにツて」

「実は何事も外部のことを知らずにいるんでしようよ」とお種は嘆息した。

暫時女同志は無言でいた。お倉は聞いて貰う積りで、

「なにしろ、貴方、長い間の留守ですから、私も途方に暮れて了いましたよ……こんな町中に住まわないたつて、もつと御屋賃の御廉い処へ引越したら可からうなんて、三吉さんもそう言いますんですけれど、ここの家に在る道具は皆な、貴方差押……娘達を學校へ通わせるたつて、あんまり便利の悪い処じゃ困りますし……それに、私共の借財というのが……」

次第に掻口説くような調子を帯びた。お倉の癖で、枝に枝がさして、終には肝心の言お

うとすることが対手^{あいて}に分らないほど混雑^{こんがら}かつて来た。

「あれで、森彦も自分の事業の方の話は何事^{なんに}もしない男ですが——」とお種はお倉の話を遮^{さえぎ}った。「貴方^{あなた}の方に、郷里^{くに}に、自分の旅舎^{やどや}じや……どうしてナカナカ骨が折れる。考えてみると、よく彼^{あれ}もやったものです」

「真実^{ほんと}に、森彦さんには御氣の毒で」

「彼の旅舎へ行つてみますとネ、それはキマリの好いものですよ。酒を飲むじやなし、煙草を燻^{ふか}すじやなし……よくあ自分が責められたものだと思って、私は何時でも感心して見て来る。何卒^{どうか}して彼の思うことも遂げさして遣りたいものですよ」

身内のものの噂は自然と宗藏のことに移った。

「宗さんですか」とお倉はさもさも厄介なという風に、「世話してくれてる人がよく来て話します。まあ心^{しん}はどれ程御強健^{ごじょうけん}なものか知れませんなんて……こういう中でも、貴方、月々送るものは送らなけりや成りません。森彦さんも御大抵じや有りませんサ」

「彼は小泉の家に附いた厄介者です。どうしてまたあんな者が出来たのですかサ」

「もう少し病人らしくしていると可いんですけれど、我^{わがまま}儘なんですからねえ——森彦さんはああいう氣象でしょう、真実^{ほんと}に宗藏のような奴は……^{けだもの}獣ででもあろうものなら、踏殺

してきたいなんて……」

お倉やお種が笑えば、お俊も随ついて笑った。この謔じょうだん語は、森彦でなければ言えないからであつた。

やがて別れる時が来た。

「三吉さんの許ところへいらつしやいましたら、俊や鶴のことを宜敷よろしく御願ごい申しますツて、そう仰おつて下さい……何卒どうか……」

こう力を入れて頼むお倉の言葉を聞て、お種は小泉の家を出た。

東京を発たつ朝は、お種は豊世やお俊やお鶴などに見送られた。豊世は幾度か汽車の窓の下へ来て、涙ぐんだ眼で姑の方を見た。

十

一年余旅の状ありさま態ようやを續けて、漸くお種は弟の家まで辿たどり着いた。三吉は遠く名倉の方から歸つて来て、お雪と共に姉を待受けているところであつた。

「オオ、橋本の姉さん——」

とお雪は台所から飛んで出て来て、櫓たすきを除しながら迎えた。

奥の部屋へ案内されたお種の周囲まわりには、三吉夫婦を始め、子供等がめずらしそうに集つた。お種は、狹隘せせこましい都会の中央まんなかから、水車の音の聞えるような処へ移つて、弟等と一緒に成れたことを喜んだ。彼女は別に汽車にも酔わなかつたと言つた。

「房ちゃん、橋本の伯母さんだが、覚えているかい」と三吉は年長うえの娘に尋た。

「一度汽車の窓で逢あつたぎりじや、よく覚えが有るまいテ」と言つて、お種はお房の顔を眺ながめて、「どうだ、伯母さんのような氣がするか」

「皆な大きくなりましたらう」

「菊ちゃんきくの大きく成つたには魂消たまげた。姉さんの方と幾許いくらも違わない」

お種はそこに並んでいる二人の娘を見比べた。

「へえ、こういうのが今年出来ました。見て下さい」とお雪は次の部屋に寝かしてあつた乳呑児ちのみこを抱いて来て見せた。

三番目もやはり女の児で、お繁しげと言つた。お繁は見慣れない伯母を恐れて、母の懷ふところへ顔を隠したが、やがてシクシクやり出した。お雪は笑つて乳房を咬くえさせる。すこし慣れるまで、他よその方を向いていようななどと言つて、お種も笑つた。

「房ちゃんは幾歳いくつに成るの？」とお種が手土産てみやげを取出しながら聞いた。

「伯母さんが何歳に成るッて」とお雪も言葉を添える。

「ね、房ちゃんがこれだけで、菊ちゃんがこれだけ」とお房は小さな掌てを展ひろげて、指を折つて見せた。

「フウン——お前さんが五歳いつつで、菊ちゃんが三歳みつ——そう御惻好おりこうじゃ、御褒美ごほうびを出さずば成るまい——菊ちゃんにも御土産おみやげが有りますよ」

「御土産！ 御土産！」

と二人の子供は喜んで、踊つて歩いた。

「御行儀を好くしないと伯母さんに笑われますよ。真実ほんとにイタズラで仕方が有りません」とお雪が言つた。

親達の側にばかり寄つていたお房は、直に伯母の方に行つた。そして、母に勧められて、無邪気な「亀さん」の歌などを聞かせた。

お房の小供らしい声には、聞いている伯母に取つて、幼い時分のことまでも思わせるようなものが有つた。

「これはウマいもんだ」とお種は左右に首を振つた。「もう一つ伯母さんに歌つて聞かせ

とくれ……何年振で伯母さんはそういう声を聞くか知れない……」

始めて弟の家を見るお種には、草^{わらぶき}の屋根の下もめずらしかった。お種はお雪に附いて、裏^{はたけ}の畠^{はたけ}の方まで見て廻^まつて、復^{また}た三吉の居る部屋へ戻^{かへ}つて来た。

「オオ、ほんに、柿の樹が有るそうな」とお種は身を曲^こめて、庭の隅^{すみ}に垂^たる枝ぶりを眺^{なが}めながら、「嘉助がよく御厄介に成ったもんですから、帰^{かへ}つて来てはその話サ——柿だの、李^{すもも}だの、それから好い躑^{つづし}躑^{つづし}だのが植^うえてあるぞなしツて」

庭には桜、石^{しやくなげ}南花なども有^あつた。林檎^{りんご}は軒^{のき}先に近くて、その葉の影が部屋から外^{そと}部^ぶを静かにして見せた。

お雪は乳呑児を抱いて来た。「先^{さつ}刻^き泣いたかと思うと、最^も早^うこんな笑っています」

「ホ、御機嫌^{ごきげん}が直^{ただ}つたそうな」とお種はアヤして見せて、「これは好い児だ」

「私共のようにこう多勢でも困りますけれど、貴方^{あなた}の許^{ところ}でも御一人位……」

「どうも豊世には子供が無さそうですテ……」

「真^{ほん}実^とに、分けて進^あげたい位だ」と三吉が笑った。

「くれるなら貰うわい」とお種は串談じようたんのように言つて、「しかしこれは皆な持つて生れて来るものだゲナ。持つて生れて来ただけは産む……そういうように身体そなに具わつてゐるものと見えるテ——授からん者は仕方ない」

「なにしろ、私のところなぞは書生ばかりで始めた家でしょう——」と三吉は言つた。

「菊ちゃんが出来て、私が房ちゃんを抱いて寝なければ成らない時分は、一番困りましたネ……どうしても母親でなけりや承知しない……寒い晩に、子供は泣通し……こんなに子供を育てるのは厄介なものかしらんと思つて、實際私も泣きたい位でした」

「皆なそうして育つて来たのだわい」

「よく書生時代には、男が家を持つた為にへコんで了しまうなんて、そんな意気地の無いことがあるもんか、と思ひましたツけが——考えてみると、多くの方がへコむ訳ですネ」

「お雪さん、貴方は今女中無しか」

「ええ、幸い好いのが見つかったかと思ひましたら、養蚕をする間、親の方で帰してくれつて」

「どうして、それじゃナカナカ骨が折れる」と言つて、お種は家の内を眺め廻して、「しかし、お雪さん、私も御手伝いますよ。今日からは貴方の家の人と思つて下さいよ」

何となくお種は興奮おきしていて、時々自分で制えよう制えようとするらしいところがある。顔色もいくらか蒼あおざめて見える。三吉は姉を休ませたいと思った。

「菊ちゃん、来うや」

こう訛なまりのある、田舎娘らしい調子で言つて、お房は妹と一緒に裏の方から入つて来た。

「母さん」

お房は垣根の外で呼んだ。お菊も伯母の背中に負おぶさりながら、一緒に成つて呼んだ。子供は伯母に連れられて、町の方から歸つてきた。お種が着いた翌日の夕方のことである。

「オヤ、お提ちようちん燈を買つて頂いて——好いこと」お雪は南向の濡縁ぬれえんのところに立つていた。

「一寸ちよつとそこまで町を見に行つて参りました」とお種は垣根の外から声を掛けた。お房は酸漿ほおずき提燈ちようちんを手にして、先まず家へ入った。つづいて伯母も入つて、そこへお菊を卸した。喜び騒ぐ二人の子供から、お雪は提燈を受取つて、火を点とほした。それを各自めいめいに持たせた。

「菊ちゃん、そんなに振つてはいけませんよ——これは蠟燭ろうそくがすこし長過ぎる」とお種が言つた。

「紅あかい紅い」とお雪はお繁を抱いて見せた。

「どれ、父さんの許へ行つて見せて来ましょう」

こう言いながら、お種は子供を連れて、奥の方へ行つた。

「父さん、お提燈」

とお房がさしつけて見せる。丁度三吉も一服やっているとところであつた。

「へえ、好いのを買つて頂いたネ」

と父に言われて、子供は彼方あちこち是方と紅い火を持つて廻つた。

「私もここで一服頂かずか」とお種は三吉の前に坐つた。「こういう子供の騒ぐ中で、よくそれでも仕事が出来たものだ……真実ほんとに、子供が有ると無いじゃ家の内が大違いだ……」
何かにつけて、お種の話は夫の噂うわさに落ちて行つた。何故、達雄が妻子を捨てたかという疑問は、絶えず彼女の胸を離れなかつた。

「妙なものだテ」とお種は思出したように、「旦那が未だ郷里くにの方に居る時分——まあ、唐突だしぬけと言つても唐突に、ふいとこんなことを言出した。お種、お前を捨てるようなこと

は決して無いで、安心しておれやツて。それが、お前さん、夢にも私はそんなことを思ったことの無い時だぞや。それを聞いた時は、私はびくツとした……」

「姉さん、そういう時分に家の方のことが幾分いくぶんか解りそうなものでしたネ」

「解るものかよ。朝から晩まで、御客、御客で。それ酒を出せ、肴さかなを出せ、出さなければ、また旦那が怒るんだもの。もうお前さん、ゴテゴテしていて、そんなことを聞く暇もあらずか」

「私が姉さんの許へ行つた時分は、達雄さんも勉強でしたがナア」

「あの調子で行つてくれると、誠に好かつた。直に物に飽きるから困る。飽きが来ると、復た病気が起る——旦那の癖なんですからネ」

「それはそうと、達雄さんも今どうしていきましょう」

「どうしていることやら……」

「やはりその女と一緒にしようか」

「どうせ、お前さん長持ちがせすか——御金が無くなつて御覧なさい。何時いつまでそんな女が旦那々と立てて置くもんですかね……今度は自分が捨てられる番だ……そりやあもう、眼に見えてる……」

「先ずそういうことに成つて行きそうですナ」

「そこですよ、私が心配して遣^やるのは。旦那もネ、橋本の家で生れた人ですから、何卒^{どうか}して私は……あの家で死なして遣りたくてサ」

喧嘩^{けんか}でもしたか、子供が泣出した。お種は三吉の傍を離れて、子供の方へ行つた。

幼い子供達は間もなくお種に取つて、離れがたいほど可愛いものと成つた。肩へ捉^{つか}まらせるやら、萎^{しな}びた乳房^{なぶ}を弄^ならせるやら、そんな風にして付纏^{つきまと}われるうちにも、何となくお種は女らしい満足を感じた。夫に捨てられた悲哀^{かなしみ}も、いくらか慰められて行つた。

炉辺に近い食卓の前には、お房とお菊とが並んで坐つた。伯母は二人に麦香煎^{むぎこがし}を宛行^{あてが}つた。お房は附木^{つけぎ}で甘そうに嘗^なめたが妹の方はどうかすると茶碗^{ちやわん}を傾^{かし}げた。

「菊ちゃん、お出し」と言つて、お種は妹^{いもうと}娘^{むすめ}の分だけ湯に溶かして、「どれ、着物^{おべべ}がババく成ると不可^{いけな}いから、伯母さんが養つて進^あげる」

子供にアーンと口を開かせる積りで、思わず伯母は自分の口を開いた。

「ああ、オイシかった」とお房は香煎^{こがし}の附いた口端を舐め廻した。

「房ちゃんも菊ちゃんも頂いて了つたら、すこし裏の方へ行つて遊んで来るんですよ。母さんが何していらつしやるか、見てお出なさい——母さんは御洗濯かな」

「伯母さん、復た遊びましょう」とお房が言つた。

「ええ、後で」とお種は笑つて見せた。「伯母さんは父さんの許で御話して来るで——」子供は出て行つた。

三吉はその年の春頃から長い骨の折れる仕事を思立つていた。学校の余暇には、裏の畠へも出ないで、机に向つていた。好きな野菜も、稀に学校の小使がたま鰯を担いで見廻りに来るに任せてある。

「三吉さん、御仕事ですか」とお種は煙草入を持って、奥の部屋へ行つた。彼女は弟の仕事の邪魔をしても気の毒だという様子をした。

「まあ、御話しなさい」

こう答えて、弟は姉の方へ向いた。丁度お種も女の役の済むという年頃で、多差はずかしい娘の時に差して来た潮が最早身体から引去りつつある。彼女は若い時のような忍耐力こらえじようがなくなつた。心細くばかりあつた。

「妙なものだデ」とお種が言出した。この「妙なものだデ」は弟を笑わせた。その前置を

言出すと、必^{きつ}とお種は夫の噂を始めるから。

「旦那も来年は五十ですよ。その年に成つても、未だそんな氣でいるとは。実に、ナサケないじゃ有りませんか……男というものは可^{おそろ}恐しいものですネ……私が旦那の御酒に對^{あいて}手でもして、歌の一つも歌うような女だったら好いのかも知れないけれど——三吉さん、時々私はそんな風に思うことも有りますよ」

苦^{にが}笑^{わらい}したお種の頬^ほには、涙が流れて来た。その時彼女は達雄が若い時に秀才^{うた}と謳^{うた}われたことや、国を出て夫が遊学する間彼女は家を預ったことや、その頃から最早夫の病氣の始まつたことなどを弟に語り聞せた。

「ある時なぞも——それは旦那が東京を引揚げてからのことですよ——復た病氣が起つたと思ひましたから、私が旦那の氣を引いて見ました。『むむ、あの女か——あんな女は仕方が無い』なんて酷^{ひど}く譏^{けな}すじや有りませんか。どうでしょう、三吉さん、最早旦那が關係していたんですよ。女は旦那の種を宿しました。その時、私もネ、寧^{いっ}そその児を引取つて自分の子にして育てようかしら、と思つたり、ある時は又、みすみす私が傍に附いていながら、そんな女に子供まで出来たと言われては、世間へ恥かしい、いかに言つてもナサケないことだ、と考へたりしたんです。間もなく女は旦那の児を産落しました。月不足^{つきたらず}で

加に乳が無かつたもんですから、満二月とはその児も生きていなかったそうですよ——しかし、旦那も正直な人サ——それは気分が優しいなんて——自分が悪かつたと思うと、私の前へ手を突いて平謝りに謝る。私は腹が立つどころか、それを見るともう気の毒に成つてサ……ですから、今度だつても旦那が思い直して下さりさえすれば……ええええ、私は何処までも旦那を信じているんですよ。豊世とも話したことですガネ。私達の誠意が届いたら、必と阿父さんは帰つて来て下さるだろうよつて……」

「伯母さん、お化粧するの？」とお房は伯母の側へ来て覗いた。

「伯母さんだつて、お化粧するわい——女で、お前さん、お化粧しないような者があらずか」

お雪や子供と一緒に町の湯から帰つて来たお種は、自分の柳行李の置いてある部屋へ入つて、身じまいする道具を展げた。そこは以前書生の居た静かな部屋で、どうかすると三吉が仕事を持込むこともある。家中で一番引隠れた場処である。お種が大事にして旅へ持つて来た鏡は、可成大きな、厚手の玻璃であつた。それに対して、サツパリと汗不知

でも附けようとすると、往時むかし小泉の老祖母が六十余に成るまで身だしなみを忘れずに、毎日薄化粧したことなどが、昔風の婦人おんなの手本としてお種の胸に浮んだ。年のいけない芸者風情ふぜいに大切な夫を奪去られたか……そんな遺瀬やるせないような心も起った。残酷なほど正直な鏡の中には、最早凋落ちようらくし尽くした女が映っていた。肉が衰えては、節操みさおも無意味で有るかのように……

頬の紅いお房の笑顔が、伯母の背後うしろから、鏡の中へ入って来た。

「房ちゃん、お前さんにもお化粧つくりして進あげましょう——オオ、オオ、お湯ぶうに入いって好い色に成なった」

と言われて、お房は日に焼けた子供らしい顔を伯母の方へ突出した。

やがてお種はお房を連れて、お雪の居る方へ行いった。お雪も自分で束髪を直していると
ころでああった。

「母さん」とお房は真白に塗られた頬を寄せて見せる。

「へえ、母さん、見てやって下さい——こんなに奇麗に成りましたよ」とお種が笑わった。

「まあ……」とお雪も笑わずにいらいれなかつた。「房ちゃんは色が黒いから、真実ほんとに可笑おかしい」

暫時^{しばらく}、お種はそこに立って、お雪の方を眺めていたが、終に堪え切れなくなったという風で、こう言出した。

「お雪さん、そんな田舎臭い束髪を……どれ、貸して見させ……私は豊世のを見て来たで、一つ東京風に結ってみて進^あげるに」

お房は大きな口を開きながら、家の中を歌って歩いた。

南の障子に近いところは、お雪が針仕事を展げる場所である。お種はお雪と相^{さしむかい}対に坐つて、余念もなく秋の仕度の手伝いをした。障子の側は明るくて、物を解いたり縫ったりするに好かった。

「菊ちゃん、伯母さんにその写真を見せとくれ——伯母さんは未だよく拝見しないのが有った」

お種は子供が取出した幾枚かの写真を受取った。お雪が生家^{さと}の方の人達の面影^{おもかげ}は順々に出て来た。

「お雪さん」とお種は勉の写真を取上げて、「この方がお福さんの旦那さんですか」

「ええ」

「三吉も、彼方あちらで皆さんに御目に掛つて来たそうですが……やはりこの方は名倉さんの御養子の訳ですネ。商人は何処どこか商人らしく撮とれてますこと」

こう言つてお種は眺めた。

「菊ちゃん、そんなに写真を玩具おもちゃにするんじや有りませんよ」

と母に叱られても、子供は聞入れなかつた。お種は針仕事を一切ひときりにして、前掛を払いながら起たちあが立たつた。

「さあ、房ちゃんも菊ちゃんも、伯母さんと一緒にいらつしやい——復た御城跡の方へ行つて見て来ましょう」

お種は帯を《しめ》直して、二人の子供を連れて出て行つた。お雪の側には、そこに寝かしてあつたお繁だけ残つた。部屋の障子の開いたところから、何となく秋めいた空が見える。白いちぎれちぎれの雲が風に送られて通る。

「姉さんは？」と三吉が学校から歸つて来て聞いた。

「散歩がてらオバコの実を採りにいらつしやいました——子供を連れて」

「そんな物をどうするんかネ」

「髪の薬に成さるとかッて——煎せんじて附けると、光沢つやが出るんだそうです——なんでも、伊東の方で聞いてらしたんでしよう」

三吉は小倉の行燈袴あんどんばかまを脱捨てて、濡縁ぬれえんのところへ足を投出した。

「それはそうと、姉さんは木曾きその方へ子供を一人連れて行きたがつてるんだが——どうだね、繁ちゃんを遣やることにしては」

こんなことを夫が言出した。お雪は答えなかった。

「こう多勢じややりキレない」と言つて三吉はお繁の寝ている様子を眺めて、「姉さんに一人連れてつて貰えば、吾われわれ儕われの方でも大に助かるじゃないか……しきりに姉さんがそう言うんだ……」

「そんなことが出来るもんですか」とお雪は言葉に力を入れた。

三吉は嘆息して、「姉さんだつても寂しいんだろうサ……そりや、お前、正太さんには子供が無いから、あるいは長く傍に置きたいと言うかも知れないし、くれろと言うかも知れない。その時はその時サ。当分姉さんが繁ちゃんを借りて行つて、育てて見たいと言うんだ。どうだね、お前は——俺おれは一人位貸して遣つても可いと思うんだが」

「貴方は遣る気でも、私は遣りません——そんなことが出来るか出来ないか考えてみて下

さい——」

「預けたって、お前、別に心配なことは無いぜ。姉さんのことだから必^{きつ}と大切にしてくれ
る」

「姉さんが何と仰^{おつしや}つても——繁ちゃん是我的児です——」

姉が末の子供を郷里の方へ連れて行きたいという話は、三吉の方にあつた。お雪は聞入
れようとしなかつた。

秋も深く成つて、三吉の家ではめずらしく訪ねて来た正太を迎えた。正太は一寸上京し
た帰りがけに、汽車の順路を山の上の方へ取つて、一夜を叔父^{すまい}の寓居^{すまい}で送ろうとして立寄
つたのであつた。

奥の部屋では客と主人の混^{まぎ}り合つた笑声が起つた。お種は台所の方へ行つたり、吾子^{わがこ}の
側へ行つたりして、一つ処に沈^{おちつ}着いていられないほど元氣づいた。

「正太や——お前は母親^{おつか}さんを連れてつてくれられる人かや」

「いや、今度は途中で用^{ようたし}達の都合も有りますからネ——母親さんの御迎には、いずれ近

うちに嘉助をよこす積りです」

「そんなら、それで可いが、一寸お前の都合を聞いて見たのさ。何も今度に限ったことは無いで……」

三吉を前に置いて、橋本親子はこんな言葉^{かわ}を換^{ようや}した。漸^{ようや}くお種は帰郷の日が近づいたことを知^{よろこび}った。その喜^{よろこび}悦^びを持つて、復たお雪の方へ行^はった。

三吉と正太とは久し振で話した。この二人が木曾以来一度一緒に成^なったのは、達雄の家を出^でしたという後であつた。顔を合^あせる度に、二人は種^{さまざま}々な感^{かん}に打^うたれた。でも、正太は元気で、父の失敗を双肩^にに荷^おおうとする程の意気^い込^こを見せていた。

「正太さん。姉さんも余程沈^{おちつ}着^ちいて来^きましたろう。僕の家へ来^きたばかりの時分はどうも未だ調子が本^{ほん}当^{だう}で無^なかつた——僕が姉さんに、郷^く里^にへ帰^{かえ}ったら草鞋^{わらじ}でも穿^はいて、薬^{くすり}を売^うりに御出掛^{ごしゅっけ}なさいなんて、そんな串^{じやうだん}談^{だん}を言^いつてるところです」

「そういう気分^{きぶん}に成^なれると可^いいんですけれど……然^{しか}し、最早^{さい}連^{れん}れて帰^{かえ}つても大丈夫^{だいじゆう}でしよう。母親^{ぼてん}さんが家^{いへ}へ行^いつて見^みたら、定め^{さだめ}し驚^{おどろ}くことでしょうナア。なにしろ、私も手^ての着^きけようが有^ありませんから、一切^{いっけつ}を挙^あげ皆^{みな}さんに宜^{よろ}敷^{しく}頼^{たの}む、持^もつて行^いきたい物^{もの}は持^もつておいでなさい——何もかもそこへ投^な出^だして了^{しま}つたんです」

「その決心は容易でなかったろうネ」

「ところが、叔父さん、その為に漸く家の整理ができました。そりやあもう、襖ふすまに張つてある短冊たんぱくまで引剥ひっぱがして了つたんですからネ……そういう中でも、豊世の物だけは、一品だつて私が手を触れさせやしません……まあ、母親さんが居なくて、反かえつて好かつた。あれで母親さんが居ようものなら、それほどの決断には出られなかつたかも知れません。田舎はそこへ行くと難ありがたいもので、橋本の家形も崩さずに遣つて行かれる。薬は依然として売れてる——最早嘉助の時代でも有りませんから、店の方は若い者に任せましてネ、私は私で東京の方へ出ようと思つています。これからは私の奮発一つです」

「へえ、正太さんも東京の方へ……実は僕も今の仕事を持つて、ここを引揚げる積りなんですが……」

「私の方が多分叔父さんよりは先へ出ることに成りましょう」

「随分僕も長いこと田舎で暮しました」

「お仙はどうしたかいナア」と不幸な娘のことまで委くわしく聞きたがる母親を残して置いて、

翌日正太は叔父の許を發つて行つた。

そろそろお種も夫の居ない家の方へ帰る仕度を始めた。達雄が残して行つた部屋——着物——寢床——お種の想像に上るものは、そういう可恐しいような、可懐しいようなものばかりで有つた。

「三吉さん——私もネ、今度は豊世の生家へ寄つて行く積りですよ。寺島の母親さんにも御目に掛つて、よく御話したら、必と私の心地を汲んで下さるだろうと思いますよ」隣室に仕事をしている弟の方へ話し掛けながら、お種は自分の行李を取出した。彼女はお雪と夏物の交換などをした。

やがて迎の嘉助が郷里の方から出て来た。この大番頭も、急に年をとつたように見えた。植物の好きなお種は、弟がある牧場の方から採つて来たという谷の百合、それから城跡で見つけた黄な花の咲く野菊の根などを記念に携えて、弟の家族に別れを告げた。お種は自分の家を見るに堪えないような眼付をして、供の嘉助と一緒に、帰郷の旅に上つた。

翌年の三月には、いよいよ三吉もこの長く住慣れた土地を離れて、東京の方へ引移ろうと思う人であつた。種々な困難は彼の前に横たわつていた。一方には学校を控えていたから、思うように仕事も進捗しなかつた。全く教師を辞めて、専心労作するとしても、

猶^{なほ}一年程は要^かる。彼は既に三人の女の児の親である。その間、妻子を養うだけのものは是非とも用意して掛らなければ成らなかつた。

とにかく、三吉は長い仕事を持つて、山を下りようと決心した。

「オイ、洋服を出しとくれ」

とある日、三吉は妻に言付けた。三吉はある一人の友達を訪ねようとした。引越の仕度をするよりも何よりも、先^まず友達の助力を得たいと思つたのである。

寒^さそうな馬車の喇叭^{らっぱ}が停^ス車場^{テーション}寄^ヨの往来の方で起つた。その日は三吉と同行を約束した人も有つたが、途中の激寒を懼^{おそ}れて見合せた位である。三吉は外^{がい}套^{とう}の襟^{えり}で耳を包んで、心配らしい眼付をしながら家を出た。白い鼻息をフウフウいわせるような馬が、客を乗せた車を引いて、坂道を上つて来た。三吉はある町の角で待合せて乗つた。

雪はまだ深く地にあつた。馬車が浅間^{ふもと}の麓^{ふもと}を廻るにつれて、乗客は互に膝^{ひざ}を突合せて震えた。二里ばかり乗つた。馬車を下りて、それから猶^{なほ}山深く入る前に、三吉はある休茶屋^{ろばた}の炉^{ろばた}辺で凍えた身体^{からだ}を温めずにはいられなかつた。一里半ばかりの間、往来する人も稀^{まれ}だ

つた。谷々の氾濫はんらんした跡は真白に覆おほわれていた。

訪ねて行つた友達は牧野と言つて、辺鄙へんぴな山村に住んでいた。ふとしたことから三吉はこの若い大地主と深く知るようになつたのである。そこへ訪ねて行く度に、この友達の静かな書齋や、樹木の多い庭園や、好く整理された耕地など——それを見るのを三吉は楽しみにしていたが、その日に限つては心も沈着かなかつた。主人を始め細君や子供まで集つて、広い古風な奥座敷で話した。この温い家庭の空気の中で、唯三吉は前途のことを思い煩わづらつた。事情を打明けて、話してみようと思ひながら、翌日に成つてもついでそれを言出す場合が見当らなかつた。

到頭、三吉は言わず仕舞に牧野の家の門を出た。そして、制おさえがたい落胆と戦いつつ、元來た雪道を歸つて行つた。一時間あまり乗合馬車の立場たてばで待つたが、そこには車夫が多勢集つて話したり笑つたりしていた。思はず三吉も喪心した人のように笑つた。やがて馬車が出た。沈んだ日光は寒い車の上から彼の眼に映つた。林の間は黄かがやに耀いた。彼は眺め、かつ震えた。

家へ歸つてからも、三吉はそう委くしいことを家のものに話して聞かせなかつた。末の子供は炬燵こたつへ寄せて寝かしてあつた。曆や錦絵を貼はり付けた古壁の側には、お房とお菊とお

手玉の音をさせながら遊んでいた。そこいらには、首のちぎれた人形も投出してあった。三吉は炬燵にあたりながら、姉妹の子供を眺めて、どうして自分の仕事を完成しよう、どうしてその間この子供等を養おうと思った。

お房は——三吉の母に肖て——頬の紅い、快活な性質の娘であった。丁度牧野から子供へと言つて貰つて来た葡萄^{ぶどう}ジャムの土産があつた。それをお雪が取出した。お雪は雛^{ひな}でも養うように、二人の子供を前に置いて、そのジャムを嘗^なめさせるやら、菓子麵包^{かしパン}につけて分けてくれるやらしした。

三吉がどういふ心の有様でいるか、何事^{なんに}もそんなことは知らないから、お房は機嫌^{きげん}よく父の傍へ来て、こんな歌を歌つて聞かせた。

「兎^{うさぎ}、兎、そなたの耳は

どうしてそう長いぞ——

おらが母の、若い時の名物で、

笹の葉ツ子嚙^のんだれば、

それで耳が長いぞ」

これはお雪が幼少^{おさな}い時分に、南部地方から来た下女とやらに習つた節で、それを自分の

娘に教えたのである。お房が得意の歌である。

三吉は力を得た。その晩、牧野へ宛てて長い手紙を書いた。

幸にも、この手紙は、彼の心を友達へ伝えることが出来た。その返事の来た日から、牧野は彼の仕事に取つての擁護者であつた。しかも、それを人に知らそうとすらしなかつた。三吉は牧野の深い心づかいを感じた。自分のベストを尽すということより外は、この友達に志に酬^{むく}うべきものは無い、と思つた。

四月に入つて、三吉は家を探しがてら一寸上京した。子供等は彼の歸りを待^{まち}侘びて、幾度か停車場まで迎えに出た。北側の草屋根の上には未だ消残つた雪が有つたが、それが雨垂のように軒をつたつて、溶け始めていた。三吉は歸つて来て、東京の郊外に見つけて来た家の話をお雪にして聞かせた。一軒、植木屋の地内に往来に沿うて新築中の平屋が有つた。まだ壁の下塗もしてない位で、大工が入つて働いている最中。三人の子供を連れて行つて其^{そこ}処で仕事をするとしては、あまりに狭過ぎると思われたが、いかにも閑静な、樹木の多い周囲が気に入つた。二度も足を運んで、結局工事の出来上るまで待つという約束

で、其処を借りることに決めて来た。こんな話をして、それから三吉は思出したばかりでも汗の流れるという風に、

「家を探して歩くほど厭いやな気のするものは無いネ——加おまけに、途中で、ヒドく雨に打たれて……」

と言つて聞かせた。女子供には、東京へ出られるということが訳もなしに嬉しかったのである。

その晩、お房やお菊は寐ねる前に三吉の側へ来て戯れた。

「皆な温順おとなしくしていたかね」と三吉が言つた。「サ、二人ともそこへ並んで御覧」

二人の娘は喜びながら父の前に立つた。

「いいかね。房ちゃんが一号で、菊ちゃんが二号で、繁ちゃんが三号だぜ」

「父さん、房ちゃんが一号？」と姉の方が聞いた。

「ああ、お前が一号で、菊ちゃんが二号だ。父さんが呼んだら、返事をするんだよ——それ、やるぜ」

娘達は嬉しそうに顔を見合せた。

「一号」

「ハイ」と妹の方が敏捷すばしこく答えた。

「菊ちゃんが一号じや無いよ。房ちゃんが一号だよ」と姉は妹をつかまえて言った。

大騒ぎに成った。二人の娘は部屋中躍おどつて歩いた。

「へえ、繁ちゃんも種痘ほうそうがつけましたに、見て下さい」

と在から奉公に来ていた下女も、そこへ末の子供を抱いて来て見せた。厚着をさせてある頃で、お繁は未だ匍はいもしなかったが、チヨチチヨチ位は出来た。漸く首のすわりもシツカリして来た。家の内での愛嬌あいぎようもの者に成っている。

「よし。よし。さあもう、それでいいから、皆な行つてお休み」

こう三吉が言つたので、お房もお菊も母の方へ行つた。お雪は一人ずつ寝巻に着更えさせた。下女は人形でも抱くようにして、柔軟やわらかなお繁の頬へ自分の紅い頬を押宛てていた。やがて三人の子供は枕を並べて眠つた。

「一号、二号、三号……」

この自分から言出した串談じようだんには、三吉は笑えなく成った。彼の母は、死んだものまで入れると八人も子供を産んでいる。お雪の方にはまた兄妹が十人あった。名倉の姉は今五人子持で、※の姉は六人子持だ。何方どちらを向いても子供沢山な系統から来ている……

翌日、三吉は学校の方へ形式ばかりの辞表を出した。そろそろ彼の家では引越の仕度

に取掛った。よく郊外の噂が出た。雨でも降れば壁が乾くまいとか、天氣に成れば何程工事が進んだらうとか、毎日言い合った。夫婦の心の内には、新規に家の形が出来て、それが日に日に住まわれるように成って行く気がした。

夫婦は引越の仕度にいそがしかった。お雪は自分が何を着て、子供には何を着せて行く、といういろいろに氣を揉んだ。

「房ちゃん、いらつしやい。着物を着てみましょう——温順しくしないと、東京へ連れて行きませんよ」

こう娘を呼んで言つて、ヨソイキの着物を取り出してみた。それは袖口を括つて、お房の好きなリボンで結んである。お菊の方には、黄八丈の着物を着せて行くことにした。

「菊ちゃんは色が白いから、何を着ても似合う」

と皆なが言合つた。日頃親しくして、「叔父さん」とか「叔母さん」とか互に言合つた近所の人達は、かわるがわる訪ねて来た。

「いよいよ御別れでござるかナア」と学校の小使も入口の庭の処へ来て言った。

「何物も君には置いて行くようなものが無いが、その鍬を進げようと思つて、とつといた」と三吉は自分が使用つた鍬の置いてある方を指して見せた。

「どうも済みやせん……へえ、それじや御貰い申して参りやすかナア。鍬なんつものは、これで孫子の代までも有りやすよ」

小使は百姓らしい大きな手を揉んで、やがて庭の隅に立掛けてある鍬を提げて出て行つた。

出発の日は、朝早く暖い雨が通過ぎた。長い間溶けずにいた雪の圧力と、垂下つた氷柱の目方とで、ところどころ壊れかかった北側の草屋根の軒からは、隣家の方から壁伝いに匍つて来る煙が泄れた。丁度、庭も花の真盛りであつた。

隣家のお婆さんは炊立の飯に香の物を添えて裏口から運んで来てくれた。三吉夫婦は、子供等と一緒に汚れた畳の上に坐つて、この長く住慣れた家で朝飯を済ました。そのうちに日が映つて来た。お房やお菊は近所の娘達に連れられて、先ず停車場を指して出掛けた。道普請の為に高く土を盛上げた停車場前には、日頃懇意にした多勢の町の人達だの、学校の同僚だの、生徒だのが集つて、名残を惜んだ。そこまで夫婦を追つて来て、餞別

のしるしと言つて、物をくれる菓子屋、豆腐屋のかみさんなども有った。三吉の同僚に、親にしても好いような年配の理学士が有ったが、この人は花の束を持って来て、夫婦の乗った汽車の窓へ差入れた。その日は牧野も洋服姿でやって来て、それとなく見送つていた。「困る。困る」

とお菊は泣出しそうに成つた。この児は始めて汽車に乗ったので、急にそこいらの物が動き出した時は、周章^{あわ}てて父親へしがみ着いた。

ウネウネと続いた草屋根、土壁、柿の梢^{こすえ}、石垣の多い桑畑などは次第に汽車の窓から消えた……

汽車が上州の平野へ下りた頃、三吉は窓から首を出して、もう一度山の方を見ようとした。浅間の煙は雲に隠れてよく見えなかった。

乗換えてから、客が多かつた。三吉は立つていなければ成らない位で、子持がそこへ坐つて了えば、子供の方は一人しか腰掛ける場処も無かつた。お房とお菊とは、かわりばんこに腰掛けた。お繁はまた母に抱かれたまま泣出して、乳を宛行^{あてが}われても、揺^ゆられても、泣止^{なきや}まなかつた。お雪は持^{もて}余^{あま}した。仕方なしにお繁を負^{おぶ}つて、窓の側で起^たつたり坐つたりした。

午後の四時頃に、親子五人は新宿の停車場へ着いた。例の仕事が出来上るまでは、質素にして暮さなければ成らないというので、下女も連れなかった。お房やお菊は元気で、親達に連れられて始めての道を歩いたが、お繁の方は酷く旅に萎れた様子で、母の背中に頭を持たせ掛けたまま、気拔のしたような眼付をしていた。時々お雪は立止って、めずらしそうに其処是処の光景を眺めながら、

「繁ちゃん、御覧」

と背中に居る子供に言つて聞かせた。お繁は何を見ようとしなかった。

郊外は開け始める頃であつた。三吉が妻子を連れて移ろうとする家の板葺屋根は新緑の間に光つて見えて来た。

青空文庫情報

底本：「家（上）」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年5月10日発行

1968（昭和43）年6月30日17刷改版

1998（平成10）年9月5日51刷

※底本は、35ページ9行目で鳳凰の「凰」の「白」を「百」と作っています。作字上の誤りと判断し、「凰」をあてました。

入力：（株）モモ

校正：藤田禎宏

2000年12月2日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

家 (上)

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 島崎藤村

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>